
~ 匣庭物語 ~

tiki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

～匣庭物語～

【Nコード】

N9089N

【作者名】

tiki

【あらすじ】

何もかも削ぎ落して、振り払って駆け抜けてきた彼に救いはあるのか。たった一人の壊すために縛り付けられた男が、これまでに必要だと捨ててきた大事な何かを取り戻していく物語。

12/5 題名を変更。

第一幕 序章（前書き）

プロローグです。独自設定を含みますので、ご容赦ください

第一幕 序章

よお……また来たなあ

その声を聞いて俺は、再び此処へ辿りついたことを悟った。

終わりのない終焉、報われない生。

だが、その繰り返しも終わりを告げる時が来たのだらう。

「……………」

「だんまりかよ。チッ、つまんねえヤロウだぜ」

心底面白く無さげに悪態をつく男。だが、コイツはどこまでも快樂主義で、何処か破綻している男だ。
まともに取り合っていられるわけが無い。

「……もう、代価は払い終えただろう？早くしろ……」

「ああん？・・・代価、ねえ。それは違うなあ。お前の運命を有効利用した取引ってえやつだろおが。それにその代価こそがお前の持つ因果ゆえの、役割ってやつなんだがね」

クツクツ、とくぐもった耳触りな笑い声を挙げながら、目の前の男は俺を見下ろす。だがその姿は霞がかつていてはつきりとはしない。すぐ目の前から声が発せられているにも関わらず、だ。その理由は何か？

それはこの男が人間ではないからだ。

「お前が転生する世界は安定を迎える。・・・お前という“悪”または“絶対の敵”を倒すためになあ。皮肉なもんだ。お前という圧倒的・絶対的な敵対者という役割を持った奴がいなければ手を取り合うことはなく、緩やかに自分たちは滅亡を迎えていたというのに
よお
」

そういつて男はニヤニヤと笑いながら、指をパチンと鳴らす。すると、これまで俺とヤツしか存在しなかった空間に、俺がかつて転生した世界の光景が次々と映し出される。

BETAという異形の化物に蹂躪されていく人類。

聖杯なるものを求めての魔術師達の殺し合い。

圧倒的な強者として君臨する強国の長とそれに対抗しようと反逆す

るものたち

……様々な光景が行き通う。俺はそんな世界で“悪”とよばれる者を纏める、またはその一派の中の倒さなければならぬ敵としての役割を与えられてきた。

その役割を果たしている間は全く前世やら何やらの記憶や契約の事など覚えていない。だが、役割の最期オフリを迎えるたびに記憶が蘇り、此処に還ってくる。

「……だが、その“安定をもたらす為に存在する敵対者”としての因果も今回の転生で取り除かれる。そういう契約だったはずだ」

そういつて凄みを放つ。ヤツには何の意味も無いことはわかっているが、これまでこの魂に刻みつけた歳月と経験は俺の霊格を昇華させている。この場のくだらない茶番を終わらせることは出来る。

相手が尋常な存在なら、その魂まで震え上がらせるような威圧を眉ひとつ動かさず「分かった、分かった」と軽く受け流して姿勢を僅かに 正す。ようやく本題に入るようだ。

「ああ、その通り。俺は契約を違えるようなことはしない。これで俺の受け持つ世界は安定を迎えた。よって、お前にまるで呪いのごとく付き纏う、その因果を取り除いてやろう。そして新たな人生を…… だったなあ？」

「ああ」

そして男の手から光が溢れ、俺の意識が薄くなる。

「お前がこれまでの戦いで身に付けた経験や知識・あとは技か？それは報酬としてそのままにしてやらあ。お前がこれから向かう世界の抑止力を受けないよう調整して、だがな？俺の管理からは外れている世界だ。だから、お前の好きなように生きろや」

そして俺の意識が完全に無くなっていく。

「……ああ。あと、お前の霊格が高くなったせいで只の人間としての転生は無理みてえだ。……また何かしらの役割を背負わされるかもなあ。はっはっはっ！ やっぱおもしれえわ、お前。」

その言葉が届くことなく彼は転送された。

第一幕 序章（後書き）

そして彼は飛ばされる。主人公の名前はまだ明かしません。

第一話（前書き）

独自設定を含みます。その点を踏まえてご覧ください。

第一話

俺は、新たな生を受けた。

といっても、マトモな生まれ方ではなかった。

・・・此処は、どこだ

俺が転生して初めて見た光景は、真っ赤に染まった紅い月だった。深淵な魔力を感じさせるソレは、まるでこの身を流れるのような鮮やかな色をしていて・・・

ハッと意識を急上昇させる。注意深く周囲を見渡す。

先ほど見た光景はどこにもない。消えてしまったかのように、まるで夢でも見ていたかのように。

しかし替わって周囲に存在するものは木、木、木……。ここはどこかの森のようだ。

その雰囲気は中世ヨーロッパを連想させる、人が踏み入れるには不気味すぎるものである。人を寄せ付けない深淵な何かを感じさせる。

・・・とりあえず何が起きているか把握しなくては。

ゆっくりと身を起こし、足音を完全に殺して歩き出した。

暫く周りを探索していると、小さな泉を見つけた。周囲を警戒しながら近寄り、泉の水をガブガブと飲んで喉の乾きを癒す。

顔を泉から離し、水面を見ると自分の顔が見えた。

肉体年齢は大体20歳辺り。容姿は黒髪で、瞳の色は吸い込まれそうなほど黒い。

一般的に見て端正な顔、だといえるがその年齢には不釣り合いといえる程どこか老成した雰囲気醸し出している。

身長はおおよそ180cm代後半位だろう。身体付きはガッチリしているというよりは、細身だが研ぎ澄まされた刃物のように引き締まっている。

動きを阻害するギリギリまで鍛え上げられ、しかし柔軟性も兼ね備えた理想的な肉体である。少なくとも“戦闘”という面ではこれまでの記憶を省みても最高のスペックを誇るだろう。

だが、新しい生というにはこの状況はおかしいだろうか、此処はどこだとか、色々言いたいことはあるが、まず差し迫って解決しなければならぬ問題がある。

「・・・服を探さんとな」

とりあえず全裸なのはいただけない。これまで壮絶な生涯を生きてきて、大抵のことには耐性があるとは自負してはいるが流石に変態にはなりたくない。

そして小さく溜息をつき、空を見上げる。喉の渴きを癒してかなり落ち着いようだ。

先ほど見た、いや幻視していた紅い満月のことをボーツと思い出しから、今自分が置かれている訳の分からない今の状況に愚痴をこぼす。

自分を此処に送ってくれた外道鬼畜自己中最低野郎に
向けて

「アホが・・・あの馬鹿が何かミスでもしやがったのか・・・？」

憎々しげに、自分を此処へ送った男を罵倒する。少しばかりのアフ
ターケアは有ってもいいのではないか？そんなことを思っていると

「
ガアツ?!?!?!」

突如として激しい頭痛が彼を襲う。そして膨大な情報が彼の頭の中
に無理矢理入り込んでくる。

星とのリンク・この星のこれまで歩んできた歴史・生命の誕生・主だった生き物達の盛滅し次々と代替わりしていく光景・繰り返される輪廻…

ありとあらゆる情報が彼の頭の中に流れ込んでいく。普通 of 精神の持ち主であれば狂い死ぬ程の激痛と凄まじい量の情報を彼は受け止める。

・ ・ ・ ・

ハアハアと息を荒立てながら、そして全てを受け切った彼は自分の置かれた現状を理解する。

「畜生・・・今度は世界に捕らわれるのかよ・・・」

そして仰向けに横になり、酷使した脳と身体を休める。だが、これから始まる出来事を思うと気が重くなる。この世界は実験を終えた。もう様々な生物が生まれ得るに足る環境を整え終わったのだ。

・・・そして世界はある存在^{モノ}を欲する。

「世界、いや世界の抑止力としての存在足る生物。 “真祖”・・・」

そしてこれから始まる事となり、強制的に参加を余儀なくされる戦い。

「そして生みだされた真祖十五体の中から抑止力となりうる存在を
選別するための、この星を舞台とした生存競争^{バトルロワイヤル}・・・」

そして俺は“星の記憶”を受け取った疲労に身を任せ、死んだように眠りについた。

消え失せていく意識の中で思ったことは唯一つ。

また理不尽な役目を背負わされるのかよ……

そして俺の意識は暗転した。

第一話（後書き）

最初だし、ただこの話では主人公と真祖の設定が中心ですので。サ
クツといきました。

第二話（前書き）

この作品は独自設定を含みます。ご理解ください。

第二話

第二話

目を覚ました後、俺がまず最初に行ったことは拠点となる住居の作成と状況の整理。

この世界はどうやら生き物の創造という実験を終え、そして今後生まれ得る生物達が何か予期せぬ事態により“この世界に”破滅を引き起こすことになったときに、その破滅を防ぐ抑止力となる真祖を選別するために様々な霊格の高い魂を呼び込んだらしい。

そして俺はその中の一体として生み出された。とんでもなくヘビーで地獄を見ること必須の生存競争バトルロイヤルへと駆り出されてしまった、ということらしい。

そして、この身体は元々は人間であった俺の魂が理想とする最高の戦闘能力を発揮するために作られた存在であるため、今この時いるヒトと呼べるような生き物は俺のみ。どの真祖も基本的に強靱な肉体と、そして魔力・気というものを持っているらしい。

だが俺は、他の真祖と比べて肉体が小さいために肉体の強度自体は、はるかに劣るに違いない。かつてない程強力な肉体を手に入れた筈だが単純勝負で一番不利なのは俺だろう。

他の奴らがどんなやつらか全く分からないことが苛立ちに拍車をかけるが、これまでの経験が俺にはあるし、見えない敵に振り回されるのも馬鹿らしい。そして何よりも気に食わない。

俺の新しい生を邪魔する奴らには、悪いが消えてもらおう。

そして真祖としての自分を創る作業と殺し合いが始まった。

これは最初の勝利を得た後に気付いたことであるが、真祖は肉体を自分の思うように進化させることが可能なようだ。つまり他の真祖と戦うにためにより強くなれるよう自分の願望通りに進化させるこ

とが可能である。

だが、どういう時に肉体を改造・・・いや進化を遂げるのかというと、同じ存在である真祖と戦い勝利した時。・・・勝利し、下した相手を喰らったあとであつた。

これはそれなりに常識から外れていた俺でさえ抵抗を覚える（倒した相手が異形であるため）が、生き残るためには四の五の言つてられない。なにより同じ行為を他の参加者たちもしていくのだ。つまり、やらなきゃやられるってことだ。生き残るためには一度の進化で効率的に進化させていくことが求められる。

これは、俺にとっては大きなアドバンテージである。俺に比べれば他の奴らは知性が低いようだ。俺の様に効率的に進化させるというのは難しい。強力過ぎる能力ではそれを身に付けるだけで其の進化は終了し強大すぎる力に振り回され、弱すぎでは強靱な肉体を持つ真祖には通用しない。

生き残るために必要なのは応用の効く汎用性の高いモノ。本当の切り札というものは一つあればいい。単体ではなく他と組み合わせることのできる汎用性があればいくらかでも発展させられるし、いくらかでも誤魔化しが効く。それだけで俺は十分に勝利を拾える。使いこ

なせない程に強い力など死に繋がる隙を生むだけだし、いきなり手に入れて使いこなせるワケがないのだから。

そして切り札を切る時は相手を確実にソレで仕留める時。 そのためには布石というものが必要不可欠である。

俺はこれまでの転生の記憶から、より戦闘に適したモノを身につけていった・・・。

最初

他の真祖の戦いを潜伏しながら観察。そして片方が勝利した時に生じた隙を逃さずに勝利。これによって他の真祖の基本的な力を把握。

二体分を食し進化を遂げることに成功した。

この時に

肉体再生力の強化（完全に消滅しなければ魔力を相応に消費し再生する）

“前”の世界を参考に、相手の魔力等を用いた技能を解析・模倣・看破する魔眼（ただし固有スキルは模倣や解析ができない。かなりの量の魔力を消費するためにあまりに長時間の使用は好ましくない）

自身の影の複製を作り出せる能力（ただし影のみであるため、実態を持たないので斥候としてしか使えない。気と魔力を少量消費するが固有スキルとしての進化のため燃費がいい）

獲得。

戦略プランに必要な能力を得る事に成功する。見た目からは判断されない能力として“吸血鬼”を採用。肉体強度と再生力は両立が出来ないことが判明する。現状でも十分な身体能力のため再生力を優先した。

実際に戦闘を行うことにより、これまでの戦闘経験がどこまで通じるか把握することを主目的とする。

今までの魔法は体系が違いためか一切使用不可能。逆に“気”に関しては単純なものならある程度は同じように使用可能。これまでに身に付けた基本的な身体技能はどれも使用出来る。

この状況下で行う。

一時は肉体のスペックの違いで苦戦を強いられるも勝利。幾つかの能力の模倣に成功。もう引き出せるものもない為いくつかの肉体の^{サンプル}標本を残し捕食。

相手を捕食することにより

相手の魔力を吸血によって取り込むことができる（補給率は血に含まれる魔力の10分の1）

影の複製数の上限を上げる。これまでの五体から、五十体まで増やす。

三度目

残りの真祖は八体となる。

相手の広域殲滅魔力波により重傷を負う。再生する間も無い間隔で第二波を放出できることを確認。撤退を余議無くされる。

影による監視により、あの魔力波による攻撃は日中でしか使用できないことが判明するも、対抗策を練る前に他の真祖を捕食し克服。

しかし魔力波を放つ前の動作のパターンを把握。有効範囲を把握。

一撃離脱法・遠距離攻撃によって魔力波の乱発と休息の妨害を行う。

魔力の残量が少なくなった頃合いを見計らい、吸血によって魔力を全て吸引。撃破・捕食

吸血することにより記憶を読み取れる。（血の鮮度と量に左右される）

魔眼に能力追加。眼を合わせるだけで相手に幻術を使用できる。

影の複製に実体を持たせるように改良。本体の十分の一程の実力

しか持たない。

「焼き鳥、うめえな・・・」

残り四体

「ここまでで手に入れた能力」

・魔眼

相手の魔力等を用いた技能を解析・模倣・看破する。眼を合わせるだけで相手を幻術に術中に落とすことができるように後に進化した。（ただし固有スキルは模倣や解析ができない。かなりの量の魔力を消費するため常時ではなく任意で発動している）

デウファイト
・吸血

相手の魔力を吸血によって取り込むことができる（補給率は血に含まれる魔力の10分の1）

吸血することにより記憶を読み取れる。（血の鮮度と量に左右される）

ハイドエッジ
・隣に潜む暗殺者

自身の影の複製の作成及び実体化させる能力。最大五十体。本体を中心に半径15kmの中で存在できる（ただし供給を無視すれば範囲外であっても存在できるが実体化は出来ない）。固有スキルの進化であり、少量の気と魔力の消費で使用できるためかなり燃費が良く主人公は多用する。実体化も出来るようになったため、かなり運用の幅が広がった。

複製達とは感覚を共有できるようになっているため並列思考を必要とする。実体化しても複製の出せる実力は最大でも本体の十分の一。さらに強さにはある程度の平均が存在しており、複製の数が増えれば増える程その平均の値は下がっていく。

そして複製達は魔眼は使用できない。

- ・再生能力

第二話（後書き）

とりあえずここまでではサツクリと話を進めてきましたが、次話からは掘り下げていきます。多分初めての戦闘描写になるかと・・・が
んばります。

第三話（前書き）

この作品には独自設定が含まれます。ご容赦ください。

第三話

第二話

バトルロワイアル
生存競争も残り四体。

取り合えず、この戦いを勝ち抜くために必要なモノは最低限揃った。
基本方針はこれまでと同じだ。

確実に敵を捕捉、無駄なく自分に必要な情報を引き出し、
そして必ず先手を打つ。

これまでに手に入れた能力はどれも応用の幅が効き、例え相手に能力を知られても苦にはならないものばかり。

さらにどれもこれからの鍛錬次第でさらに昇華できるよう進化を遂

げた。

あとは鍛錬あるのみ。最近になって手に入れた技能とうまく擦り合わせる作業を一つ一つ潰していけばどれも化けていくに違いない。

・・・やはり当初の予想通り俺以外の真祖はどれも人外が存在だけの 幻想種ばかりであった。まるで鬼のようなヤツもいれば鷹とライオンが混ざった化け物もいた。これまで俺が見たことがない程強力なドラゴンもいた。

正直いつて真正面からバカ正直に戦ったらコッチが不利になる。何かしらの策やら下準備は必須なのだ。・・・そんなことが出来るのも必要なのも俺ぐらいしかないがな。

俺を除いた残り三体の現在位置も影で掴んでいる。

一体は黒竜。絶対に消えない黒い炎の息吹を吐き出してくる。だが、戦いの跡を調べると能力がソレだけではないことがわかる。頑強な鱗で覆われた身体は生半可な攻撃は通じない上に爪は相手の障壁を破壊する能力をもっている。

次に、まるでスライムのような軟体であるのだが身体を硬化させることが出来るもの。知性が低いから能力もシンプルであるが、どれもその分強力で隙がない。特に液体ゆえに急所がないというのも厄介な点だ。

最期のヤツは・・・ある森に潜んでいることは分かっている。この森からは真祖独特の禍々しい魔力が隠すことなく発せられている。そして、警戒すべきは、この戦いが始まって一度もそこから動いていないのに最期まで勝ち残っているという事実だ。他の真祖もその森に入って戻ってきたものはいない。だが、奇妙なことにいまだに俺の影が捕捉できていない。・・・コイツが一番やばい。唯一何の情報も掴めない。

そして情報を掴むためには他の真祖との殺し合いを観察することが

手っ取り早く、确实だ。特に最後のヤツの情報はどんな小さなものでもいいから欲しい。

然るにいち早く他の二体の内一体を食して、気配を消し、もう一体との戦いを観察する必要がある。

そして俺のいるこの場所から一番近いのは黒竜^{トカゲ}か。
えだ。

次はおま

彼は強かった。 どこまでも、どこまでも。

その息吹は全てを焼き払い、その強靱な鱗は全ての反逆を弾き、その四肢は全ての障壁を引き裂いた。

その瞳の前にひれ伏さないモノはなく、その翼が有れば何処へでも行けた。

そして今回の生存競争も例外ではない。彼は竜の中の竜。これといった苦戦も無く弱者を屠ってきた。そう彼は強者だった。

だからこそ、今回の敵には驚きを隠せなかった。自分よりもあまりに、あまりにも小さきモノ。よくぞ自分の前に出れたものだ。その矮小な身体では勝負にすらなるまい。

腹の足しにもならないであろう獲物に用は無い。消える。

そして、自らが誇る全てを焼き尽くす息吹を吐き出そうとしたその時、その小さきモノは

「

」

嗤った。

全ての技能を引き出そうとも、思ったが・・・やめた。この程度の頭しか持たないモノに期待しても無駄だ。

惑え、奈落の底へ

魔眼を発動させる。先程までは深みのある黒色だった瞳が一瞬で蒼く輝き始める。そして自らの幻術の術中へと相手を叩き墜とした。

全身に流れる魔力の流れを完全に把握。神経系に侵入。五感を支配。

この作業を一工程でこなすこの眼は自分でも凶悪だとは思うが、まんまと引つかかる其の低能を恨め・・・。

コイツの魔力を操り、息吹を暴発させる。

ドゴオオオオオオオオオオン！！！！ブチャア！！

愚図の体内で爆発音と何かが破裂する音が聞こえる。内臓の類が潰れたようだ。だがまだだ。まだ足りない。

一瞬で莫大な量の気を練り上げ拳に集中させ、一歩で口から黒煙を上げている竜の懐に入り込み、そして　突き上げる。

まるで絵具をぶちまけたような音を立て、そして殴られた腹部を不自然に凹ませながら竜は空中へと浮かび上がる。だがその先で待ち構え、こみ上げる液体が口から吐き出される前に地面へと叩き落とされる。

地面にヒビを入れるほどの重量が生む反発力をその身で一身に受けた竜は悶絶した。

そして一拍

「まだ終わってないぞ・・・？」

その声に反応し、周囲を見渡すと自身を取り囲む影、影、影。
それはさながら死神の軍勢。そして、その軍勢の主たる男が手を振

りおろすと同時に一斉に飛びかってくる。

G A A A A A A A ! ! ! ! ! ! ! !

だが、我が身は王。竜の中の竜たる自分を、そのような雑兵ごときで討ち取れると思うてか

!!

そんな憤りと、先程格下であろう敵にいいようにされた憎しみを込めた咆哮をあげる。

しかし

「ああ、下等生物。おまえの敗因は」

目の前の小さきものはどこまでも、どこまでも

「本当に」

恐ろしく

「　　運が無かったこと、だなあ……」

そして今まで見たことが無いほどの

「じゃあな」

強者だった。

・・・爆炎が辺りを焼き尽くす。そして目の前の獲物はその炎と衝撃によってその身を地面へと横たえた。

周囲に配置した影達を、先の戦いで複製した魔力波を応用して暴発させた。結果はこの通り。うまく配置すれば如何様にも威力を増幅できる。もっとも完全に制御し切るにはまだまだ時間が必要であるが。

そして、倒れ伏した敗者の下へとゆっくりと歩く。

だが、てつきり死んだと思っていたが、まだ微かに息があった。その呆れるほどの生命力と防御力には辟易する。・・・が、生きているというなら存分に活用させてもらおう。

「その血に宿る魔力と“情報”貰い受ける」

そして血を一気に吸い取る。そして魔力とともに“記憶”を読み取っていく。

俺にとってはいらない記憶を次々と破壊し、終に有益と思われる情報を得る。

「ふむ、なるほど」

どうやらあの森はある種の結界のようだ。俺自身は発見されることを恐れて、空から見たことは無かったがこいつは竜。その翼でもってその周辺を飛んだことがあるようだ。だが、魔力自体は感じてもしそのような生き物はどこにも見当たらなかった。

俺の地上の探索にも、空からの探索からも逃れうる存在。いや、見つけられない存在？

「ということとは・・・？」

ある一つの推測が立つ。だが、もしその予測が正しいとするのなら・・・？

「厄介だな・・・」

ならば今ここで最後の殺し合いに備えて、切り札となる能力^{カード}を創らなければ

ある森

そこには流体状のある生物が入り込んでいた。その身体を細く細く伸ばした糸のようなモノを周囲に張り巡らせ自身の獲物たる存在を探し出そうとしていた。その極細の糸はその主を中心にして半径2 kmにも及ぶがいまだに捕捉できない。

鈍い衝撃

何か巨大なもので殴られたかのような衝撃を受け、身体が飛び散る。しかし彼の身体は再生力を発揮して元に戻り周囲を警戒する。

この後、森の主との戦闘が始まり、不滅であるはずの彼は敗北し、その血肉の糧となった。

第三話（後書き）

次からは、これまでよりかなり話が長くなりそうです。

第四話（前書き）

独自設定を含みます。厳正な原作準拠以外は受け付けない方はブラウザの戻るを押して他の素晴らしいSSをご覧になられた方が懸命です。

第四話

「・・・よし」

先程倒した竜の鱗や皮を加工し簡易的ではあるが鎧を作成した。

先程の戦闘でも、あれほどの過剰殺傷ともいえる攻撃を受けて、尚も原型を留めた頑丈さを見て加工してみたのだ。

基本的に皮鎧であるため動きを阻害しない軽さ、そして消えない炎を吐き出す竜であつたためその防火性にも優れている。この二つを兼ね備えた新しい防具は生半可な攻撃や炎はすべて弾き飛ばしてくれることだろう。

これまでも、他の真祖で使えそうな部位はほとんど加工して自分の装備を強化している。流石にどの生き物も規格外だけあつて素晴らしい性能を発揮する。ただでさえハンデがあるのだ。少しでも戦いを有利にするための努力を欠かすことなどしない。

他の真祖に比べて弱い部分があるのなら、それを何かで補うなりす

ればいいだけの話なのだからな。

そして現在、俺は最期の真祖が待ち受けていると思われる森の中にいる。

鎧の作成にかけていた時間は残った一匹についてひたすら思考していた。自分が竜を捕食している間には既にもう一方の真祖同士の戦闘は終わってしまったからだ。

そしてやはり勝者は森の主のようだ。最大の懸念を感じている相手の戦闘を見逃してしまったことは痛いが、これまでの情報からでも推測できる部分はある。竜から得た情報でその推測も信憑性が増した。

そして何よりも、自分も切り札足る能力を手に入れたことが大きい。俺の推測が正しければ、使う事態に陥る可能性は十分にある。ただ、その切り札は強力であるがゆえに、それなりの制約や条件がある。

・・・一発で全て終わるが一発で決めないと全てが終わる。それほどまでに強力な能力であつた。^{チカラ}

正直な話、使わずに勝利したいが……そううまくはいかないだろう。

基本的な戦力は拮抗しているはずだ。だが、ヤツはこれまで待ちの姿勢で勝利してきた。すなわち森の中はヤツの腹の中といったもいい。そこに特攻を仕掛けるような下策はとりたくないのだが……。

衝動の赴くまま森に広域の炎でも撒き散らしてやりたいが、生憎その手の魔法はこの世界では全く使えない。そしてあの森は湿地帯。そしてなおかつ沼地が方々に点在している。

とてもではないが生半可な炎では焼き尽くすことなどできないし、そもそもその程度の炎では真祖に通用する訳がない。

よく考えればあの竜を戦わせれば、あの炎でイケたんじゃないかとも思ったが、あの低能では炎を吐き出す前に不意打ちされて終わりだろう。それに何よりあのスライムもどきとはやりたくなかった。俺と相性が悪すぎるし、そもそも喰えない。煮ても焼いても。

強化と相性の重しが俺の天秤を傾けたのだが、まさかここまで戦闘が早く終わるとは思ってなかっただけに思わず頭を抱えてしまった。

だが、ここまで来てしまったのだから腹を括って殺るしかないだろう。万全ではないが、最悪ではない。打てる手は打ったのだ。あとはヤツが俺の思う通りに動くか、否か。

そして生え茂る木々の間を周囲を警戒しながら歩く。視覚のみではなく全身の感覚全てを用いて敵の気配を探る。

影も用いているがその数は十。これは術の特性を用いた所為でもあ

る。普段のように視覚だけでなく、実体を持たせずに五感をそれら全てに繋ぐという細かい作業はこの能力を手に入れて日が浅い自分にはこれで精いっぱいであった。

これ以上思考を分割すると意識に空白が生まれてしまうのだ。

そして森の奥へ行けば行くほど真祖の気配は濃くなっていく。・
・これが余計に俺の警戒心を煽る。気配を隠すのではなく、むしろ誇示するかのように森全体に広がらせている。これはまるで・・・。

そして後ろから一瞬の風切り音が俺の耳に入る。全身の感覚を総動員して身体を前傾させて転がると、頭の直ぐ上を何かが通り過ぎる。

その頭上を通り過ぎた何かは周りにあつた木々を薙ぎ倒した。ミシッ、といったへし折れる音では無い、パキヤッ、という破碎音はそ

の振り切られたものの一撃のキレが半端ではないことを示した。

前傾した勢いを利用して転がり、襲撃者の姿を確認する。

「やはりか・・・」

そこには一本の周囲の木と姿は全く変わらないが 枝をしならせ木の根をまるで足の様に動かして近寄ってくる木の姿があった。

「色々予測はしていたが、周囲に完全に溶け込むその姿・・・道理で気配はするのに姿を捕らえられないワケだ・・・。最初は透明にでもなっているかとも思っていたが、生き物の生活の跡すら無いというのは、な。

セオリー通りだ。隠すのなら“在って当然のモノの中に紛れ込ませる”。正直ここまで隠匿し続けたのは大したものだ」

だがな

「背後からの奇襲で仕留められないようでは無意味に等しい！！！」

繰り出された鞭のような枝を掻い潜り、一瞬で間合いを詰め、拳に
気を込めて。

力一杯

「吹き飛ばええやああ！！！」

殴り飛ばす！

ミシャアアアア！！

心地よい音色と共に粉々になって吹き飛んでいった。バラバラになった枝やら紫色の体液やらが周囲に撒き散らされていく。その光景は実に爽快な気分になさせてくれる。

その様子を残心を怠らずに見つめる。粉微塵になった相手が再生する様子は無い。

「・・・終わったのか？」

そうポツリと呟いた瞬間、ビシビシと周囲の地面が罅割れていく。一瞬でその場から離れ、安全と思われる場所へと飛び退く。

「クソっ!!」

そして周囲を警戒する。凄まじい轟音と共に辺り一帯の地面という地面にヒビが広がっていく。まるで地震のように大地が荒ぶり、揺れ動く。その音は先程の場所を中心にして森全体へと広がっていき、そして

その音がピタリ、と止まった。

．．．ざわざわ、ざわざわ、ざわざわ、ざわざわ、ざわざわ、ざわ
ざわ、ざわざわ、ざわざわ、ざわざわ．．．。

今は真祖ゆえのその聴覚の鋭さを恨めしく思う。俺の今想

像したことはあつてはならないことだ。今現在の状況においては・・。

外れてほしい。

そんな思いを裏切るかのようにその音は耳の奥にまで響きわたる。その、普段は心を落ち着けてくれる木の葉の擦れ動き、靡く音が今は少し不吉な音に聞こえる。・・その音が森全体からある一点に向かつて集まってきたような、そんな音。

そう、俺のいるこの場所へと

「ハア」……マジかよ・・。」

俺の周囲の半径五十メートル程だけポツカリと空間の空いた“森”。

「“木”がオマエじゃなくて、“この森自体”が“オマエ”ってかあ？はは、何て滅茶苦茶なヤロウだ・・・！」

俺は文字通りヤツの『腹の中』に誘き寄せられてしまったらしい。どうやらこれまでの戦いで植えつけられた“敵は十四体”という先入観に捉われていたようだ。自分も似たような能力を持っていたくせに、な？

“自己増殖能力”

植物の真祖に相応しい、正に“らしい”能力だ。そして最悪といつていい武器・・・！同じ真祖同士が一对数千……。戦力差は余りに絶望的。

・・・ならば、俺は何がある？この状況を覆しうる、数多の並列世

界で常に不倶戴天の“悪”あるいは“敵”としての役割を果たし続けてきた、この俺にある絶対的なものとは？

傷つけて傷つけられて、殺し殺され、憎み憎まれ、裏切り裏切られてきた。

何度も転生を繰り返す内に、どんどん記憶は薄れていく。今では最初の人生のことなどほとんど忘れてしまった。そして失う痛みでさえもなくなっていく

だが、記憶はなくともこの魂は覚えている

諦めてしまおう。“役割”をこなす中でそう思う度に、一時の間とはいえ『止まり木』と言える存在に出会えたこと。愛し合えたこと。

大多数には理解されなくても、ほんの僅かながらも理解者は“存在した”

どんな人間として生まれても“根っこ”だけは変わらなかった。

あの原始の場所へと還る度に思い出す、あの“約束”だけは絶対に薄れはしなかった

『求める』だけ『意味』は削がれていく。置いてきた人の数だけガリガリと削られていく。・・・そんなことは分かっているんだよ。

だからこそ『成さなければ』ならない

……決まってる。

「不屈」……！俺の魂は絶対^{コソ}に折れねえ……！例え単身で万を超える数の敵と相対しようが、恥辱に塗れようが、どんな“理不尽”に見舞われたとしても」

絶対に

「俺はどんな運命を辿ろうが、天寿を全うする……。少しでも、僅かでも、俺は『生きる意味』を見つけなきゃいけねえ……。！」

もし次生まれ変わったら、絶対に“シアワセ”になってく
さいね！約束、ですよ……？

そう、一番最初の人生の最期に心の底から愛した女と交わした約束……優しい温もりを与えてくれたアイツと交わした、約束。どれだけ記憶が薄れようが色褪せなかった、懐かしい『過去』の記憶……

そして、出来ればですが・・・

今度こそは・・・！

“次”も私を愛してくれたら、嬉しいなあ・・・

「来いよ。単細胞モドキ共が・・・教えてやらア・・・！」

俺から、そして周りの敵からも膨大な魔力が溢れた。まるで開戦の関を挙げるかのように。

「本当の、
“格”の違いってヤツをなあ……!!」

第四話（後書き）

初めてのアクション描写になると思います。

第五話（前書き）

この作品は独自設定を含みます。その点を踏まえてこの先へお進みください

第五話

“私”はこの世界へと生みだされた。全ての始め。全ての祖。全ての起源として。そして私の存在が固定されこの世界に役割を負った存在として刻まれてから開始した、『壊す存在』を選別する戦い。

どの戦いも流石に生物としての頂点に立つモノ同士の戦いだけあって激しいモノばかりであったが、一体だけ毛色の違う者がいた。

私と姿形が似ているが、また違う存在。『ヒト』と呼ばれる存在の形態をしている真祖。他のどれもが幻想種といえるなか、その者だけが『ヒト』という存在だった。

最初はこう思ったものだ。なんと哀れな。なんと場違いな戦場へと放り込まれてしまったのだろう、と。だが、違った。そのヒトは強かった。・・・桁外れに。

種族として劣っていることなど齒牙にもかけない。戦闘巧者なのは間違いない。勿論、能力や戦闘能力も凄まじかったが、だが何よりも“生への渴望”。

この一点においては、本能で理解している他の真祖とは違い、理性で、本能で、何より魂から湧き出るとでもいえいいのだろうか・・。筆舌しがたいまでの違いを感じさせた。

燃え滾る程の熱さと時を止めるかのような冷たさ。ソレが同じ器に存在している・・・。そんな、一見矛盾したようदैて本質は同じ存在。

“魂”が違う。ただ長く生き、自然と一体となり靈格が高位になった私や他の真祖とは全然違う。彼は異端なのだろう・・・。

自身の心に強く抱く死してなお曲がらない信念。ただただ只管、強くあれ。ただそれだけのために自らの魂を傷つけ、削り、打

ち据え、鍛え、錬魔し、それでもまだ足りないと言き抜いた末に高位の魂にまで登りつめた存在

なんという異端であろうか。まず言えることは“ありえない”だ。どこにそんな頑強な精神を持つ生命があるだろうか。

まるで無機の鉱物のように己の魂を削り打ち据えていくなど・・・ありえない。もし、そんなことをすれば我々真祖へと至った魂でさえも崩壊をむかえるか、良くて“存在”としての欠陥を抱えることになるであろう。そして結果として消滅を迎える。

だからこそ、ありえないのである。彼の者は自己を保っている。完璧とも言える状態の魂を。とてつもなく強靱な精神。

正に“鉄のような自我”をもつヒトであった

……そして、終に始まった“選別”の最終戦。彼の者は生き残っていた。

着々と力を身につけ、おそらく一番多くの真祖を葬ってきたのも彼の者である。そして眼前の光景にも驚かされる。

一対数千

戦力差は圧倒的。同じ真祖同士の戦いにおいてこの趨勢を覆すことなどは考えられない。終わった

と、彼の者を目にする前ならば、そう断じていたに違いない。

だが、果たして・・・

「最期に立っているのはどちらになるのだろうか・・・？」

『壊す存在』とは相反し、また同格の生物として創られた『生みだす存在』である私が気にすることではないのだが、な。

そう一人ごちて眼前で行われている闘争を見つめていた・・・。

影を爆発させる。幾重にもその余波が重なりあうように、敵を誘導し数を減らす。奔る閃光と轟音、そしてその衝撃は殺戮領域に存在するモノ全てを容赦なく粉々にする。

だが、ワラワラとその空いた空間へと押し寄せる敵。生半可な攻撃は通用しないのは分かっていたことだが、やはり同じ真祖。たかが影一つ分の爆発では傷一つ付かない。このように何重にも重ねなければ殲滅すらもままならない。

また、厄介なことに奴らは俺には及ばないものの、再生能力まで備えていた。

表面が多少抉られようがある程度時間を置けば何事も無かったかのように、元へ戻ってしまう。すなわち、完膚無きまでに粉碎・破壊しなければ無意味なのである。

チイツ、また囲まれてきている。

魔力を両足に集中させる。そして、相手を足場のように使い飛び跳ねてその場から離れていく。勿論、飛び跳ねるついでに相手を攻撃するのも忘れない。動きを止めず敵を利用し、三次元的な動きでその場から脱出する。

この状況では、魔眼が役に立つ。幻術だけではなく、相手の動きや攻撃を解析・看破する能力は相手の動作一つから其の狙いを見破る。
・・・その蒼く輝く蒼眼は全てを見通す。

視界を埋め尽くす程の攻撃も防ぐべきもの、回避すべきものと瞬時に見分け、相手の攻撃一つ一つの軌道を完璧に予測できるため奴らの攻撃はどれも俺にとっては絶好のカウンターの的と化す。

それでも消費を抑えるために包囲された時にしか発動していないが。

・・・どうやら俺を出来るだけ動かして魔力を削っていく算段なんだろう。だが、それは対処可能且つ対策はもう既に立ててある。

バキヤア！

俺の目の前で上半分を粉碎され、その残存部位から紫色の体液を撒き散らす。こいつ等も一応“真祖”という生物を食すために、身体も完全な植物というわけではないらしい。そしてそのことは俺にとっても好都合だ。

その体液を啜り取り、消費した魔力を補給していく。壊し、啜り、迎撃し、啜り・・・新たな獲物を片手に、敵を次々と破壊していく。

勿論、相手も攻撃している。その一撃のどれを取っても地面を割り、その速度は弾丸にすら匹敵する。ましてや、その攻撃は何十、何百とも連続で彼を取り囲むもの全てが行っている。

だが、全てを回避できなくても瞬時に魔力を用いて再生する。鋭い一撃によって引き裂かれ、夥しい量の血が流れ出てもいつの間にか元通りになっている。

だが何よりも恐ろしいことは数多の並列世界を戦い抜いてきた男にはその程度の攻撃は対処可能の域に留まる、ということだ。

一撃一撃をその都度に最適な量の気を集中させ受け止め、流し、防ぐ。

一撃一撃を優先順位の高いものから焦ること無く不動の心を持って見切る。

一挙一動はどれをとっても無駄がなく、無骨ながらも実戦で洗練され続けた動き。

そして自らの一撃一撃をどれも必殺のカウンターとして打ち出し敵の数を削っていく。

そして、その思考は 戦闘の、撒き散らされる血の匂いが濃くなればなるほど研ぎ澄まされていく。その経験によって積み上げられた、理論立てられている戦闘思考はどんな僅かでも勝利への道筋を導く。

まだだ、まだ、
“切れない”

・ ・ ・ ・ ・

戦闘開始から既に五時間が経過しようとしている。いくら真祖の強
靱な肉体や魔力補給手段を確立しているといっても、流石にずっと
戦闘に集中し続けられし続ける程に精神力は削られていく。

更に先程吸い取った情報によると、厄介なことに俺との戦闘に加わっていない外周部の敵は徐々に増殖しているらしい。さすがに瞬時にとはいかないらしく、その増えた数も百体ほどらしいのだが“終わりの見えない長距離レース”ほどキツイものはない。

このままではいずれ押し切られる。取り合えず出来るだけ数を減らさなければ・・・まだ「手札^{ジョーカー}」は切れないのだ

だがしかし、もう一つの切り札は使用できる。総数は把握した。たかが五千八百九十二体の戦力差を覆す。ただそれだけではないか

「・・・使つか」

周囲を爆破し、敵と距離を取る。

この技能はかつて別の真祖が使用したものを魔眼でもって解析・模倣したものである。しかし魔眼で完璧に複写した筈であるのに発動にはかなりの修練を必要とした。既に土台は出来ていたというのに最終的には約一カ月丸々かけて漸く形になったという超高等技術だった。

だが、余りに繊細且つ高度な魔力操作を必要とするためにまだ一瞬で発動出来る程、完璧に使いこなせない。そのため使用する時はある程度時間を必要とするのだ。周囲の敵を影で足止めし集中する。

左手に『魔力』を集中・集束。溢れんばかりの魔力を少しずつ研ぎ澄まし練り上げる。そしてこの作業と同時に右手に『気』を集中・集束。左手の魔力と全く同量になるよう、そしてより洗練

されたものになるよう研ぎ澄まし、そして最後に

“融ぜ合わせる”

その瞬間に肉体の全てを活性化したかのような暴虐的なまでの圧倒的な“力”が全身を巡り、包み込む。

循環しているこの力は魔力とも気とも違うもの。その危ういバランスに支えられた、しかし限りなく強大な力。その今まで感じたことのないものに驚いたのか、周囲の奴らがたじろぐ様な動きを見せるが

遅い

足止めに使っていた影達を一斉に爆破させる。そして、その場から一息で一番近くにいた敵に向かって突っ込む。

爆煙とともに現れた俺に向かって攻撃してくるが、それらは全て俺に触れる前に逆に弾け飛ぶ。そして何が起きているのか把握させる間すら与えずに左の一撃。

先程までならただのジャブ程度にすぎない一撃。だがしかしその手にはとんでもない密度を持ったエネルギーが集束されていた。つまり 威力は比べ物にならなかった。

一撃で文字通り“木端微塵”になる。そして周囲がそのことに気付かないでいる内に俺は攻勢に出る。もはや止まる気などない。

四肢に集束させて突っ込む。有り得ないほどに強化された瞬発力は敵を置き去りにする。認識する時間すら与えずに十数体が通り過ぎただけで消し飛ぶ。

右手で殴る。周囲を巻き込みながら弾ける。ザクロのように。

左手で握り潰す。なんにも無かったように縮小され、果てる。砂のように。

両足でもって踏みにじる。下は大混乱だ。蟻のように。

俺は今実にイイ笑顔を浮かべていることだろう。今の今までひたすら防戦一方で、たかが植物モドキに物の見事に嵌められ、苛立つ心を抑えながら敵をひたすら観察しつづけていたその成果と鬱憤を一気に晴らせるのだから。

このまま決める、そんな気概で猛然と反撃する俺は一抹の不安と疑問をかすかに覚えていた。

これまで本当にこの擬態能力と物量だけで勝ってきたのか？

“切り札”を隠しているのは本当に俺だけなのか？

あまりにも一方的に攻めさせすぎるのではないのか？

そんな疑問を抱きながらも、この攻勢にでる機会を潰せるわけでもなく、実際表だった罠の気配もなかったために俺は手を休めることはしなかった。

第五話（後書き）

最近は忙しい。もう少ししたら落ち着くかと思いますが。戦闘描写
って難しい。けど頑張ります。

第一幕最終話〜第六話（前書き）

この作品は独自設定を含みます。その点を踏まえてご覧ください。

第一幕最終話〜第六話

彼の者は恐れを集める。

そして我らはその弱きゆえに持つ業を彼の者にぶつけるのだ

これ以上思い知らぬように

これ以上先へ進まないように

これ以上

悟ってしまわぬように

あのまま攻勢を続け一方的に敵を蹂躪し、残り二千程になった時。あの状態をあのまま維持できる訳もなく。

流石に自覚できる程の淀み、身体がまるでどんよりとした鉛のように重くなったかのような疲労感を覚え始めた。魔力は温存できているが長時間の戦闘は確実に俺の心身を削り取っていた。

だが、このままならいけるか？そう思っても良いほどの戦果を挙げることが出来たろう。圧倒的物量差に晒されながら、三千近くの敵をこれまでと比べ物にならない程の速度で殲滅できたのだ。・・・そう思わないとやってられない、というのもあるのだが。

しかし相手も終に俺の力も尽き始めたと判断してか、予想だにしない“最後の手札”を切ってきた。

「・・・チツ。本当にえげつねえ真似しやがる」

・・・俺の周囲を取り囲む木々が一斉に枯れはじめる。急速に空気を失い崩れ落ちていく。その異常な光景に何事かと思い前方を見ると、その疑問は一気に氷塊した。自分の頬が軽く引き攣っていることを感じる。

そこに在ったのは一本の大きな『大樹』であつた。いや、違つ。“
今だ大きくなり続けている”と付け加えた方がいいだろう。

全長は約百メートル、幅は五十メートル程にまでなろうとしている巨大な“ソレ”。そしてその大樹からはとてつもなく強大な力を感じる。・・・まるで大地を波立たせるかのような、先程の俺すらも上回る圧倒的な力を。

「純粋な魔力だけで先程の生成した“力”を上回るか・・・最初はドコのB級アクション映画の親玉だ、と思ったものだが。これは本当に不味いかもしれん」

どうやらヤツはこの木々達の魔力だけでなく気、そして生命力すらも根こそぎ奪い取っているようだ。

自己増殖能力は本当の能力の隠れ蓑で、どうやらアイツの本来の固有スキルとでもいうべき力は“同族からの力の篡奪”。そして今、これまで生みだした『自分』から全てを奪い尽くそうとしているようだ。

もし全て吸収し終えたら一体どれほどの存在になるのかは想像がつかない。

・・・現在の俺の対処可能な域で留まるのかもわからない

といつても、俺は勿論全ての奪い終えるまで待つ気など無かった。
それは即ち俺の敗北を意味するのだから。

そう思い攻勢に出ようとした瞬間。

「カハッ?!」

突然俺の身体に衝撃が走る。何だ? 一体何が・・・。

幸い無意識に衝撃に合わせて後ろへ飛び退いたが、それでも、このまるで身を引き裂かれる程の衝撃。

身纏った皮鎧のおかげで目立った外傷はないようだが、これを生身の部分で受けたら・・・間違い無く弾け飛ぶか、引き千切られていたに違いない。

何かがこちらへ来ることを気配に察し、僅かに空虚が生まれた意識をすぐに元に戻して更に飛び退く。

飛び退いた瞬間、先程いた場所がまるで地雷でも仕掛けられていたかのように弾ける。今度は何とか避けることがようだ。

迷わず魔眼を発動させる。そして解析をするだけで、使用を打ち切った。

信じられないことにあの大樹はここから目測約一千メートル近く離れているあの場所から先程までと同じように枝を鞭のように放っているだけのようだった。だが、比べるのもおこがましい程“次元”が違う。

威力、速度もとんでもないが、その馬鹿らしい程までに膨大な魔力によって強化されたソレは容易に俺の防御を貫通する。つまり“圧倒的な力で無理矢理”障壁を貫いてくるのだ。

しかも物量に任せての攻撃らしく、その魔力を枝を振るう度に飛ばしてくる。おかげで先程までは一撃とカウントしていた攻撃は一度に数撃同時に放ってきたり、重複して繰り出されるといった厄介な攻撃に変貌していた。

それをひたすら回避していく。見えるものも、見えないものでさえも。もはや擦り切れてきている精神と肉体を酷使して。

魔力は一切使わない。もはや、今の疲弊した長時間の戦闘は耐えられないだろう。

そのことは自分が一番理解していた。先程の一撃も不意打ちとはいえ常々の状態なら回避できていたろう。・・・しかし、反応すらできなかった。

このことが何を意味しているか。

もはやこれ以上の戦闘の維持は限界を迎えつつある今の状態では不可能に近い

このままでは敗北^{まけ}る。即ち

“ 死 ”

後ほんの少しでもいいから負担を減らしたかったのが、この手の裡に隠し持っていた“切り札”^{カード}。もはや出し惜しみできる状況ではない

そうこう言っている内に、相手も俺を殺す準備を始めたようだ。

空間が揺れ動き、歪むほどの魔力が大樹の葉の一つ一つに集中し、球体状になっていく。

その光は実に多種多様であり、穏やかに明滅を繰り返している。大

小に大きな差は無く、まるで鮮やかな果実を所狭しと付けたかのようだ。

だがその外見とは裏腹にその一個一個から感じる魔力の波動は実に恐ろしい程の魔力密度を如実に俺に見せつける。アレ一発でも十分に俺を消し飛ばすことは可能だろう・・・。

攻撃を回避しながら魔眼を発動させる。そして発動させるのはその魔眼の奥に宿る“力”。発動と同時に自身の中にあつた溢れんばかりの魔力が一気に全て消失したことを感じる。しかし、それを条件の一つとしてソレは起動する

“業深き死を（デイス・トオウデス）”

その“眼”でもって『目標』を見つめ続ける。あとはそれだけでいい。ここから必要なものは力でも技術でも魔力や気の量でもない。文字通り『魂』の強さなのだから。

大樹に異変が生じる。先程まで練り上げた力が一気に消えていく。その枝に伝わせた魔力や葉の上で生成した筈の魔力も。

それだけではない。

全身から活力が消えていく。身体の端から細かく消え去っていく。念入りに消しゴムでキャンパスに描いた絵を消していくかのように。

本来は感じることなどない筈の寒気、痛み、消失感を感じる。

自らを吸い殺す時にも、そして吸い殺される時でさえ感じない類のものを覚えたのである。これまで一度も感じたことがない程に底知れない、おぞましい何か。それが何かはわからない。ただ分かることはこの先に待つ最期^{けっか}だけ。

“死”が

今まで一方的に与えてきたモノの片鱗^{うろこ}が自らを捕らえ始めている。理解できたのはそのことだけだった。

“業深き死を（デイス・トオウデス）”の能力。

それは即ちその魔眼によって捕らえられた対象に文字通り全ての“存在”の消滅を与えるというもの。そう文字通りの消滅。

その身は大地に還ることも、風によって巡ることもかなわない。その魂は死した後の輪廻に加わることさえ叶わない。耐え難い尋常でない苦痛をあたえられながら・・・消滅する。救いのない常闇の恐怖の中で

だが、それはその能力の対象だけの話ではない。 使用者にも
相応の“代償”を強いる。

「ぐっ……う……！」

その代償とは“使用者の全魔力”・・・そして“対象が与えられている苦痛・感情・恐怖”の全てを共有すること。

すなわちその耐え難い、身体を念入りに時間をかけてコマ切りにしていくかのような苦痛。

目に見える死をゆつくりと迎える、その恐怖を自らも味わう。そして、自分へ向けられる怨嗟や罵倒の声を一身に受け続ける。

そして、その苦痛に耐えられなければその能力の果てに訪れる“結果”が逆流する。

だからこそ、この死闘を制するに必要なのは

「く、くくくく・・・!!どうだ?死の感覚は・・・?そうか、初めて味わうのだったなあ・・・?」

魔力やら腕力といった外へ向けられる強さではない

「何だこの脆弱な魂は?!もう“自我”が壊れ始めたのかあ?この

・・・・そしてあれ程巨大な大樹が彼の嘲笑の声を聞きながら“消え去った”

その様子を眺める彼の眼には、かつての世界でも浮かべていた色があつた。

燃える程に熱い意思と、それでいてどこか身も凍るような冷たい何か・・・一重には推し量ることのできないモノを秘めた何かを。

確かに理不尽な結末へと導く因果の影響もあつたのかもしれない。

しかし狂気じみたその衝動と鉄のような理性を同時に秘めた彼は“運命”や“宿命”なんて陳腐なモノに決して踊らされるような存在では『元』から無かったのだ。

つまり、彼の辿りついた在り方はある意味必然だったと言えるのだろう。

その最期でさえも。

どのように世界が変わろうとも

姿かたちや踊る役柄が変わろうとも

彼が『彼』である限り。

彼の者は恐れを集める。

そして我らはその弱きゆえに持つ業を彼の者にぶつけるのだ

これ以上思い知らぬように

これ以上先へ進まないように

悟ってしまわぬように

これ以上

・・・そう我らは理解できなかったのだ

咎を刻み、ただただ震えるしかなかったのだ

彼の者はこの世界で最も畏れられていた・・・確かにそうだろう

だがしかし聡明であった。誰よりも先を見ていた。誰よりも未来を
夢んでいた。その背中は孤独でありながらも巨きかった。鮮烈だっ
た。そして、何よりも、強かったのだ・・・

この世界に生ける者の中の誰よりも。

言うなれば彼は物語に出てくる“鬼”のような存在だったのだろう。

我ら脆弱なるモノの誰もが持つ恐れを一身に集め、その業を果たす

だが、只管遠い存在なのだ。絶対に手の届かない、及ばない圧倒的な存在

ただ強く曲がらずに在る存在

そして、最後は討たれる。世界に安定をもたらす終末を齎すと俱に

エンディング

だが、その名だけは残す。

夜が明け、朝を迎え、月日が幾ら過ぎようとも、どんなに時の勝者たちがあらゆる記録から彼をかき消そうとしても……拭いきれない『恐怖』とともに潜み刻まれていく。

口々に“最強最悪の悪”として憎々しげに、しかし震えながら囁かれ続けるのだ……

永久に、再臨を畏れられながら

とわ

そして、ついに始まりを迎えた

「
やはり、生き残ったのか・・・」

「何だ・・・オマエは？」

これまでは世界に否定され、利用されるしかなかった彼が今度は世界の意思として肯定された

「 私は“ライフメーカー生命創造”。壊す存在であるお前の対極を為す、生みだす存在・・・そう言えば分かるか？」

後に、『魔法世界』、そう名付けられるこの星の防人と創り手の邂逅を合図として

「初めまして。そして、長い付き合いになるだろう
ノア^{アーク}。“方舟”の役割を担う者よ・・・」
・・・
『

数多の並列世界の一つである“壊れたモノガタリ”は今、動き出した……

第一幕最終話／第六話（後書き）

第二幕プロットは大体は完成。少し訂正作業（＋次話執筆）を挟むので間隔空くかも。ただ次幕からは会話が挟めるようになる、よかった。自分で決めたこととはいえこれまで結構きつかった。

できるだけ簡潔にまとめようとした人物情報（前書き）

ちよつとプロット変更することに

やっぱり酔った頭で考えたことは信用できない・・・大筋はいいにしても修正の必要を感じたので

できるだけ簡潔にまとめようとした人物情報

名前 ノア

登場人物その1。

主人公。あらゆる世界の安定をもたらすための傀儡として上位存在の下で数多の並列世界を渡り歩いてきた男。ただし、『どの世界でも絶対に倒さなければならぬ悪』という役割を負わされてきたらしい。

その繰り返された拷問じみた生涯と強靱な精神によって自らの魂も『人間』という種族の上位存在にまで昇華した。

現在、今度は『世界』という上位存在に縛り付けられ、“魔法世界の滅亡”を阻止するための抑止力としての存在である“真祖”となった。

これまでの並列世界での戦いの生涯から培われた戦闘経験・理論は他を寄せ付けない。その上真祖という強力無比な肉体を有しているため余計に始末が悪い。

ただ『抑止力』として『世界』に登録されてからは、『世界』からの殲滅命令時以外は魔力等はまあ結構多いかな、くらいに力を制限

されている。これは通常時に周囲に余計な影響を与えないためであると思われる。

能力

・魔眼

相手の魔力等を用いた技能を解析・模倣・看破する。眼を合わせるだけで相手を幻術に嵌めることができるように後に進化した。（ただし固有スキルは模倣や解析ができない。凄まじい程の魔力を消費するため長時間の使用は不可）

後に魔眼の機能を任意で切り替えることによって消費を抑えることを可能とした。

・吸血 デウァイト

相手の魔力を吸血によって取り込むことができる（補給率は血に含まれる魔力の10分の1）

吸血することにより記憶を読み取れる。（血の鮮度と量に左右される）

・隣に潜む暗殺者 ハイドエッジ

自身の影の複製を作り出すことができる。最大五十体。本体を中心に半径15kmの中で存在できる（ただし供給を無視すれば範囲外であっても存在できるが実体化は出来ない）。固有スキルの進化であり、少量の気と魔力の消費で使用できるためかなり燃費が良く主人公は多用する。実体化も出来るようになったため、かなり運用の幅が広がった。

複製達とは感覚を共有できるようになっているため並列思考マルチタスクを必要とする。実体化しても複製の出せる実力は最大でも本体の十分の一。さらに強さにはある程度の平均が存在しており、複製の数が増えれば増える程その平均の値は下がっていく。

そして複製達は魔眼は使用できない。

後に最大数が1〜358体、部分的に影の実体を生みだすことができるようになった

・再生能力

“業深き死を”（デイス・トオウデイス）

魔眼の第二解放。この状態の魔眼で条件と代償を満たすと相手を文字通り“消滅”させる。

条件

？対象を三秒直視し続ける。（見失ってはいけない）

？使用には対象に関わらず全ての魔力を消費する。
？殺す際に耐えがたい苦痛を相手が完全に消滅するまで受け続ける。
（耐えられなければ相手の消滅が停止し、その“結果”が自身へと逆流する）
？消滅させるまでにかかる時間は対象の存在としての“格”で決まる。

・生命創造
ライフメーカー

登場人物その2。後に『造物主』と呼ばれる原作のラスボス的な存在。本作では魔法世界の万物の祖であり、「生みだす存在」の役割を担っている。その力と外見は原作通り。

ノアとは違ってなるべくしてなった上位存在。作中では触れないが魔法世界とは独立した魔界などといった世界も創造したらしい。ノアの能力と強靱な魂を高く評価している。そしてある願いを持つようになった。

第一話（前書き）

来たぜ、ぬるりと・・・

この作品には原作には無い独自設定が含まれています。

第一話

△ンドウス・マギクス
魔法世界

その世界は竜や妖精、獣人等が存在しており、此処の人間はこの世界ではいつしか使えて当然となった『魔法』という独自の技術を発達させることにより発展を遂げていた……

創生初期の規格外の生物がその辺をのし歩いてような頃とは随分と変わったものだ……。

あれから何千年が経ったのだろうか？ もう数えてすらいない。と
いうのも殆どの時間を情眠で消費したからな。

幾らなんでも精神が植物の域にまで達する程の年月を過ごす気など
更々ないためである。

バトルロワイアル
生存競争を勝ち抜いた後の数十年間は役目をこなすことと併行して
能力を磨くことに費やし、その後は用がある時以外は冬眠、という
か仮死状態を保つことで時間が消費している・・・

ヤツとは奇妙な出会いだった、そういうしかないだろう。

確かに理屈の上では分かる。『壊す存在』があるなら『創る存在』があるのも道理だろう。

だが、最初は何を言っているんだコイツは？くらいにしか思わなかった。しかし、俺以外にはここには“ヒト”と呼べる生物はいなかったハズだということと、その身から立ち上る“真祖”たる俺とは全く異なった雰囲気が漠然とではあるが理解させた。

コイツは俺とは対等且つ根本から違うのだと

ま、何よりもその直ぐ後に星からの情報で抑止力と生成者^{コイツ}のことが流れてきたがな。どうやら俺は正式にこの星という『世界』に認定されてしまったらしい。・・・全然嬉しくないが。

その後は無駄に忙しい日々だった。何しろ俺の役割は星^{ココ}の生物の階^ヒ層^{エラ}制度のトップをやれと言われているようなものだ。

つまり俺が余りにも強力過ぎる生物の絶対数を減らしたり、バランス調整をしなければならないという・・・本来絶対^{ココ}にありえない役割をこなさなければならぬのだ。

普通このようなことは絶対にあり得ないし不可能だ。この全世界のバランスを取る、つまり把握することなど。

悪い部分を取り除いた　元通りになる。

この世界はそんな単純な原因結果の関係で結びついてなどいない。世界は複雑極まりない要因で成り立ち、薄氷のようなバランスによ

って保たれ、構成されているのだから。

ゆえに、たかが一生物などといった矮小な存在がソレを全て測り知ることなど出来る訳がない。それが出来ると思つのなら傲慢に過ぎる、その一言でいいだろう。

しかし俺は『この世界』から直接リンクを受けて指令として、そのバランスを保つために動かされるといった正に“傲慢な”ソレそのものだった。

・・・この世界が滅べば必然的に此処に存在する一生命である俺も諸共に死んでしまうため嫌々ながらも動かざるを得ない、というのが本音だが。

そして俺が馬車馬のように働いたおかげで有り得ないスピードでこの星は整備されてきている。

・・・本当にギリギリまで動かない俺に対して時々生命創造アイツが文句を言うことはあったが。

曰く、危なっかしい、余りに放置し過ぎていて冷や冷やする・・・等々。

そうはいつでも、わかるだろ？

正直いつて俺からしてみれば後で壊すくらいならば創るな、といったい。

創られた側からしてみれば俺は天災同然だし、何故こんなことをされるのか全くわからないまま虐殺を受けるハメになるのだから。

だがその理由をあえて言葉にそして丁寧に簡潔に述べるとするとす

れば、こう言うしかないわけだ。

“あなた方は世界に滅亡をもたらす可能性のある存在として『この世界』から認定されてしまいました。

そこで『世界』としては誠に遺憾ながら君達を創った責任を果たすために、死んでもらうことにしました。

いやあ残念です。ここまで脅威となるほど力を得なければこんなことにはならなかったのですが。

そして私はあなた達のような存在を消すための存在として『この世界』から認知され、派遣された者です。運が悪かったですね”

なんという一方的な理由だろう。

ただ存在するだけで『危険』『罪』『粛清』を行う……。かつ

ての“オレ”であつたら、間違ひなくどうにかして消しかかつていた存在であらう。そして、そんな存在を一番嫌悪している俺自身が『ソレ』になるといふのはなんという皮肉であらうか。

俺としてもあまりの自分の行動の理由の独りよがりさ・理不尽さに吐き気がするが、こつこつ風“縛られている”のだから性質が悪い。だからこそ必要最低限しか働かないが。

そして生命創造アイツは生命創造でこつ縛られている。

“あらゆる可能性を生みだす世界へとする為に、あらゆる可能性を持った生命を創造する”

あらゆるモノを肯定する。あらゆる生命を許容する。その可能性を愛で、育む。

しかし、その成長が『この世界』の滅亡へと向けられる程にまでな
ったなら・・・・・・・・

末路は、一つ

なんと寛容で優しく、それでいて冷酷で
残酷な世界だ。

・・・・・・・・ま、そこはどこも同じか。形は違えど。

そんなこんなで時は過ぎ。気まぐれに眼を覚ましてみると、
世界に変容が起きていた。良い方向の、であるが。

すぐさま生命創造に話を聞いた。

最近（といっても数百年程前に）アイツは俺達に近い存在、亜人や人間を生みだしていたらしい。

創りだされたソイツらも環境に順応しているらしく、最近は都市国家や連合を形成する程までになったとか。そして『魔法』というものが広く認知され、社会・文化の根底に位置するような存在になっているらしい。

その話を聞いて俺も一息つく。漸くヒトに類する生物が生活できるほどまで落ち着いた、といえる程に安定したといえるからである。

それに、俺もいい加減に文明のある生活を送りたいのだ。前世？では一応人間という文明圏の中で生活をしていた者としては……。

ここに到るまでの長い間に元々の技能は磨いたが、この世界には魔力というものがあるのだ。しかしそれを行使する“術”が無い。

といっても困るような事態は起きなかったし……別に固めて放るだけでも目的は果たせていたので特に何かしようとも思わなかったが。

それに俺は、数多の世界を巡ってきたものとしてこの世界では形成される魔法・魔術といったものに“興味がある”だけなのだから。

まあ、かなりその分野は発展しているとのことらしい。おいおいその術も身につけていくことにしよう。俺がこれまで行使していた魔

術は相性が悪くて使えないからな。持ち札は多いに越したことはない。

次々とこれまでの世界の推移を生命創造から聞いていると（コイツはずっと起きていた）、とてつもないことが飛びだした。

「・・・そして新たな可能性を生みだすために“外”の因子も引き入れた。ある程度の文明や魔の才を持った人類をこの世界に連れてきたのだ」

おかげでようやく久々の安定といえる状態を迎えたと続ける生命創造を尻目に、俺は聞き捨てならない単語を口にだして話を遮る。

「……………“外”？」

其の時アイツは『知らなかったのかよ』といったげな 若干の
呆れが含まれた視線を俺に向けていた。少しだけ、気まずい空気が
流れる。・・・仕方ねえだろ、ほとんど寝てたし。

フウ、と。わかるかわからないか程度の溜息をつき『仕方ないか、
コイツだし』みたいな眼で話し出す。・・・コイツは口には出さな
い内心がありありとその視線に露骨に現れやがる。

・・・釈然としないものを感じるが、黙って説明を聞いた。

「要は此処とは違う起源を辿っている別の星ってことだな」

「・・・ああ」

長々とした説明を一言で述べてやった俺にまた呆れの色を浮かべる生命創造。

なんでもここで生きていける人間をふるいにかけるには多種多様なものを、ということに似たような環境の他の星を探して連れてきたらしい。
　　というかある意味では対となっている世界のようにあるが。

こことは違って世界が“魔”で構成されていない、人間がソコの中に自力で登りつめた等といったコイツにとってはかなり重要な事柄なんだろうが・・・。

俺にとってははつきりいつてどうでもいい事だ。それにどっちかというとソコがどんな星なのか見てみたい気持ちの方が強い。

そんな事を考えていた俺にスツと宝石のような魔石でできたペンダントを差し出す。

・・・なんだ？

「　　転移の際というか“魔法”の使用の際に用いる触媒のようなものだ。向こうの世界へといきたいのだろう？」

これには驚きを隠せない。・・・という風の吹きまわしだ？ 基
本生真面目なコイツが俺に堂々とサボリを許すような発言をするとは……ってか俺の思考読みがったぞコイツ。

「殺し合いや騙し合いの時でない“普段”のお前の考えなど存外に読めるものだぞ？顔に結構出るからな」

。まあ分かるまでには時間を要したが、と無表情で続けるコイツ……

そういえば“以前”に俺と親しいといえる数少ないヤツラにも同じようなことを言われたような気がしないでもない。ただ俺と親しい「マトモじゃない、が条件に付く。つまりどいつもこいつもどこか壊れてるようなヤツばかりだった」が。

・・・それに、お前には言われたくないぞ。そのセリフは。

そんな軽い憤りを覚えながら　そしてソレを今度は極力表面に出さないように気をつけながら　そのペンダントを礼を言っ受けて取ろうとするが、そこでヒョイと持ち上げる目の前の存在。

「もちろん、タダではない」

・・・だろうとは思ってたよ。伊達に千年単位の付き合いではない。

「で、おまえの要求は何だ？」

そう切り出す俺に急に眼から光が消えて生命創造・・・『造物主』の顔になる。その瞬間俺も『作業』ができる状態にスイッチを切り

替える。

「いま世界に要求されているであろう『脅威になるヒトの殲滅』を終えること……。

そして真祖という存在の恐怖を奴等に刷り込め。人間たちは新たに手に入れた魔法という強力な力に酔い始めている。

ようやく安定した世界で、下手に騒がしくされるのは好ましいことではない」

……なるほどな。つまり今までの人間に与えてきた数百年の時間は『選別』ってわけか。そしてこれまでのやりとりの真意が見えてきた。寝起きの頭が回り始めた、というのもある。

確かにコイツの目的通りにするには『惨劇』を起こしたあとは俺が暫く鳴りを潜めていた方がより一層の効果があるのは確かである。

いいだろう。そういうことならコイツの掌で踊ってやるのもやぶさかではない。

俺が此処以外の世界を行き来できるようになることは俺の目的にもつながる。その辺もコイツはわかっているから俺に言外に告げているのだ。

『利用される』と。

嗤いがこみ上げてくる。いいねえ。こういう賢いやツは好きだ。恐らく“外の世界”というのも俺の目的に噛ませるために態々似たような世界を探してきたのだろう。

これは正当な取引となるわけだ。

アイツは俺に『近似した世界の情報と其れを探す手間』『移動手段』『魔法の使用に必要な触媒』

俺はアイツに『不適合者の粛清』『目的のためのパワーバランス調整』『抑止力の影響を強めることによる利』

あとはお互いが好きにしていっていいということ。其々の目的のために相手に踊らされることも気にしない。あるのは互いに利のみ。

「はあ、しゃあねなあ・・・やってやんよ、面倒だがな」

「助かる」

そう今行われているこれは“世界”に悟らせないための俺とコイツの茶番劇なのだ。

俺は俺のため

アイツはアイツのため

“世界”を謀る

そのためには長い準備期間と駒が必要不可

欠なのだよ……。なあ、『盟友』よ？

第二話（前書き）

独自設定があります。ご了承ください。

第二話

『選別』の時間は終わった。そしてそのための準備期間も、終えた。

アイツが欲する情報を得ると共に相互に魔法という因子を植えつけることも終わった。アチラに置いてきた私の人形にんげんのおかげであちらにも魔法というものは浸透してくだろう・・・。

亜人、人間達。彼らは多種多様で様々な違いが個体ごとに如実に現れる面白い存在である。

ソコに可能性を覚えると共に危うい面も多分に見受けられる。
そしてその危うさが『世界』の眼に留まってしまったのだ。

特に今回『不適格』と断ぜられた者達……。

新しく手に入れた魔法の力に酔いしれ、自分の力量を見極められず
他種を見下す人間達。

その魔の力を持ってこの世界を征しようとする人間達。

そして一番面倒な だが個人的には好ましい 自分たちを
管理している者がいるということに密かに悟り世界に反旗を翻すこ
とを決意した人間達。

彼ら人間の『本質』を強く宿した存在であった。

特に最期に述べた“本当の”反逆者となった人間。彼らは優秀で力を有し、なによりも勇敢な一族であった。

私は好感が持てる。彼らのような存在を愛しているといってもいいのかも知れない。彼らを生みだし、居場所を与えた存在である“造物主”としては・・・。

彼らは唯独りで立とうとしているだけなのだ。親の手を離れ、自身の光輝く世界へと旅発つ子のように・・・。

何と美しい。そして何と素晴らしいことが。

生みだした存在としては何よりも嬉しく思うこと、そのものである。

だが、早すぎた。彼らは、早すぎたのだ。

その力を奮うべき時を間違えてしまった。

過ぎたる力は“警戒”を呼ぶ。過ぎたる願いは自身を焼き払う。

どれ程優秀であつても“世界”を外れていない存在は、“世界”の
眼から逃れることは叶わず“方舟”^{アーク}の担い手を差し向けられる。

そして世界が差し向けた“箱舟”の訪れる処には破滅が訪れる。・
・彼にとっては殲滅すべきと断ぜられた存在などただの“事物存在”
でしかないのだから。

そしてその惨劇が行われる舞台において慈悲という言葉は存在しない。

彼は自分にとっての“道具的存在”でないものに対して向けられるものは無関心・無感情であり、公平であり、平等であり、どこまでも残酷になれる。

そして彼の矜持や信念といった琴線に触れるようなモノでもない限り、彼は躊躇いもせず、他者を踏みしめる。そこに感情の色は存在しない。

だれかが幸福になるためには、だれかが平穩を得るためには、・・・
だれかがその分理不尽に割を喰う 同じ位不幸になる人間が
存在するという、ドコの世界でも普遍の真理を誰よりも深く理解し
ているからだ。

彼は今夜、危険因子を残らず消しさるだろう。私の創造した可能性
溢れる優秀な存在を殺しつくすだろう。

だからこそ私は見届けよう

その失われる命を最大限に利用しつくそう

与えられた畏怖と圧倒的な力、脅威を知らしめよう

私がこれまで創りだした生命イノチの中でも最も可能性に溢れる人類おまえたちを生かすために

私の願いを叶えうる生命を絶やさぬ為に。 私はどこまでも利己主義なのだから。

我が子とも言うべき人間達よ。旅立ちの時は近い……。願わくば、安らかに

この世界を形作る太源^{マナ}へと還れ・・・

「や、やめて・・・殺さない、でくれ」

その命乞いの言葉など聞こえていないかのように右手を相手に向ける。手を向けられた男は顔を青くして逃げるが、その手から放たれた禍々しい光の奔流に為す術無く呑み込まれていった。

その奔流の通った跡に残されたもの。それは死と絶望だけだった……

…。

「おのれ・・・ッ！おのれええ

！！」

何故だ何故だ何故だ何故だ

！！

この国屈指の精鋭の近衛騎士である彼の目の前では自らの国が滅びゆく光景が容赦なく繰り広げられていた。

先祖から脈々と受け継がれ栄えてきた城下町。

活気に満ち溢れた民草の者達。

屈強で精強で無敗の、これまで他国に不覚など取ったことのない兵士達。

高度な魔法技術を持ち、発展の勢いが止まることなど知らなかった彼の国。

それら全てのモノがあっけなく崩れ去っていく・・・阿鼻叫喚の地獄が目の前にあった

その光景を目の当たりにして、彼の心は未だかつて無い程にうろたえ、動揺を隠しきれない・・・

何故だ！ようやく国力・魔法力ともに強大となり他国侵略を視野に入れるほどに成長したわが王国がッ！！

たった一人の吸血鬼の前に滅び去ろうとしている！！そんなことがあつてたまるかッ・・・！！

周囲は忙しく動く者達で溢れかえっている。ヤツが玉座の間じやうだへと向かって来ているからだ。

「王よ！！お下がりください！！今すぐこちらへ閉鎖結界の陣を敷きまするゆえ・・・」

「オイ！！早く状況を知らせろ！！」

「ヤツを此処に近づけさせるなあ!!」

「リステンド卿がお討たれに・・・!あの救国の騎士がッ!!」

「ちくしょう、なんだってんだ!何がどうなってやがる!!」

周囲の喧騒と混乱は何時まで経っても静まることはない。皆動揺を隠しきれないようだ。無理もない・・・。

これまで如何なる外敵も寄せ付けなかった城と城下町を覆うように構成された結界魔法がいと容易く破られたかと思えば一人の男が城門を吹き飛ばしこう抜かしやった

「我が名は真祖の吸血鬼“ノア”・・・お前らを殺しに来た」

そんなふざけた前口上と共にヤツの影から数百の影の軍勢が現れ虐殺をはじめやがった！！

我等が王は王妃とご子息を抜け道から逃がし、自らは此処に残った。

今も動じることなく冷静に状況の把握に努めておられる。

だがしかしこのままでは不味い。そう私が思った時

「　　　静まれエい……ッ！！！」

正に腹の底から聞こえるのではないかと思えるような重低音の、だが力強い声。

溢れんばかりの覇気は周囲の喧騒を吹き飛ばし、皆を正気に引き戻す。

そうだ、ここには我らが王。どのような窮地もその御力で乗り越えられた偉大な王が居られる！！

そう我等は団結してこの危機に立ち向かわなくてはならない。これまでと同じだ！！我等は如何なる窮地であっても力を結集して打ち碎いてきたではないか！

「・・・ようやく落ち着いたようだな。慌てるでない。我が心から信ずるお主らがいるのだ。この程度どうとでもなる・・・」

その言葉を聞き、その信に伝えてみせようと改めて誓った時

「
　　・・・ほう。さすがに“世界”に眼をつけられるだけの
ことはある、か・・・。中々の覇気と器を持っている」

招かれざる客が現れたのは・・・

俺の目の前には所謂この国の王という男が座していた。

といっても無警戒で座っている、といった訳ではない。周囲で俺を
取り囲み警戒している者達もかなりの手錬だ。進む魔力は先程まで

相手をしていた連中とは比べることすらおこがましい。

「貴様・・・何が目的でこのようなことをした」

王の傍に控える騎士のような者が口を開く。その瞳に映る色
もし主君に危害を加えるのならば刺し違えてでも殺すという決意が
ありありと浮かんでいる。

圧倒的な力量差を感じ取っているであるはずなのに、臆することな
く向かい合ってくるその姿に顔にはおくびには出さないが感心させ
られる。

しかし目的、か。

「不穩分子の駆逐を命じられた……。そんなとこだな」

その言葉に何人かが眉を顰める

「どの国の手の者だ」

「・・・さあ、どこだろうなあ」

おちよくるようにニヤリと笑う。それを挑発と受け取ったのか背後から怒気と殺気を浴びせられる。

今にも斬りかかってきそうな者達を王が手で制し、初めて口を開く。その声は隠しているようだがどこか畏怖を感じていることが俺には容易に汲みとれた。

「貴様、まさか『世界』の・・・」

なるほどこいつ等が生命創造のいつていた奴等かぁ……。となる
とイイモノが見れるかな？

気が変わった。こいつらが世界に眼をつけられることになった程の
業……。この眼で見させてもらおう

そして魔眼をゆっくりと発動させる。そして先程の問いに肯定する
かのように微笑する。

その魔性の蒼眼に変わった瞳を見て相手の顔に少し、ほんの少しだけだが
絶望の色を確かに見せた

「さあ、『世界』の箱舟の選別を受けし者達よ。その業を俺に魅せつけてみな……。」

その業がこの『世界』の領域を真に超える代物であるならば、生き残れるかもしれんぞ？」

そう言い放った後に、圧倒的な
禍々しい魔力を周囲に充満させる。

だがしかし、俺を取り囲む【勇者】達にはほんの少しの怯えすら見せない。それどころかどこか高揚した笑みをこぼすものさえいる。

ああ、素晴らしいな。こいつらは本当に・・・人間らしい。

本当に勇ある人間は見ていて飽きない。どこの世界でも・・・

どれほど絶望的でも、己の力でもってその勇を示す。

どれほど差を見せつけられても、生き汚く、賢しらに生き抜く

例え死に瀕しようとも己の死に際を鮮烈に魅せつける。

そう、どれほど他の種族に劣ろうとも、どれだけ種全体としては矮小な生き物だとしても……。いつもいつも最期に宿敵^{おれ}を葬ることが出来た勇ある【英雄】は【人間】だけだった……。

「では、まずは私がお相手仕ろう。彼のお伽噺で謳われる程の強者……。我が主君へ捧げる首級としてこれ以上のものはあるまい？」

先程の騎士が剣の柄に手を当てて俺に向き合う。その顔には強者と闘う愉悦と主君へ捧げる功績に対する興奮が見て取れた。

そしてその背後では悪魔召喚の儀を行っていた。爵位持ちでは無い・
・。？いや、違う。コレは・・・

閉鎖結界の中に閉じ込められる。そしてそこからあらわるのは悪魔たち。だけ、その眼には生氣は感じられずまるで人形のようにで。

だが、しかしそのあらゆる光を写していない瞳に浮かぶもの。それはドス黒いまでに膨れ上がる殺意のみ。

こいつら魂を人工的に加工して創り出したのか！なるほどな……。生命創造の創造したものでない『高位』の存在を、それも、大量に作り出す技術。そして何百もの悪魔を思うままに使用する術……。！

眼を付けられるわけだ……

そう内心感嘆していると相手は準備が終わったようだ。その業^{わざ}、術はこの眼に焼き付けた。

こいつらとは出来るなら、酒でも飲み交わしたかったものだ。
今となっては叶わない願望に過ぎないが・・・。

今、心に渦巻く感傷とでもいうべき郷愁を全て断ち切って開幕の合図を揚げることにしようか

さあ、始めよう。愛すべき“人”の性を強く身に宿す者達よ……

閉鎖結界の中で一斉に高まる気運、戦意、敵意、殺意、決意。周りの悪魔達の虚無の視線。その全ての引き金を俺は引いた。

「さあ、始めようか？……この狂宴は無礼講なんだろう？」

そして

紅に染まった右手が掻き消えた

真祖の吸血鬼。まごうことなく最強種の頂点に立つ存在。

だが、その存在の意味を本当に知る者は少ない。

何故ならその事実の数百年もの昔に彼らの祖先をこの世界に引き連

れてきたと言われる、『全ての祖』『生命の創造者』によって告げられた伝説として一部分が僅かに残っているだけだからである。

いわば子供が危険に近づかないよう、災いを避けるようになるよう、枕元で唄う物語のようなものであった。

く彼の者は記憶を辿る それが安定と静寂を 生みだすと知るか
ら

く「蜂起せよ」と恍惚は言う おろかもの
いのち
輪廻の輪は 巡り続ける
時間は城壁を築く 城壁は
そしてあなたは 一步一步 踏みしめて歩く

く 収穫の華は 咲いて咲いて くるりとまわるく
思い 思い に動く影と 共に
背中合わせく

く 陽炎の先に影が伸びる それが何かはわからずにく
咲いた、咲いた 血化粧 なんだ なんだ あなたの 瞳に映る蒼
い光く
それが 淡い 陽の先に 在ったものく

く 無数の楽しみと 無数の世界
男は消えてしまった物を探すだろう
女は果実を収穫するといいだろう
孤独は 人の間に あるの だからく

く 革命は夜に一人 で涙を流すだろう
彼の者は斜めから全体を眺める
記憶を固定するよりも
置いていった方がいいのかもしれない・・・

く 彼の者は唯独り 廻る 廻る
語られぬ夜を紡ぐ・・・

王国は、滅んだ。誇り高き王、精強な兵、つわもの新たな魔法、英雄の伝説で溢れた国

その歴史は終わりを告げた。だが、それだけで済まなかった……。

この一夜だけで十五もの国が滅んだ。その事実と惨劇に人々は畏れを抱く。

そして僅かに生き残った人々は口ぐちにこう言った

『真祖の吸血鬼』と ヤツの所業だと

だがその容貌も、目的も、

何もかもがはつきりとしたことはわからない正体不明^{アンソウン}。ただその力を後世に伝承と共に伝えられている。その惨劇と名前を重ねられて。

真祖の吸血鬼 『ノア』

二つ名など、ただ一つしかない。その名だけでいい。それ以外に彼

を表す言葉は無いのだから。

彼を唄った伝承歌の名前

【語られぬ撰理】
タナトス

渦巻く恐怖や畏怖と共に、彼の者は暫しこの世界から姿を
消す・・・

第二話（後書き）

次で大体今がどの時期なのかわかるかと。お気に入りが50を超えました。本当ありがとうございます。これからもがんばります。・
・かなりの遅筆ですが。他の作者の人更新はえー！とびっくりします。これから精進しますのでよろしくおねがいします。

・感想の設定を変えて制限なしにしました。

第三話（前書き）

独自設定が含まれております。ご了承ください。

第三話

第三話

「・・・ふう」

憂い気な溜息と共に、それまで忙しく動かしていた食器の動きを止める。

朝の涼しげな空気を運ぶ風が窓から侵入。そして俺の頬を撫でるかのように駆け抜けていった。外から聞こえる鳥の囀る唄はまるで生き物の活動の開始を告げるかのようで。

そんな穏やかな情景を思い浮かべ、最近自分が柄にも無く疲れているということを自覚する。ここ最近進展のあった研究に打ち込みすぎてしまっていたのかも知れない。

そして目の前にある、ハーブの匂いが食欲をそそるソースをふんだんに使った肉をゆっくりと、味わいながら咀嚼をする。

「・・・うまいな」

芳醇な香りのワインで喉を潤しながら、俺はようやく安定の兆しを見せている生活に到るまでの足跡を思い起こす・・・。

あの大虐殺から数カ月後。準備や向こうに渡った後の生命創造との有事の際の連絡手段などを取り決め、ついに俺は新しい世界の大地を踏みしめることができる。

俺の願いを叶えるための足掛かりとなる世界へと。

構築した大規模術式による転移。

転移は何事もなく成功した。

順調な滑り出した。

そう満足し、取り合えずどのような世界なのか見て回ることにする。

まずは自身の降り立った場の近くに在る大きな町へと向かった。

だが、そこでは予想だにしない事実が俺を待ち構えていたのだった。

「
嘘、だろ？ここは・・・」

見覚えのある、いや俺の擦り切れた記憶の中に僅かに引つかかる光景。建築物。人々の文化様式……。

それはこれまで何度かの人生や並列世界における故郷であつた星。

地球

その人類の歴史の中の一部として書物に記されていた街に良く似ていた。

俺は古代ローマの街を目の前にしていた。

時代はカエサルから五賢帝の時代

当時、ローマ市は『パンとサーカスの都』と言われていた

何故ならローマ市民であるならば^{ただ}無料で『パン』、つまり穀物が配布され、例え財産が何一つ無いとしても何人もの家族を抱えてもしない限り食っていったからである。

次に『サーカス』。これは剣奴や競馬、戦車競走、演劇等の娯楽を指す。分かりやすい例を述べるならコロセウムを思い浮かべると良いだろう。

五万人もの人数を収容可能な当時最大級の円形闘技場。
そこ
では様々な催し物が行われた。

時には公開処刑の処刑場として

時には死への恐怖に立ち向かい、猛獣、あるいは人間同士で必死に戦う剣奴の様子を観客である市民が興奮しながら眺め、熱狂した

有名な話では、中に水を張って水上模擬戦を行った、という逸話が残されている程である。

そしてその費用は全て皇帝や有力貴族持ち。『サーカス』つまり“娯楽”が無料で提供される。

人間が求める欲求を満たす、ある意味では夢のような生活を送ることのできる街・・・当時の人間の欲望を可能な限り叶えた街であった。

だが、その夢のような生活を形作っていたものは周囲の属州から絞り取った富。その全てがローマへと次々と流れ込み、市民へとばらまかれた。

ローマ市民であれば何も財産がなくても食べるに困らず、娯楽も只で提供された。それを言いあらわしたのが・・・『パンとサーカスの都』

何故このようなことをしたのか？

それは、食や娯楽といった人間の欲する欲を満たすことによって皇帝や元老院が民衆、狭い意味では兵士を味方につける、支持されることがその強固な権力の基盤になるからである。

例えば暴君として有名なネロ帝。

しかし彼は民衆には非常に人気のある人物であつた。彼は裕福な市民を処刑し、そして没収して得た財産を市民にばらまくことで支持を確固たるものとしたと言われている。

辺境に配備された大量の軍、絹の道などの発展した交易路に支えられた安定した供給によって保たれている平和と繁栄。

この光景は歴史の中では“良くある”繁栄の裏側、ってだけに過ぎない。

周囲の地を次々と征服し属州を得て国家の、文化の、国力の成長を続ける大国。

それがこの時期のローマ。今正に最盛期の超大国であった。

そんな街の中で俺はひたすら魔法の研鑽に励むために、ここに来る前に盗んだ術でもある“認識阻害”の魔法を用いてローマの一市民として溶け込んでいた。

というのも此処が数ある並列世界の内の一つであると気付いてからは世界の把握などといった面倒が減ったこともあり、とりあえずは現在栄えている文化圏の一つであるローマの街で休暇を兼ねた研究を行うことにしたからだ。

取り合えずは戦闘 というよりも便利な補助魔法の修得や研鑽だ。

俺が得意な魔法の属性は火らしいが、同じような固定スキルを持っているせいか影とも中々相性がいい。

影は転移や空間を広げて倉庫にしたりとかなり使い勝手がいいからかなり重宝している（その分術式を構成する必要があるが）。

この世界の魔法というものはどうやらこれまで俺が使用してきたものとはかなり違う、いや体系そのものが違うことが分かったのもあってかなり研究は進んでいる。

俺のこれまで持っていた魔法という認識はいわば組み込んだ回路に電流を流し込み装置を起動させるというもの。

ここでいう“回路”とは術式、“電流”として役割を果たすのが魔力、そして“装置”はつまり魔力によって術式を通り引き起こされた現象という図式を指し示している。

術式によって本来辿るべき“現象発生までの道筋”を強制的に組み替える。そしてその現象を引き起こすものは魔力量、精度、圧力によるというものだった。

つまり現象を人為的に魔力・術式というものをを用いて引き起こすこと。“自身の魔を通し、それに因り外へ働きかける法”。それが俺の『魔法』だった。

だが、この世界においての『魔法』とはどうやらそれぞれの現象の元である属性を司る精霊に働きかけて、与えた魔力や要請書の役割を果たす術式により相応のものを発動するというもの。

つまり“自身の魔を外の要因に働きかけ、現象を引き起こす”といったものらしい。

要するに、俺との相性は最悪だったこと。その為、その術に慣れることがまず時間が必要とするわけで。というわけで今は地道な下地作りの真っ最中である。

そしてその発動、いや働きかけには大体は魔法導体というべき触媒と始動キーという呪文が必要らしい。

触媒はもう持っている。あのペンダントだ。何の素材で造られているのかは分からないがその強度はお墨付きだ。

俺の魔力暴走を受けても欠けるどころか罅すら入らなかったのだから押して測るべし。

始動キーに関しては『ダ・トッド・フアンゲット』 ドイツ語
を少しもじった、死は始まり、というある意味俺自身への自戒を促
す意味のものにした。

・
今度死んだら次があるかどうかなど、わからないのだから・・

・・・ま、そういうことは置いて、だ。

今は表向きの顔である役目を果たさねばならない。

「旦那、今から出港いたします」

「ああ、気をつけてな。・・・じゃないと、俺自身の身入りも少なくなるからな」

「ハハハ、旦那らしいや」

気易く話を交わす俺と商人たち。周囲は船出に向けた準備で慌ただしい。

俺の表向きの顔は“私的商船団”の出資者、である。簡単にいえば交易船の船主の一人といったところだ。

この時期のローマ帝国は先に述べたように実に裕福な国であった。そしてこの時期は“私的商船団”といったものが登場した。

これは商人たちが長距離運航・大量の物資輸送を可能とする船を利用した商いである。

俺は裕福な富裕層の一人として現在紛れ込んでおり、また事実かなりの資産を築いた。というよりはその資産を持った人物に成り替わった、というのがより正確な表現であるが・・・。

まあ、消した男はたとえ殺されても誰も文句を言わないような男だった、とだけ言っておこう。

話を戻す。つまり、こいつのそれまで行っていたことを俺が引き継いだということだ。そしてその結果一番実入りが大きいのがコレだったというだけの話。

俺達出資者たちは実際に現地に向かう商人たちと契約を結ぶ。

ちなみに態々離れた地に行って商売をする商人というのは一般的には資産があまり多くない人達である。彼らは仮に<小商人>と呼ぶことにしよう。

そんな人達に自前の船を持つだけの資金があるわけもない。そこで商品を運搬できるだけの船を持つ裕福な人たちと契約を結ぶという話になる。

出資者達は商品という形の債権を持つ。この時代の航海術や船。当

然遭難や不慮の事故による沈没など幾らでも起こりうる。そこで彼らはそのような事態によって生じた損害は全てそれぞれが負担するという責任を持つ。

代わりに小商人たちは現地で得た収入の内から出資者へと貸付金として支払うという債務が生じる。その一般的な支払う金額はなんと一般的に利子三割という……。なんともまあ凄まじい金額である（ただし、当たり前前の話だが余りに高利だと摘発される）。

俺自身は二割五分ということで契約している。余りに下げすぎると悪目立ちする。他よりある程度安ければ安定した間隔・量の契約が結ばれるので採算もとれる。

なにより俺自身が余り商売に心を傾けていない。不自然に思われなければそれでいいのだから。

そんなので大丈夫か？という声が聞こえそうだが、全然問題無い。

ここの貴族は散財するのがある意味でのステータス・シンボル（地位の象徴）になっている。

有名な話で言えばアビキウスという大金持ちの話がある。食道楽でさんざん浪費したあと、あと10億円相当にのぼる財産が残っていたのに、貧乏では生きている意味がないと言って自殺した、という逸話だ。

何も珍しい話ではない。それほど退廃的な生活をここの富裕層や貴族は送っている。

だから、さほど商売に熱心では無い貴族など珍しくもなともない、という話だ。

と、つい最近自分にとって好ましい人間の姿を見た後だったのも相まって、人間の毛嫌いしている一面をむざむざと見せつけられた気分で屋敷の門の前に辿りつくと、俺の目にある光景が入った。

それは、年幾ばくかの少女。年は8〜10歳だろうか？肩にかかるかかからない程度の長さの銀髪。淡いライトブルーの瞳。

顔立ちも良さそうで美少女、そう言ってもいいであろう少女。

だがしかし着ている服は擦り切れ、汚れており、またその頬も飢えのせいだろうか？瘦けていた。

そんな、これまで見たことのない子供が門の前で俯いて座っていた

私は、あやふやなそんざいだ。私はおかしなそんざいだ。

ほかの人には見えないものが見える。その人のココロの内がみえてしまう。
その人が知られたくないことも、ミエテシマウ・

・

だからなのだろう。だれも私をみてくれない。だれも私のそんざいをみとめない。

理由は、わかる。それは
恐怖。自分の内を見透かすかのよう
な私という存在^{もの}。

そんなの、こわくてこわくてしかたない。気味が悪い。

だから私は空気なのだ。あやふや、なのだ。いないものだと思えば、こわくないから。

ちちという名称（なづけ）で呼ぶ男はまいにちまいにち別のおんなのひとをつれてくる

ははという名称（なづけ）で呼ぶ女はまいにちまいにちキレイな石をおくられてよろこんでる

だからなのだろう、すてられたのも

おまえは邪魔だ

そう男と女は言っていた

無言で捨てられた、けど、心がそう、いつてた・・・

さうじゅの三日は何もできずばーっとしてた

おなかすいた

あるきだす。だけどもなんてくれない

ここは“乳の出る円柱”ということもするばしよ。そして、だれかわからない男たちがどれいにするために子供たちをつれていく

そのうちまわりの人の心の声こゝろこゝろがこわくなってきたのでそこをはなれた

また三日あてもなく、あるいた。さまよった。なぐられた。けられた。

だけど、あるいた。あるいた。・・・あるいた。

それから五日

もう、ここがどこかなんて、わからない

もう、だめ。からだにちからでない。あたま、ぼーっとする

なみだが出てくる。なんでうまれたの？なんでわたし、こんなこと
してるんだろう？こわい、こわいよ……

だれも、いない

だれも、こない

そう思っでしゃがんでた。ここには人なんていないって、わかるから

だけど、そこに彼は現れた

「・・・おいおい、確かに人払いの結界張っておいたはずなんだけどなあ……。おい嬢ちゃん。ここに何の用だい？」

怖い。パンでも欲しいのか？そう言って人懐っこい笑みを浮かべる男の“人”。だけど

「にんげんじゃ、ない？」

私がそう言つと、その男の人から笑みが
きえた

無言で私をジッと見てる。私も男の人を見る。

黒い髪。そしてさっきまですいこまれそうなくらい真っ黒だった瞳

がきれいな蒼色に変わっていた。

こころのなかはけいかいときょうみ。だけど恐れは
ない

「わく、ないの？」

「・・・何でおまえを恐れる必要がある」

「あなたのなかにあるの、私、“見える”もの。あるのはけいかい
ときょうみだけ・・・」

男の人が私のおかしいところに着いた

けど

恐れは、ない

恐れない

わたしを、おかしな、あやふやな、気味が悪い、私を

「……なんで？」

男の人は私を見てどこか愉しそうに答える

「質問を質問で返すが、どうして“こわい”なんて思っ？」

もう瞳はどこまでも深い、吸い込まれそうな真っ黒な色に戻ってた

「・・・知られたくない、心で思ったこと、思い浮かべたこと、その全部がわかる、から？」

「・・・本当に？」

「だって、わかる」

「嘘だなあ・・・本当に“視えて”いるのか？そいつの本性^{ヒトシロ}まで？」

「・・・どういう、意味」

「おまえはそいつのことが本当に全部わかるのか？」

どういうこと？いみが、わからない

「おまえが視えてるのは表面的思考だけ。その位で俺が驚くか。おまえは、その本質まで今は視えていない。さっきは少し視えてたかなあ」

その顔はまるで教師がいじわるな問題を出す時の様で。だけど、視なくても”わかったことがある”

「……あなたは、いじわる」

その言葉を聞いた瞬間、大きく眼を見開いて、キョトンとしたかと思ったら大きな声で笑いだした

「アハハハハ！！全くもってその通りだ！俺は捻くれていじわるな男だなあ！！アツハハハハハ！！よくわかったじゃねえか！！！！」

そういつてまた大笑いする。

どうしてか知らないけど、このいじわるな人を何でか知らないけど、
……初めてこわくないとおもった。

すると、何か視えた。

真つ黒な、なにもかも焼き尽くしてしまいそうな、だけど・・・神
秘的な光を放つ、すごく綺麗なモノ

私は答えがわかったような気がした。だからわたしは気付かなかった
けど　生まれて初めて微笑った。

「　黒い太陽　」

「うん？」

「それが、あなた」

またキョトンとしてる。だけど、今度は大笑いせずにニツコリと笑って、満点だよ？ってほめてくれるかのように私の頭をなでて

「よくできた。さっ、ご褒美だ。食いな？ゆっくり、な」

そう言ってパンを私に差し出す。

でも私はあんなにおなががすいてたのに、パンなんて気にならなくなってた

あつたかいなあ

うれしいなあ

・・・ほんとうに、うれしいなあ……

そしてパンを食べた時に私は驚きを隠せなかった。

こんなに、おいしかったんだ……

あたまのなかを稲妻がかけるかのように、そしてその喜びは全身へ
とかけめぐる。

パンを夢中で食べながら私は泣いていた。

おいしい、おいしいよ・・・

生まれて初めて、かなしいんじゃない、いたいんじゃない、嬉しくて、ほんとうに嬉しくて。

そんなときにも涙は出るんだってことを初めて知った

「……名前？」

「ああ」

私がパンを食べて、泣くのが止んで落ち着いたら突然訊かれた。もうかなりの時間が過ぎて時間は夜になっていた。空に浮かぶ真ん丸なお月さまが灯代わりとなって私達を照らす。

そんなどこかいつもと変わらない筈の夜んだけど、私はどこか幻想的な雰囲気を感じていた。

「……おぼえてない」

「マジか？」

「うつん、嘘？」

私がコテンと首を傾げると、彼は苦笑していた。

「なんで？」

「あんな男と女に付けられた名前きじうなんていらなし、名乗らない」

私がそう言つと、また苦笑する

「じゃあ、なんて呼べばいいんだ？」

「あなたが名前を付けて」

私がそう言つと、彼は少し考えて
意地悪な顔になる

「じゃあ、ボb『却下』・・・オイ」

心を読んで却下する。だれがそんな名前を喜ぶというのか。何か文句を言おうとしたので、睨みつける。顔をひきつらせてる。

ボソツと「冗談もいわせねえのかよ…」とかいってる。心で。みえるから無駄。

「あなたに関係がある名前がいい」

私がそう言つと、「注文の多いやつだな…」とか言いながら少し考
える。そして空を見つめる。

・・・空一面に広がる鮮やかな真つ黒いキャンパス。そこに散りば
められた星達。幻想的な月。それらが織りなす独創的な空想図。そ
れがどこか儚くそして　美しい。

「
『朔夜』
」

「サク、ヤ？」

すると僅かに微笑んで名前の意味を言う

「おまえ俺のこと『黒い太陽』とかいったろ？ならこれがいいだろ。月が太陽と同じ方向にあつて見えなくなる新月の刻。だけど眼では見えないだけで、ちゃんとソコに存在する。夜を照らす月の尊さ、美しさを知らしめる」

あやふやだ、ふしぎだ。だけどそれが私だ。

「サクヤ・・・朔夜！」

うれしい！飛び跳ねたい位にすごく、嬉しい……。だけど、これだけはいいたい。聞いておきたい。

「
　　だけど、それじゃあ“太陽”がないとだめだね？」

そういうと、彼は少し考える。そしてその顔は先程までの人をおちよくるようなふざけた雰囲気など影も形もなく　　真剣さを纏っていた。

「そうかもしれない。だけど、その“太陽”は誰も彼も傷つける恐ろしいものかもしれないぜ？・・・それでも着いてくる気か？」

「当たり前」

「・・・少し考えろよ」

「考えるまでもない。私の始めての“せんたく”ってやつよ？大人ならそんなふうすべきでしょ？」

「・・・はあ。もういい。後悔しても俺は知らねえ。いいな？」

「後悔なんてしない。それが私。・・・そんな気がする」

そう言うと彼はまた溜息をつく。苦笑を浮かべて。

私が「溜息つくと幸せがにげちゃうよ？」って言うと、「うるせえよ」なんて言っで。

そしてしゃがんでる私に手を差し出す。

私はその手をとる。その手はあったかくて、絶対に私を裏切らないと何故か確信させるものを感じさせた。確証なんて、ないんだけどね？

「これだから人間ってやつは…飽きないんだよなあ。・・・しょうがないか、時間はたっぷりある。これも何かの縁と思うしかない、か・・・」

そんなワケの分からないことを呟く彼。そんな彼に訊いてみた

「ねえ」

「ああ？」

「人間じゃない、って言ってたけど。じゃあ何なの？」

「何だ？今さら怖くなってきたのか？」

「ふざけないで。真面目に答えてよ？」

「・・・はあ。そうだな。俺はな？」

そうして、私を見る彼の顔はとても涼やかで、
だけどニヤリと悪戯っぽく答えた。

「悪い悪い魔法使いの吸血鬼、ってやつかねえ・・・」

・・・そう言ったときの、優しい月明かりで照らされた彼の顔は今まで見たこと無い程、不敵に笑っていて。だけど、今まで見たこと無い程妖艶で。私は思わず見惚れてしまっていた・・・

それが、私と彼の、初めての記憶

第三話（後書き）

ようやくヒロインだせたぜ・・・グフッ

長かった・・・感想御持ちします

第四話（前書き）

この作品には独自設定が含まれますので、ご了承ください

第四話

第四話

『食事』

それは一日一日を生きる活力であるとともに絶対に欠かしてはならない要素の一つ

これを欠かす、その行為はそれだけでその者の健康だけでなく人生の楽しみにまで影響を及ぼしてしまう。ゆえに食事というものは非常に大事な行為である。

勿論、ただ食べればいい、というものではない。どうせなら美味しいものを楽しく食べる。真に美味なる食事はそれだけで人の心を豊かにしてくれる。満たしてくれる。

これは、人であろうと動物であろうと吸血鬼であろうと変わらない真理である。

まあなにが言いたいかというと

「どうせなら美味しい料理をちゃんと食べようぜってことだ」

「突然何よ？」

飄々と俺の鋭い視線を受け流し、心底不思議そうに問いかける。

「いやな？食事は楽しく美味しく頂こう、そういう話だ。そう、おいしい『料理』をな？」

にこやかに微笑みながら暗喩してやる。これは何だ？と。

するとにつこりと、まるで華でも咲いたかのように可憐に微笑み返す小さなお姫様。だがその背には黒い炎が何やら立ち上っているかのように、その笑みには間違いなく蔑みの色が含まれている。

ああ・・・、拾ったばかりのころの純真さはどこへいったのだろうか。そう俺は内心嘆いた。一体だれに似てこうなってしまったのだろうか・・・。

「あら？細かいことを気にするなんて珍しいわね。それに態々私が気を利かせてあなたのために作ってあげたのに感謝どころか文句を言うの？それにあなた自身が言った矜持^{ルル}に反してるわよ？

『自分達が生きるための糧になった命に感謝を忘れてはならない』これはあなたが言ったことよ？“食事”に文句をつけることは許されないことだって」

「うんうん俺が教えたことをキッチンと覚えてくれているようで嬉しいよ。だが気を利かせた結果が“これ”か？」

満足げに鷹揚と頷いたあとニツコリと笑い、俺が指し示す先にあるもの。それは皿にのった暗黒物質^{だーくまたー}。いや、『お約束』だった。

それを指摘され思わずビクリとする　　朔夜。先程までの会話にあった余裕はどこかへ行ってしまったようだ。目線を横に泳がせ、その頬にはスツと朱が差していた。

「　　いやはや、おまえが天才なのは承知してはいたが・・・いつの間に錬金術なんて覚えたんだ？この俺でさえ、まさかただの卵がこんな兵器になるなんて考えもしなかったぜ」

フウ、と『さすが朔夜・・・いつも俺の予想の斜め上を爆走するだけある』と感嘆の溜息を吐く。

ぶるぶると朔夜は身体を震わせる。成程成程、改めて自身の暗黒物
質^たの出来栄えに感動で身を震わせているのか。ならば俺も講評しな
ければならんな。もう一度これを見た感想を述べねば。

そして俺は万感の意を込めて

ニヤリと

「これはひどい」

「
ツ!!ノアの、バカアーーーー!!」

そして俺の目の前は真っ暗になった。だーくまたーで。

「
……取り合えず、番犬の餌やりに行つてこい……」

朔夜を拾って5年。俺は朔夜に従者としての様々な高度な教育を施してきた。それは学問から護身術、武術、マナーや常識までありとあらゆる分野に渡る。これはコイツの将来を考えた上で必要なことだと思ったためである。

ローマは有能であれば奴隷にだって子供の家庭教師を任せる国。従者自体別に珍しいことではない。あくまで表向きは朔夜は“従者見習い”であるが。

それに能力が無くて困ることはあっても有ればとりあえず極端に損をすることは少ない。

・・・それにどうせ拾ったのだったらキッチンと育ててやりたい、という気持ちもあったしな。

そんな考えの元、研究の合間や表の仕事の合間、時には影の分身まで使ってあらゆることを教え込んできた。朔夜の持つ異能の力である、対象の心や本質を視ることが出来る能力【さとり】とでもいつておこつか？その制御は特に。

可能な限り本人の意思で自在に使役出来るように。

この力は異端ゆえに朔夜自身までも深く傷つける。・・・そして、この力を悪用することを画策する輩が現れないとも限らない。いや、現れるに違い無い。それが遅いか早いかは分からないがな。

ゆえに、研ぎ澄ます。鋭く、鋭く。真に研ぎ澄まされた刃物として朔夜自身がその力に見合うようになった時、その時は。その刃はどんな時にも朔夜の窮地を切り開く最強の剣となるに違いない。

十歳という年齢は人間の中の動きやら知識やらの【習得】に関しては最盛期といえる。そして心身の成長・形成におけるかなり重要な時期でもある。

そのため、俺は無理の無いようになんか気を使っていた（最近では女の矜持？とやらを顔を赤くしてまくしたてるようになってきたが、反抗期か？）

心身ともに健やかに成長していくように。

だが、その結果わかったことがある。

それは朔夜が普通の子供とは比べ物にならないような天与の才を持った子供であるということだった。

正直驚いた。学問はいわずもがな、精々身体が丈夫になればいい程度の気持ちで教えていた護身術、武術は特にその才能を顕著に表わし、あつという間に修得してしまった。

そのあらゆる世界を巡ってきた俺からみても類稀な武の才能。そのなかでも『剣などの刃物を用いる術』に関する才能は他を隔絶する片鱗さえ感じさせる。

まあ、どれもいまだ蕾に過ぎないのだが。何にせよ自分の好きなように生きる上で才能が溢れているというのは実に喜ばしい。

まだまだ土台を作る時期であるし、現状は自身の思い描いている完成形には程遠い。しかし時間をしっかりとかければ必ずその領域に到る。いや、もしかしたらそれすらも超えて辿りついてしまうかもしれない。

全てを理不尽なまでに其の力で薙ぎ払う『極み』にまで・・・

。

俺のようなどれも努力してようやく一流になれる、といった者からしてみれば羨ましいことだ。

・・・料理については、これからに期待といったところだろう。これは近道などない、正に日々の修練と経験がモノを言うものだ。

これまでとんとん拍子で来たのだから努力して上達する楽しさがより感じられる“苦手”なものが見つかってよかった。

ちなみにレシピや作り方は“一切”朔夜に教えていない。どの料理もだ。これまで厨房にも絶対に立ち入らせなかった。

なぜなら料理というものは食べる人への思いやりや新しい発想を限られた材料や器具で生み出す、他者の料理から技術を盗む等実に様々な事を通じて役立つことを教えてくれる一つの『勉強』だ。決して俺が火事の発生を本気で心配していたからではない。

それで今回初めてつくった料理は大失敗、というわけだ。

これを糧に朔夜はまた自主的に多くのことを学んでいくだろう。その楽しさ、素晴らしさを自然と身につけていく。

俺もあれだけ唆して発破をかけたから大丈夫だろう。

そしてこれからもこうやって影ながら見守ってやれば、失敗したものを俺の教え込んだことをバカ正直に順守して食って腹を壊すなんてことも起こらないだろう。

あとは

「さて、頂きますかねえ・・・」

今年で十五を数える程までになったお姫様が作った初めての料理だ。捨てるなんてことは流石に出来ん。

サクッ

食器に触れた時に出た音が苦笑を誘う。恐らく卵焼きを作ろうとしたのだろうが、どれぐらいの火加減が適切かわからずに失敗したのだろう。あわてて止めようとした様子が眼に浮かぶ。

中のある程度無事だった部分を口に運ぶ。うん、味がなんともいいない。恐らくダシなどを加えることはしていない。・・・正に純粹な『卵焼き』だ。

「
まずいな」

だが、その料理が如何に一生懸命に四苦八苦しているかがわかる部分が見つかるにつれ、別の意味で腹が膨れる。

「 まったく、本当に不味いな・・・」

そして胸に久しく感じたことの無かった温かい感情がここ最近よく沸き起こることに苦笑する。

「 だが、悪くはないな。こんな『料理』も……悪くない」

そう呟いた時の彼は、苦笑ではなく穏やかな笑みを浮かべていたという。

五年

言葉にすればたったこれだけの言葉。だがしかし想起する想いは果てしない。

あの娘をどうして拾ったのか・・・それは自分でも分からない。

能力の希少さに惹かれたのか

その飢えた哀れな様子に同情してか

・・・持った力に振り回され全てを拒絶したかのよう
うなあの瞳に過去を垣間見たのか

今でもはつきりとしたことは自分でも分からない。

ただ言えることは

“ そうしたくなっ たから ”

これしかない。どんな美麗文句を連ねるよりも、その方がしっくりくる。何故なら自分は己の思うままに、自身の望むままに生きる存在であると自覚しているからだ。

俺の行動に大層な理由など存在しない。大義など必要ない。ただ貫くに足る“想い”があればいい。

心底殺してやりたいと思えば、例えそれがこの世を統べる程の超然たる力を持った神であろうと、世界を手中に収める力を有する魔王であろうと殺し

心底気に入った存在ならば、全世界から悪と断ぜられる存在であろうとも救い

心底愛した存在ならば、例え自身を憎悪する存在であろうと守り通す

だからこそ、“力”が必要不可欠・・・例えそれが互いの亀裂を生みだすとしても。

そう、自分は何にも縛られない。故に何者にも屈しない。それが俺の本質なのだから。

こんな傍若無人な生き方は当然敵も多く生む。かつてはそれで厄介なことに巻き込まれたもある。心から信頼した者に裏切られたこともあれば、蛇蝎のごとく憎まれたこともある。

だが、そのことに一片の後悔もない。正しいか正しくないかではな

く、“俺”らしいか“俺”らしくないか。そこが俺にとって一番大切なことなのだ。

今回も同じだ。

そしてその一番大切なことを今も貫けているかどうかは、この心の内にある温もりが何よりの証明であるのだから・・・

・・・そして、その温かい『料理』の作者であるお姫様は壁一枚またいだ隣の厨房で能力を使って覗いており。

先程の感情任せの行動をどうやってノアに謝ろうかと右往左往していた（餌やりには行った。何だかんだいっても律儀である）そのお姫様は顔をトマトのように真っ赤にしてその心を聞^{こえ}いていたのだっ
た・・・

「顔が、熱い・・・」

だけどその顔をふにやりと崩し

「全く、しょうがない男。本当に、ノアは本当に素直じゃない……」

だからこそ、その優しい心の声が、何よりも・・・ 温かい

父のように、兄のように。口では絶対に言わないけど、その奥底に確かに存在するのは自分を見守ってくれている、愛してくれている唯一の存在。

私は自分が壊れていることを自覚している。だけど、憧れていたことも自覚した。この五年間で。

あなたのイジワルな、だけどその根っこにしっかり根付いてる優しさ、温かさのおかげで

私は本当の“家族”の存在に飢えていたんだ。どこまでも無遠慮に、だけど損得関係なしに私に向き合ってくれる、見てくれる存在に・・・。

彼が人間じゃないってことも知っている。彼が今まで理不尽な理由でたくさんの人間を殺してきたことも直接聞いた。生きるための力を身に付けたならいつでも此処から出て行ってもかまわない。そう彼は言った。

だけど、そんなことはどうでもいい。そんなことが何だというのか

彼が何であろうと、彼が何をしようと私は彼を拒絶はしない。全てを容認するわけでも、許容するわけでもない。ただただ無遠慮に彼と真正面からぶつかって、手を取り合って生きていくだけ

だって家族なんだから。私が心の奥底から欲していた存在を手放すことなんて絶対にしない。私を愛してくれた。その温かさを貴方は教えてくれた。だからこそ私は誓ったのだ。

何があるうとも私は最後まで貴方の味方でありたい

これは私があ の『悪い吸血鬼』さんから貰った最初のキモチ。

今まで憧れて手を伸ばして“眺めることしかできなかった”モノ

そしてきつと、どんなモノよりも尊く大切な存在なんだろう

だからこそ

「・・・次こそ“うまい！”って言わせてみせる！！」

今度はおいしく作ってみせる。私の日ごろの感謝を表すように。

あの捻くれてて、意地悪で、性根の腐った、外道の、
だけ
ど優しい吸血鬼に素直に礼を言わせてみたいから。

そして私も礼を言いたいから。最近私は私もアイツに似てしまったの
か、素直に感謝の言葉なんて恥ずかしくて滅多に口に出せない。

だからこそ私は行動でノアに示す。いつものように。私が彼に向き
合うに足る存在と示すために。

だけど

“ ありがとう ”

・・・その“ 家族 ” への感謝の言葉だけは、
何の意地も張らずに言
えるようになりたい。

カツカツカツ・・・

不気味に感じる程の静寂の中、響き渡るのは靴の音。まるでこの世にはその音を発するものしか存在しないかのようだ。そう此処には彼しか存在しないように・・・。

そんなつまらない事を考えてしまう程に周囲には人の気配は感じられない。それどころか生き物の気配すら・・・何一つとして存在し

ない。

ここは彼らの間では『礼拝堂』と呼ばれる聖地の一つ。そこに集まるは“聖人”と呼ばれている者達。彼等が信仰を捧げ、崇拜している者達。彼ら“聖人”達は跋扈する数々の人外の妖を滅してきた存在である。

事実、各地に存在する表向きで一般の信者達に司教と呼ばれている者達は裏の仕事を支援する役目を担った飾りにしか過ぎない。

とは言っても民心や神を信じる者達を導くこともまた務め。彼らもまた立派な役目になってはいるのだが、裏に関することは『執行者』と呼ばれる悪魔狩りをする者達の為の情報を得るためや支援を行うに過ぎない。

彼らの治める街に発生した悪魔を狩ることは彼ら自身の利益を守ることに繋がるため、両者の協力関係は強固であり、かなりの部分にまで融通を利かせてはいるが・・・。

実質的に教団のトップに立っているのはこの“聖人”の面々、というのは設立当初から変わらない。

幾千もの悪魔を屠ってきたその実力は一騎当千。

その厚い信仰心と、代々“聖人”へ至った者へと受け継がれる二つ名を体現する戦闘能力は爵位持ちの悪魔にすら匹敵し、あらゆる災厄を未然に防いできた。そしてある種の“気狂い”として悪魔達に恐れられる化物達でもある。

それら“気狂い”達の元へ“執行者”の彼は直々に神託を受け取るということでは此処へとやってきた。じきに与えられるであろう重要な使命を果たすために。

短く切りそろえた金髪。身に纏う装束は無駄な装飾を省いた実用性を追求した黒きローブ。そのローブに覆い隠されているのは過去乗り越えてきた死闘の歴史。そしてそれに比例するかのようにつねに絞込まれた実戦仕込みの肉体。

冷厳とした雰囲気を纏いつつも、実に洗練された動作で歩みを進める。

「
只今参りました」

「状に囲まれた円卓の中央へと立ち、彼がそう淡々と告げると突如として先程まではだれもいなかった筈であった空席へと“聖人”達が現れる。

その研磨された針のように鋭く、それでいて泰然とした山のような雰囲気からは彼らの持つ力の凄まじさを感じさせる。

そして厳かに神託を告げる。

「神託を、告げよう……」

『不死殺し』の二つ名を受け継ぎ

し執行者ヴァドレッドよ。新世界からローマの都へと舞い降りし人外の者を滅せよ……。

予言者が受け取った神託。『世界の破滅』を願いし不死の真祖。この大命を果たした時、お主は神に認められし“聖人”が一人と認められよう……」

そして一人の“聖人”が印を押し、ある書簡を卓の上に差し出す。

そなたに神の加護があらんことを

その言葉に合わせるかのように一礼して拝命書を受け取る。

そこに書かれていたのは

“ 執行者五名及びそれに追隨する兵士を使役する権限を与える。また執行者には其々の全神具の使用許可を与える。この任務の達成は全てにおいて優先されるべきものとする”

彼はその文を一瞥し懐へと入れ、踵を返して歩き出す。

いまだ執行者の身であるにも関わらず二つ名を与えられし男。
歴代最強と謳われる『不死殺し』が今、動き出した・・・

第四話（後書き）

こういう神鳴流のような退魔を生業とした化け物たちは居ると思うんです、魔法使い以外に。特に昔のある程度神秘が溢れているような時代ならそれこそ腕利きが居るはず！こういう奴らと主人公組とのバグVSバグ。チートVSチートがこの作品で書きたいことのひとつです。ようやく出せたよ・・・そしてほのぼのも実は書きたかったんだ。

シリアス？色が強いんだよ。この小説・・・ヒロインのおかげでだいぶ日常シーンが増える予定だけど。毎回毎回書くたびに自分の力不足を実感します……；；そんな穴だらけの小説だけど、これからもよろしく願いますね！

12/13 執行者の名前変更。クルト ヴァードレッド（第二候補へ）。いや紛らわしいと思ったので。直接何の関係が無くてこれらは紛らわしい。もし混乱した人がいたらすみませんでした（^^；）

第五話（前書き）

この作品には独自設定が含まれます。ご了承ください。

第五話

第五話

今日も平穩平凡な一日が過ぎ去ろうとしていた

そして今俺は、ほのかな心落ち着かせる匂いで鼻腔をくすぐるハーブティーを口にしている。

独特の芳香と共に感じられる茶の味をじっくりと味わう。

最近の朔夜は料理と共に従者としての訓練も兼ねた、茶を入れる作業に夢中だ。

それはもうさつきから俺の様子に興味なさげな風を装ってチラチラと覗っている（俺はそれに気付いていない振りをしている）。

ふう、と吐息を洩らす。そしてツイツと僅かに緊張した様子の朔夜に眼を向け、茶の感想を述べる。

「ふむ・・・、茶の入れ方はマシになったな。料理よりは将来に期待が持てそうだ」

口の端を釣り上げて、いや、にこやかに、そうにこやかに朔夜を称賛する言葉を精一杯紡ぐ。

すると、朔夜も（現在は従者モード）顔をほころばせ

「それは光栄です。いつか『この茶がなければ生きていけない』と言わせてみせるから覚悟しとけや、主様」

そうニコリと花のような可憐な笑顔で小首を傾げる。

うむ。拾った当初から将来有望だとは思っていたが美しい淑女に順

調に成長しているようで何よりだ。

現在は美少女から美女へと移り変わる中間辺りの容姿だが、どれ程の魅力的な女へと将来成長するか今から楽しみだ。

「ほほう？それはそれは有り難いことだ。

この吸血鬼が耄碌する前にその領域に到れることを切に願う。

なんせハーブティーひとつを入れるのに何十分もかけたお前だ。気長に待つことにするよ」

ピキッ

「既に頭のどこかがイカれてらっしゃる主様です。
そんな小さなことは気にするだけ無駄、というものですよ？
それに耄碌するなら財産全部私に引き渡してからにしてください。
それなら一向に構いません」

ピシッ

「そうか。まったく、お前は出会ったところから、まったく！ 変わ
っていないようだな？
安心した。これで俺も益々頑張れるといったものよ……。
その微笑ましいまでの手際の悪さも含めて、生温かく、末永く見守
っていくこととしよう」

ミシヤ

「さつさと死んでくれれば私が死に水を手際よく取ってあげますよ。だから安心して死んでください。なんなら今からでも構いませんよ？」

それとも私自らあの世へとお送り致しますでしょうか？ うん、そうしましょう！」

名案！ といった風に眼をキラキラ輝かせ、手をパンツ！と合わせる朔夜。それにこやかに生温いハーブティー片手に慈愛溢れる笑みを返す俺。

そんなどこにもある穏やかな日常風景を繰り広げていると、朔夜（通常モード）が何か思いだしたかのように「あっ」と声を上げる。

「どうした？」

「いや、駄犬に餌をやる時間だったことすっかり忘れてた」

成程。ハーブティーという強敵の前にすっかり忘れていたのか。

朔夜を拾ってから直ぐに万が一に備えて番犬を飼っており、その餌やりは朔夜の仕事でもある。・・・まあ結界があるからあまり意味は無いのだが。

しかし役割を果たすことが無い筈であるのにこの犬は良く吠える。腹が減ったら。

ゆえに朔夜はこの番犬のことを「駄犬」と呼んでいる。そして最早

これが名前と化しまっている。哀れなり。

「まったく……。何かに集中して他の仕事を忘れるとはまだまだだな」

「そうね。何かに集中して船主の仕事をほったらかしにするような誰かさんに似たのかしら？」

お互いに苦笑と共に皮肉を交える。そこにあるのは穏やかな気持ちだけ。これも最早日常の一風景と化している。

「なら仕方ないな……。早く餌やってこい」

「ええ仕方ないわね。

その間にご飯作つといて」

互いに笑いあう。そして踵を返して外で腹を空かせている番犬に餌をやるため朔夜は部屋から出て行った。

そして俺も今晚の糧を調理するために厨房へと向かうのだった。

今日は珍しくあの犬が吠えないな、などと思いつながら

最近は朔夜もそれなりに料理は出来るようになってきてはいるが、
まだまだ手の込んだものは難しいようだ。

持っている自分の中のレシピも少ないため現在は俺の料理から盗む
ことを目標にしているらしい。

そこで朝と夜は俺。 昼は朔夜が担当するのが俺達の間、暗黙の了解
となっていた。

・・・それにしても、今日は本当に穏やかな日だ。 夕暮れ時を過ぎ、
それまで晴れ渡っていた天空は夜の帳に包まれようとしている。

そして空に浮かぶ星は燦然と輝き、これが未来の空ではあんなにも

見えづらくなるのか・・・

そんなどこか哀愁にも似た念を抱いてしまう程に、この天の下で生きる我々へその美しさを自己主張していた。

明日も晴れるといいんだが……

そんな吸血鬼にあるまじきことを考えながら歩いていると厨房へと辿りついた。

早速手を洗い、手際良く下準備をしていく。

そしてふと思う。

自分はこれまでに無い程穏やかな日常をここ最近送ることが出来ている。そしてその穏やかさはやはり何者にも代えがたい幸福であるということも改めて実感出来ている。

しかし

お前は本当に自身のしがらみから逃れられるとも思っているのか？

平穩は何物にも代えがたい幸福だ。だがしかしその平穩こそが、お前を鈍らせる

そしてその心に付いた“錆”はいつもお前の大事なモノを奪ってきただろう……？

……しかし、俺の中にある経験と勘が訴えかけてきている不安と焦燥感は、その幸福を感じれば感じる程に大きくなっていく。自身の娘とも妹でも言つべき存在の幸福を願う度に胸の奥で警鐘を鳴らす。

やはり俺自身に呪いのごとく纏わりつく、この“楔”を断ち切らない限りは……

俺が思考の渦に捕らわれ始めていた時、ふと背後に誰かの気配を感じて振り向くと

「はぁ・・・何やってんのよ?」

「・・・朔夜?」

そこには犬の餌やりを終えて帰ってきた朔夜が居た。

その顔は不機嫌そうに歪み、壁によりかかってこちらを見ている。
俺が眼を見開いて驚くと、朔夜はかぶりを振って溜息をつき、俺の手元を指さす。

「手」

「ああ？」

「手、止まってるよ？」

確かに思考に夢中になって作業が止まっていた。

「まったく・・・私はお腹空いたんだからさっさとしてよね？
私の目の前でバクバクと食事を始めるんだから。あの犬・・・」

そう悪態をつく。それに対し皮肉を返してやることにする。

「まあ仕方ないだろ。
何せ、かなりの時間餌をお預けされていたようなもんだからな？誰かさんのせいで」

「うっさいわねえ……。とにかく！いいからさっさとするー！」

「ハイハイ」

そんな会話を交わして調理を再開する。しかし、なんとまあ……。

「……ところで、番犬はどうだったよ？」

「……何が？」

「いや、普段は餌の時間がきたら喚くじゃないか？
今日はやたらと『静か』だったからな。何かあったんじゃないかと思っただけだ」

一瞬、キョトンとした顔になる。そして何かを思い出したかのように手をポンと打ち

「ああ、それ？

私が行くまであの犬なら寝てたわよ？ 大方待ちくたびれて眠っちゃったんじゃないの？」

「・・・ふむ、成程な？ まあいいや。ちょっと気になっただけだしな。

取り合えず邪魔だから出てけ。そして大人しく待ってろ」

大きく溜息をつき「ハイハイ、分かりました！」などと言って出ていく後ろ姿をジッと見送る。

そして先程、柄にも無く考え事に耽り、その結果気を緩め過ぎていた自分の醜態を思い出す。

何て言うか俺も鈍ってきているな。いくら考えに耽っていたとはいえ他人にここまで近づかれるまで気付かないとは。

「早くしろ」と急かされる。それに「うるさい!」とおざなりな返事をしながら、作業の手を忙しく動かす。

これは俺の錆落としても兼ねて今度からの鍛錬は厳しくせねばならんと鍛錬メニューを考えながら・・・。

だが、その時、ノアから顔を隠すように“朔夜”の顔をしたモノが歪んだ笑みを密かに浮かべていた。

そう……“獲物”が何時隙をみせるのか。

いつ来るか？

いつだろう？

いつ食べられるのだろう？

いつ味わえるのだろう？ ……その喉笛を私の眼前に晒すのは

そんな美味そうな獲物^{しよくじ}を“食い散らかす”瞬間を思い浮かべ、楽しそうに笑みを零していた。

カラカラ、カラカラ……

テーブルの上にあるグラスの中身を静かにかき混ぜる彼女が浮かべた笑みは、正に仕留めた獲物をいたぶる猫そのものだった……。

第五話（後書き）

ついにその手が伸び始めました……。今回は難産でした。

作者の励みになりますので感想などがございましたら是非頂ければと思います。

今後とも拙作をよろしく願います。

第六話（前書き）

今年もよろしくお願いします

第六話

第六話

『闇』

古来より人の恐れを掻き立て、同時に人へ安らぎを与えてきた。しかし、陰陽一体。光があるところに闇はある。全てを照らしたすものが光だとしたら、全てを隠したすのが闇とも言えないのだろうか？

そして、ソレが今現在、私を阻む障害となっていた

安らぎなんてものをどこかへ投げ捨てた
ーティーの舞台として

端の無いダンスパ

「ハア、ハア・・・?! チツ!!!」

飛び退く。その危険地帯から。

足のバネを最大限に生かし、しかし最少の動きで回避する!!

「成程、手強いな」

「くっ?!」

私の周囲と視界を覆い尽くす闇の世界。手を伸ばしたら先が見えなくなるほどにその闇の世界は深い。

そして、そのどこから聞こえてくる、今正に私を襲っている鋭い斬撃とは対照的な無感情に響いてくる何かを吟味するかのような声。

その声の主 私をこんなところへ引きずり込んだ人物へと皮肉を込めた嘲笑を投げかける。

「まったく……! 淑女をこんな“暗がり”へ強引に連れ込むなんて……
どこからやってきた変質者なのかしら!!」

鋭く、速く

一撃一撃を僅かに聞こえる風切り音を頼りに、短刀で弾いていく。

終わりの見えてこない舞踏^{ワルツ}を強いる相手に歯ぎしりしながら、しかし少しでも情報を引き出すために話かける。

本当に突然だった。餌をやりに行った私の眼に入った光景は血まみ

れになった駄犬の姿。そして何やら怪しげな、黒いローブを身に纏う二人の侵入者の姿。

襲撃！ そう思った時には既に遅かった。

一人がナイフをこちらへ顔も向けずに投擲。

私が反応しソレを身に着けていた護身用の短剣で弾いた時に、一瞬で背後へ転移したもう一人が、あらかじめ隠蔽して仕掛けておいたのである。術式を発動させた。

その一連の動作には一瞬の迷いが無く、まるで息をするかのように行われた。

さらにはノアの張った厳重な結界をいとも簡単に掻い潜り、そして

私へと完璧な奇襲を仕掛けたその気配隠行の錬度

この事から感じられたことはこの二人の戦闘者としての格は・・・
間違いなく手錬そのものであった。

そしてそのまま恐らく最初から準備をしていたのであるう、術者の得意とするテリトリーとして構成された閉鎖空間へと術者ごと閉じ込められ、今に至る。

そして

先程から私を襲う、とてつもなく殺気を押し殺した攻撃は正に熟練者のソレそのもの。ノアとの訓練に置ける『理想的な暗殺者』の仮想敵のレベルにほぼ等しい。

それはつまり最低でもこの敵が一流の手錬であることを示している。それも、暗殺という“本業”だけでなく、戦闘慣れした一流の戦闘者。

無音で、しかし殺気の残りカスに至るまで残さず、自らの所在に至る痕跡を覆い隠す。闇を利用した己の五感すらも制限した状態でのスタイル戦闘術。

厄介だ。これでは『さとり』が使えない。

私の固有スキルとでも言うべき『さとり』は読む対象を何らかの形で強く認識できなければ発動出来ない。故にこの場ではコレは有効に活用することは難しい。

「……別に、お前に対して恨みがあるわけではない。
ただ、邪魔なだけだ……あの吸血鬼を葬るのに、な」

「
ツツ！！チツ！！」

その悠長な口調とは裏腹に、その私の命を刈り取らんとする死神の
如き一閃は鋭さを増していく。

それに加えて時間差で襲いかかる『魔法の射手』が実にいやらしい。
あらゆる多様性、連射性がその長所。時間差で押し寄せるこの攻撃
が巧妙に相手の攻撃後の痕跡をかき消していく……。

必死に齒を食いしばって耐えていく。金属を打ち鳴らす音が連続して続いていく

見えない。だがそれが何だというのか。

眼で捉えられずとも、音を捉える耳がある。痕跡を嗅ぎ取る鼻がある。血潮を感じる舌がある。変化をくみ取る肌がある。そしてこれまでの鍛錬で研ぎ澄まされてきた勘と経験がそれらを補完する。

私自身の戦闘術スタイルにおいて『さとり』はあくまで戦闘補助に過ぎない。

この身に刻まれた基本は常に五感、六感を駆使すること。冷静に対処して堅守する。まだ“聞かなければならない”ことがあるために。

「このままではお前たちが侵入したことなど直ぐに彼に悟られるわよ？ 愚かな侵入者さん？
いや復讐者の方が好み？」

「私はどちらでもないよ？ 麗しいお嬢さん？
そして貴方をここで殺すことで何の支障も生じない。

何せ“お前”は向こうにも居るのだからな？ いや向かったというべきか……

それに私は彼の吸血鬼には何の恨みも無い。

ただ、殺せと我等の神が告げし神託を果たさんとしているだけなのだから……」

今此処に居る敵は一人。もう一人は何らかの方法で私に化けている

まだ、まだだ。抑えろ。まだ、早い

「成程。それじゃあなたは狂信者と呼んだ方がいいのかもね？
あなたの思い浮かべる“神”とやらを盲信し、理性を溝に捨てた愚
か者といったところ？」

我慢、我慢、我慢、我慢

「ふむ……。狂信者か。それは違う。何故なら我等はただ悪魔を滅
するのみ。

命ぜられし神託を果たすために。
信ずる教義の元、我等が大いなる神が愛した人を守るために」

気を練り上げる

「そしてその神託の前では我等ごときの理性などさして重要な要素
ではないのだよ……。我等はただ神の御心のままに行うのみ。
それが我等」

殺す

欲しい情報^{モノ}は手に入れた。あとは殺^{バラ}す

刃と刃が擦れ合う瞬間に、練り上げた気を周囲に顕現する。

解き放たれた気が恐ろしい程の密度を持って周囲に拡散していく。
そして男に触れたときこそが

私と獲物の間に有った仮初の優位性を覆す時である

「なッッ！！！！？」

男は驚愕する。その余りの気の発頸の錬度の高さに。その、これまでに無い運用の仕方に。

だが、何よりも驚愕したこと、それは

「腕は一本頂くね」

その剣閃の迅さ、鋭さが常軌を逸していたこと

たかが短剣の間合い

だが、その間合い内だと認識された瞬間、腕にまるで焼き鏝を押しつけられたかのような“熱”が奔った

そして先程までの繋がりはなく、頼りなく左肩から先がポロリと落ちる。

気付いたら、その場を離れていた

もし後ろへ瞬間的に飛んでいなかったら、返す刃で首筋を切り裂かれて絶命していたに違いない

男が腕を失った痛みと溢れ出て来る鮮血を抑え、またその斬撃に戦慄を感じていた時、抑えるような忍び笑いが聞こえてきた

其れは実に楽しげで

「
ああ、愚かね」

実に愉悦に満ちていて

「 たかが“悪魔”と私達を一緒にするなんて、本当に救えない……」

実に異質で。だがその豹変した歪んだ笑みを浮かべる顔が、不思議な事にこれ以上無いほど

「 身の程をわきましろ、愚者。
貴様等が寄り添う神が如何に残酷な存在か知るが良い」

美しい戦姫が其処にいた

それは私がノアに拾われて、私の才を見出して“戦闘の教育”（という名の英才教育）を受けていた時の話。

「
技？」

怪訝そうに声を上げたノアに私はコクリと頷く。ノアとの戦闘訓練は厳しい。時には“魔法世界”とかいうところに行きドラゴンを狩ったり、時には極地でのサバイバル訓練を施されたり、あるいは悪魔を召喚してソレと本気の殺し合いをしたこともある。

だが、それは別にいい。これらの苦行のような訓練はしっかりと私の血肉となり、私の糧となっている。・・・料理は別の話だ。食べれば何でもいいの。

しかし、私はノアには基礎と呼ぶべきものしか教えられていない。刃物や気、魔力の制御だったり、基本的な刀剣類の使い方などだったり。

しかし、ノア自身の使っている技と呼べるものは何一つ教導されたことはない。

そう思って問いかけたのだが、返ってきた答えは思いもよらないものだった

「んなもんいらねえよ、お前には」

「えっ？」

私が意味が分からないという顔を見ると、彼はやれやれといった風に僅かに肩をすくめた。

そしてノア先生の楽しい講義の始まりだ

「いいか？はつきり言ってお前の剣、というか“刃物を扱う才能”は異常だ。そこらの天才なんてものとは比べ物にならないくらいに次元が違う。最早バグといっても差し支えない位だ……。そこは分かるな？」

ノアがそう言うならそうなのだろう。私は他人と比べたことなど無

いから分らないが。

取り合えず頷く。

「そして何かしらの流派における技とは“型”だ・・・つまり何かしらの基本動作の延長線上のものに過ぎない。つまり“基礎”“基本”がその土台だってことも分かるよな？だからこそ、もう一度言おう。

『おまえに何かの特殊な型など必要ない』

おまえの基礎動作や能力は最早全てが必殺と呼べる域に達しようとしている」

そして私の周囲に障壁を張る

「それを斬ってみろ」

何の脈絡もなく張られたソレに怪訝な顔をしたものの何の気無しにナイフで切り捨てる。

私を覆うように半球状に展開されていたソレはカパリとずれ落ちる。

それは私の日課でもある『障壁を斬る』という修練。最初はあまりに硬く、また気も魔力も弾くという“術式”の組み込まれた強固な結果で、脱出するのに一日を費やしたこともあった。

さらに当時は目の前に食事を置かれて、突破できなければソレにありつけないということもあって必死になったものだ。

今では訓練の始めと終わりの体馴らしになっているが。

すんなりと斬り捨てた私を見てノアは満足げに笑う。

「この障壁は鋼鉄以上の硬度と気や魔力を弾くことの両立を可能と

した結界だ。

あまりに維持に力を消費するので常時展開にあまり向かないが、それはひとまず置いておこう。今注目すべきことはそこじゃあない」

そして切り捨てられた結界の表面を指で撫でる。

「実に見事な斬撃だ。 しかし、これを気も魔力も用いずに最小限の腕を振る力のみで為す、というのは果たして何人できることやら・・・
それも“破壊”ではなく“斬る”というところにお前の異常性が垣間見える」

その艶やかな笑みは反則だ、と私は思う。口には出さないが。・・・
表情には出来るだけださない。

「毎回、お前の相手をする度に俺は気付く。お前はどうか知らんがな……。
覚えているぞ？」

最初は何の脅威にも感じなかった一振り一振りに次第に確固とした“筋”が付いていった瞬間を。

打ちあう度に響く鉄の音が段々と鋭く、熱いものに変わっていった。そして一撃毎に重みが増していく。“全ての力を一点に集中する”という真髓をお前はたった一回の模擬戦で自然と身に付けた。

防御が硬く、何一つ攻撃が通らずに敗北した後の一週間、おまえはひたすら密かに打ち込みを始めた。最初はその意図が掴めなかったが……一週間後、おまえは防御どころか障壁すらも“すり抜ける”一撃を放った。

そして、その一撃すらも避けて見せれば、次には『さとり』を制御してなにやら訓練を始めた。そして一カ月しておまえが防御ごと斬り捨ててきた時は流石に俺も焦ったぞ？

そして今では気や魔力に頼らずとも結界という“異常”を斬り捨てられる程だ……」

そして私にその眼を向ける。詠うように懐古して。そしてはつきりとその口元は笑みを浮かべていた。おかしくておかしくて仕方が無いといった感じに。

「刀剣を扱う上で全ての根本にあたる“斬る”という基礎であり奥

義をお前は己の試行錯誤のみで極められる可能性がある。
そう、もはやお前の斬撃は技で収まるものではない。……“業”の
領域だよ」

そして、その“業”に至る過程でお前が身に付けたものは最早他者
からみれば基礎の域を超えた“型”であるのだから、と続けた

故に

「お前は本来極めるということが不可能な筈の“基本を極めること”
を目指せばいい。
それこそがお前の剣になる。お前はあれこれ他に手を出す必要はない。

試行錯誤を重ね“業”へと昇華しろ。お前だけの“業”に、な。
下手に俺の真似事をする必要など無いのだ。俺が伝えることは経験
と思考のみ。

“戦い”というものの本質を刻み、見つける手助けくらいしかせん」

そして何か護符のようなものを私に渡す。そして『アデアット』と
唱えてみる、と言われる。

「・・・『アデアット』」

そして現れたのはスラリと艶やかな黒い鞘に納められた剣。しかしこれまで見たことの無いもの……。それを抜く。

美しい、しかしどこか妖しい光を反射する刀身。しかし片側にしか刃が付いていない。反りがついていて『斬る』ことに特化し、洗練されていることが分かる。そして鍔と鞘、刀身に刻まれた紋様はどこか神秘的な雰囲気醸し出している。

あまりに美しいその刀身に見惚れていると彼がニヤリと笑う。思わず我を忘れてしまっていたことに気付き、己の失態を悟る。

「ククク、どうやら気に入ったようだな？それはお前への仮契約に付いてきた特典だ。^{プレゼント}」

気付いてるか？ 俺がお前を拾った日だぞ今日は。

・・・まあ、女に送るものとしてはどうかとは思うがな？」

まったくだ。普通はペンダントやアクセサリーだろうに。まあ、らしいが。

「・・・この剣は？」

「日本刀という刀剣に似ているな」

「ニホントウ？」

「ああ。・・・まあ、実際はまだこの手の刀は打たれていないだろうがな。まだ早すぎる」

最後の方はボソリといったから良く聞こえなかったが、それから続

けられた説明で二ホントウは数ある刀剣類の中でも最高峰の切れ味を有しているらしい。

「加えて、その刀には術式が刻まれている。強度を限界を超えた極限にまで高めている。破損する心配が無いんだ。というより破壊不可能だな。俺の全力の魔法でも傷一つ付かないだろう。刃こぼれしないから切れ味も落ちない。武器破壊も不可能だ。“戦場で振るう武器”としては最高だな」

良かったな、そうやって私の頭をそつと撫でる。

「それが、お前にとってのもう一つの相棒になるだろう。」
「さとり」と共にお前の障害を乗り越える助けとなってくれるだろう」

「
『アデアット』」

現れるは戦姫の美しさを称えるかのような剣。

抜かれたソレは何もかも斬り捨てると言わんばかりの妖しい光を放つ。しかし、真に恐ろしいのはその剣を手についた瞬間に溢れ出した目の前の敵が放つ
“殺意”

それは、まるでタールのようにネバ付いて身体に纏わりつかれるように。それでいて針のように鋭く身体の内芯にまで突き刺さる。

“ おまえを、 “ 殺す ”
……その “ 念 ” だけが

それを見た男は顔を歪める。一目でわかったからだ。アレはやバいと。

なるほど……悪魔とは比べ物にならない“化物”の眷属は“化物”であってしかり、か……。

しかし、その後に浮かべた表情は如何なるものか。彼女からは見えないが、彼が浮かべた表情もこの片腕を失った絶体絶命の状況で浮かべるにしては異常であった。

湧き上がる感情は……『歡喜』と『高揚』

未だかつて無い強敵と出会えたことに“感謝”した。彼もまた“外れたモノ”の一人であつたのだから・・・

そして黒の世界でさえ妖しく輝く刀を携える戦姫と、神に仕える狂った執行者の一人の命の鎬の削り合いが……

「悪いが、ここで死ぬわけにはいかんだ。何としてもお前を倒してみせるぞ」

「足掻くな。直ぐに訪れる運命を受け入れろ」

打ち鳴らした刃同士の高鳴い悲鳴と共に始まった……

第六話（後書き）

感想が御座いましたらいただけると作者の励みになります。
よろしく願います。

第七話（前書き）

この作品は独自設定が含まれます。ご了承ください。

第七話

第七話

まずは、第一手

その結果が如何なるものであろうとも、私にとって不利益となるものは無い

私が愛し、憎み、そして求めて止まない
うか・・・見極めさせてもらおう

殺戮^{ころす}存在に足る者かど

なあ？ 真祖の吸血鬼？

嗤う、嗤う、嗤う、ワラウ……

彼は嗤う。彼の歩いた道筋の傍で朽ちた弱者を。

彼は嗤う。自分が浴びた血潮の温かさを。

彼は、嗤う……自身の愚かしいまでに無駄で滑稽な生と、それを定めたとされている神を嘲笑う。

「待たせたな」

そう言つて両手に料理を持つてやつてくる、先程私をぞんざいに扱つた吸血鬼。しかし吸血鬼が態々料理をするとは……

「今日の料理は俺好みにしたが、文句はないな？」

「はいはい、いいからさっさとしろ？　不味かつたらぶつ飛ばすから安心しな　愚図が」

天使のような笑みを浮かべ、ニコリと笑う。

私の神具と呼ばれる術式装備「投影鏡念」の能力。それは鏡に写した生物の人格と性格を完全に自身に投影し、姿形を写しとる能力を持つ。異端調査における潜入や組織へ潜り込むことに役立ってきた。

性格や仕草は勿論、私が発する言葉も基本的にその人物に違和感なく変換される。他者に“成り替わる”“擦り替わる”という困難を無にしてくれる私の相棒でもある。

……そう変換される、はずのだが…

「（オイイイイ！！ 何で？ 何でこの娘、こんな口が悪いの?!）
」

さつきから内心冷や汗を流しまくっている！ 何、この娘？！

投影する時に自然とその人物の基本的な情報も手に入る。そこで“
従者”という立場だったから私はアタリだと判断し、ターゲット標的に接触を
図ったのだが…

しかし、しかし！ この娘の口の悪さは…

「うつせえ。お前の犬のエサよりはマシだ。黙って食って感動のあまりに咽び泣け」

「まあ確かに。自分を保護した人のあまりの人の悪さ意地の悪さ性格の悪さに、己の不運を嘆くことはあるかもね？ 『ああ、なんて私はクジ運が悪いんだろっ』って」

「確かに。俺も嘆くことをやめられない。俺が手塩にかけて育てた従者は未だにあの黒い『暗黒物質』^{だーくまーたー}を時折皿につけて来るんだからな？ おかげで未だに俺が大半の飯を作るはめになってる」

「だから何度も言ってるじゃない。私はあなたの教えを順守しているだけよ？ “食物と己の中の矜持だけはないがしろにしてはならない”。それこそが己が己たる基礎基本だってね？」

「確かに。己の肉体と精神の基をないがしろにしている奴は早死にする。それも無様にな？ その俺の教えをお前なりに糧にするのはいい。だが、俺は今まで“アレ”が作者であるお前よりも皿に多く無かったことはないぞ？」

「ごめんなさい。己の主人への燃えるような敬意を込め過ぎてしまつて……。ああなるのよ。ああ、悲しい悲しいわ。せめてその想い

だけでも、と思って主人へ私の献身の証を捧げていたというのに……。その想いは届かなかった」

「届くかそんな爛れた敬意。だが安心しろ。己の主人を毒殺しようとする想いだけはあるありと感じ取れたから」

バチバチと両者間の間では激しい火花が散っていた。

ホント何で?! どうしてこんな険悪な空気を自分から生み出してるの?! 出る言葉出る言葉全てに毒が含まれてるし!!!? どうしてこうなった……

……早くもそのことを後悔し始めていた。

私は執行者の中では純粋な戦闘能力の高い方ではない。いや、そこまで弱いというわけではないし、それなりに研鑽を積んできたという自負もある。しかし、それでも“平均”よりは少し下にあたるだろう。

それは仕方ないのだ。私に出来ることもあれば、出来ないこともある。

あんな人間兵器の中で比べても無駄だし。

ワンマンアーミー

目の前で溜息をつきながら食事を並べる吸血鬼を違和感を与えることなく観察する。私が他に誇れる数少ないもの、それはこの“観る”力しかない。

強者は強者に敏感である、というのが私のそれを測る嗅覚は並外れているらしい。これは私の持論なのだが、真に“恐ろしい”者ほど自分の匂い、姿、在り方を偽ることがうまい。私のような潜入する任務に就くものにとって、それに気づくことが出来るかどうかが生死を分ける分水嶺となる。長生きするにはそのものを本当の意味で偏らない視点と確かな物差で測ること。これが必要だ。

故に私はどこまでも精緻に分析が出来る観察眼が求められたのだ。これまで始末した悪魔共もその物差で測った上で適切な人員、あるいは策略を持って葬ってきた

だが、そんな私にさえわかることはこの男の力量の底の知れなさだけだった……。とてもではないが私が正面からやり合って勝てるとは思えない。

身体 of 軸は一切ぶれていない。ただ、その状態を何時までも維持しているのではなく、時たまに崩しているかのようにしている。

一見隙だらけ。しかし、その実ではその身の周囲に空気に漂わせているかのように混じりあつてゐる微弱な魔力がその身に迫る危険を察知するのだろう。

……凄まじい。何という魔力制御か。周囲に余計な気をまき散らすわけでもなく、空気と同化する程にまで出力を落とし拡散した魔力を完全に己の意のままに制御している。

これでは余程の手錬であつたとしても隣りに立たれても何の違和感も感じない。身体 of 気配は一般人に限りなく近づけ、しかしその警戒心は一時も緩めてはいない……。

現に私のような解析に特化したようなものでなければ、違和感すら

抱かずにその間合いに入ってしまう。そしてその末路は

そこまで考え思わず寒気が走る。恐ろしい。たとえ直接戦闘に特化した相手であってもそのカラクリに気づかなければ圧倒的に不利だ。身体中に纏わりついた魔力が敏感に相手の動作、気、魔力の動きを感じとり、こちらの思惑など筒抜け。たとえ障壁でそれを防いでいたとしても変わらない。その場合は障壁の脆い弱所を探られ、防御の慢心をつくことに利用されることに変わりないのだから。

一見したただけの実力の片鱗でさえ“化け物”。

内心舌打ちをしながらも、違和感を与えないために差し出された料理に手を付ける。

「……」

おいしい！ 何だこの鶏肉の溢れんばかりの肉汁。そしてその味を際立たせるふんだんに使われた香辛料！ こんなもの食べたことない……

「どうだ？ うまいだろう？」

確かに絶品だ。これほど高価な香辛料をうまく使った料理はそこらでは見かけないだろう。本当の意味で肉を際立たせている。とてもではないが私には無理である。

だが、次に彼の口から出てきた言葉は私自身としては認められない事実の追及であった。

「侵入者さん？ 歓迎のもてなしとしては満足出来る品だったろう？」

それは私にとっての“詰み”を意味する宣告だった……。

「侵入者さん？ 歓迎のもてなしとしては満足出来る品だったろう？」

揺さぶる。先ほどから感じていた些細な違和感。それを確かめることができた。だが、すぐに殺したりしない。確認しなければならな
いことが幾つかある。まずは探る作業から始めようか。

「？ ついにボケたのかしら？ いつも顔を合わせている私を突然
侵入者とか……あまりふざけたこと言々と切り刻むわよ？」

何処か頭の逝った可哀想な人間を見るかのような腹の立つ眼を向け
てくる。ふむ、実に巧く朔夜に化けている。瓜二つだ。とてもでは
ないが余程のことでは気づかないな。それに肝が据わっている。顔
色一つ変えないとは。

「いいからさっさと正体を現せ。 もう無駄だ。」

だが滑稽な茶番ももうお終いにしよう。ジワリと殺気を滲ませ、互
いに睨みあう。その瞳からは何の感情も感じられない。

そして

「…………ふう。 どうやらここまでのようね。 どうしてバレたのか聞い
ても？」

初めてバレただから。と言って俺に話をさせようとする。……時間稼ぎか。いいだろう。乗ってやる。俺も最後に確認しておかなければならないことがあるしな。

「まず最初に感じた違和感はいくつかあるが、疑念を持ったのはお前と交わした先ほどの会話からだ」

「？　どういうこと？　自分で言うのもなんだけど、雰囲気とか仕事草まで完璧だった自負はあるんだけど」

この様じゃそれも説得力ないけど……と続ける。確かに表面上のものは完璧だった。

「そうではない。だが、確実なのはお前のその変装とでも言えいいのか？　それ自体は完璧だったがやはり綻びがあった。

お前は覚えているか？　先ほどの俺の『番犬はどうだった』という質問にどう答えたのか」

怪訝な顔をする。確かにごく普通の受け答えであっただろう。だがそれ故にお前は完全には化け切れなかった。

「答えは簡単だ。“番犬”というのは俺たちの間の『何か異常はな

かったか？」という確認を示す隠語だ。……どうやらお前のその能力がアーティファクトかしらんが、それは基本的仕草や性格はコピーできて知識を完全に写すことは不可能なもののような？」

その答えに動揺は表には出さないが、　当たり、のようだ。だが実はこの答えは嘘でもあり本当でもある。確かに隠語としての意味もある。だがしかし俺が疑わしく思ったきっかけは単純である。あの時の答えでコイツは番犬のことを『あの犬』といった。別段話の流れでそう使うのはおかしくない。だが、朔夜があの犬を指す時は必ず『駄犬』と言う名前で呼ぶ。

そして確証に至った理由は俺の出した料理だ。

コイツは味の濃いメインの肉に眼が行っていたが、あの料理には朔夜が嫌いなオニオンがさりげなく入っていた。普段のアイツであるならば残しはしないものの一言文句を言ってから食うだろう。そこらではまず見ない料理や調理に注意をそらされていた。作法云々が完璧であるが故にアイツ特有の反応の違いが顕著であった。……という、なんとも間抜けな理由であった。

……真実を告げるのはあまりにも慈悲が無さ過ぎる。プライド的な意味で。

どうやら身体的な行動や言動の特徴などは完全に模倣できるが、自

発的な行動の細部までは再現できない能力のようだな。

しかし、これは厄介な連中に眼を付けられたな。この屋敷の結界を軽々と突破できるような戦闘員がゴロゴロいそうだ。それでなくてもコイツのような厄介な能力持ちがいる時点でヤバイ。

「さて、今度は俺の質問に答えてもらおう。言っておくがお前に拒否権はない。少しでも虚言の色が感じられたらお前には意思無き傀儡となってもらおう」

これで俺とコイツの間の無条件での情報の取引という形が成立した。そしてコイツは俺の言葉に心底嫌だという顔をする。

「大丈夫、直ぐに終わる簡単な質問だ」

では、時間が無いので単刀直入にいこうか。

「お前らの中に“予言者”と呼ばれる存在がいるか？」

動揺を顕わにする。もちろん表面的なものではない。

脈拍の一時的な乱れ、視線と瞳孔の僅かな揺れ、身体の細部に僅かな発汗

それらを周囲に散布した魔力と五感による観察によって確認する。

そうして俺は決定的な問いによってその身体的反射を捉える。まるで蜘蛛の糸に獲物を絡め取るような心持で最後に仕上げる。

「……Yes or No?」

第七話（後書き）

大学の後期の追い込みがようやく終わりました。とてもではないが執筆している暇なんて無かったです……。しかも久しぶりに書いたのでいまいち進まない。とりあえず今話はここまで。感想いただけたら嬉しいです。

第八話（前書き）

この作品には独自設定が含まれます。ご了承ください。

第八話

「お前らの中に“予言者”と呼ばれる存在がいるか？」

この言葉を聞いた時の私は正に心臓を鷲掴みされたような心地であった。

何故この吸血鬼がそのような質問をしたのかはわからない。だが、目の前にいる死神の眼は私の反応を逃さないとばかりに、静かに居竦むような眼光を光らせている。それは私に喉元に剣を突き付けられたかのような錯覚を引き起こしそうになる程の威圧感と圧迫感を感じさせている。

「Yes or No？」

……だめだ、虚偽は通用しない。だがしかし真実は告げられない。

今までこんな任務に従事してきたからこそ分かる。“コイツ”にだけは、死んでも情報を渡してはだめだ。“コイツ”はこれまでと違う。私たち自身、いや人類全てを滅ぼしかねない存在だと確信した。確たる証拠などはない。だがしかしコイツから感じる血と屍の臭い

……何よりも私の本能が叫んでいる。 コイツだけは必ず殺して殺して殺しつくさなければ……ヒトは滅ぶ、と。

「いいえ」

だからこそ私は笑う。私の顔には死に臨む覚悟を決めた者だけが纏う死相が浮かんでいることだろう。何度も見てきた。

だからこそ、その行く末は承知している。……私は生きて戻れないだろう。

だが、それが何だというのだろうか。生は苦しみ。死せば審判の後に神の元へ。叡智の父の導きのままに……それが我らの教え。死は終わりではない、救いの始まりに過ぎないのだから。

私達が心の支えとしているのは世に蔓延る大勢にとって都合のよい“解釈”ではない。……教えによって導かれ辿りついた、己自身の答えを得た自身の魂の強さだ。

私の言葉にさもおかしいとばかりに目の前の化け物は微かに微笑みを浮かべる。

「美しいものだな？ 死を覚悟した真に強き者の最後とは。お前は
その選択に後悔は無いのかな？」

「……」

「先ほどの言葉に虚偽は感じられなかった。だがしかし真実、とい
うわけでもない。おかげですっかり煙に巻かれてしまったな……こ
こまで追い詰められて最後まで揺るがないとは。」

見事。そのお前自身を支えている芯は余程強いものだと窺
えるな」

そうして私に向ける視線は変化した。郷愁、悲哀、憎悪、慈愛……
それらが入り混じった視線。その先に何を見ているのかはわからな
い。だが、わかることはコイツも私を殺すべき存在と捉えたことだ。

「ああ、実に厄介だ。お前たち人間だけが持つその“強さ”。
決して折れない“信念”。善悪問わずにそれを持つ者は決して引
かず、朽ちず、諦めず、そして強い。実力の壁なんてものはあっさ
りと越えてきやがる。……殺したくなるほど愛おしく好ましい」

そうして私たちは一拍置いて互いにニヤリと笑う。

ここから交わすのは最早言葉ではない。

「
ざまあみろ、化け物ッ!!」

「
ほざけ!! 人間がッ!!」

交わす剣があげる甲高い金属特有の共鳴音。響き渡るそれが戦の関
となつて私たちの間を駆け巡った……。

互いに剣を奔らせる。俺は影魔法の応用である影の剣を、相手は隠し持っていた短剣を。こちらは一本。あちらは二本。

繰り出す剣戟はこちらが一なら相手は四、五といったところ。俺は自身の間合いでの勝負に持ち込むような流水のように連続して打ち込む。対して相手はその流れに逆らうように、嵐のような手数を重視した攻めを見せる。

こちらが喉元へ鋭い突きを出せば、それを皮一枚で避けて、合わせるかのように刃の上を短剣が走り、手首から先を切り落とさんと迫る。

それをこちらも皮一枚でかわし、密かに二の太刀として迫っていたもう一方の短剣を弾く。そして体勢を崩した相手に回避困難な胴にある急所のみぞおちへ前蹴りを放つ。

しかしそれを弾かれていない方の右手を引き寄せ肘で防ぐ。

気を込めた一撃だったが、それはあちらも同じく気で強化しているために決定打にはならない。

そして、再び接近しようとする動きをみせる。

だが、それは悪手だ。

「ダ・トッド・ファンゲット。火の精霊34柱。集いて来りて敵を焼け」

「!? 速い!!」

「『魔法の射手・連弾・火の34矢』」

瞬時に打ち出された魔弾が襲う。絶好のカウンターとして打ち込まれるソレを瞬時に弾いてはいるが……

「ハアアッ!!!!」

「?! 何ッ!？」

そこへ間髪入れずに気弾を掌から放つ。それをまともに喰らい、吹き飛ぶ。だがまだだ。まだ終わらせない。

「カハッ!!!？」

「こつちだ」

ハッとした顔で振り下ろされた一撃を交差させた短剣で受け止める。
が、それもまたこちらの狙い。

「ハイドエッジ
隣に潜む暗殺者」

「なっ！！！？」

一瞬で剣の形状が変わり小型の人型になって二つの短剣を握りつぶす。そしてミドルキックで敵の肋骨を何本か砕く。そして吹き飛んだ相手の周囲に漂わせている魔力を利用して背後にも分身を生み出し、そして

「オーバーロード
魔力暴走」

一気に暴走させ爆発させる。

豪快な炸裂音と共に周囲の壁は粉々になって消し飛んだ。頬を撫でる風は熱く、爆発の余熱が含まれている。周囲を駆け巡る粉塵は爆発の規模の大きさが感じられた。

ひゆるひゆると孤を描いて相手の持っていた短剣の残骸が足元に転がってきた。

「……………」

それには目もくれず、残骸の山と成り果て、今だに煙を上げている向こう側を凝視する。

「ふゝん……………」それがあなたの能力？ 始動キ―無しであれ程精密な影の人形を操るのは無理だと思うし」

煙をゆつくりと引き裂いて向こう側から現れるのは朔夜の姿ではなく、本来の姿に戻ったのであるう女がいた。20代前半位で淡いブルーの瞳に、少しウェーブがかかった長髪。引きしまっていないながらも、女性特有のしなやかさは失っていない肢体。だからこそ不可解な点が浮かび上がる。

「それもお前の能力なのか？いや、術か…… 手応えは確かにあったのだがほぼ無傷とは。実に面妖だ」

女の着ている服はあちこち破けて非常に扇情的な状態になっている。しかし、所々に煤がついてはいるもののその下にある肌には傷一つない。

「あなたがソレを言う？」

「違う」

そうして笑い合う。確かに自分が言えたことではない。そして女は目を細めた。それはまるで男女の逢瀬を楽しむかのように楽しげだ。

「……ねえ、あなた名前は？」

「……何故それを急に問う？」

そう胡散臭げに問い返すと女は不満そうに頬を膨らめた。

「知りたくなっただもん」

「どんな理由だ」

「いいじゃん。私も名前教えてあげるよ。『アイリ』。覚えやすいでしょ」

「……ノア」

ノアがあゝとは口の中で噛み締めるようにつぶやくとニコリと笑う。

「『ノア』ね。覚えたよ。これで忘れないから安心して」

そうしてアイリは口元を釣り上げ笑みを浮かべ、指先をペロリと舐める。まるで猫のような仕草をした。

「これから死ぬ相手の名前だけど、忘れないで置いてあげよ。それに自分を殺す相手の名前くらいは覚えておきたいと思うから私の名前も忘れないように」

そうして浮かべた笑みは妖艶で、実に魅力的だと思いつつこちらも笑みを浮かべる。だが、こちらは相手を見とれさせるようなものではないだろう。久しぶりに愉悦を感じる殺し合いの相手に対する敬意と敵意を込めた“原初の威嚇”。獰猛に形作られたソレは嗜虐的な歪みを感じさせる。

「さあ、もつと踊ろつか！！！」

互いに交わす言葉は存在せずに、交わすは剣による一撃。再び合わせるその重さは変わらない。だが、込められた想いは確かに変わっていた……。

一撃一撃を交わすごとに伝わってくる血と汗と越えてきたであろう屍の数。そして己自身の命の輝きを互いに見せつけ合うようにぶつけ合う。

“人”という存在に許される、単なる戦闘力では計り知れない思いが壁を超えんと襲いかかる。

烈火の如く、打ち合う鉄の音は互いの魂を鍛つ。周囲に散らばる衝撃は戦いの場を盛り上げる舞踏曲となる。

まただ

そう思い、ノアは笑う。後三手で詰むと思っていた攻防を己の限界を押し上げ、あっさりと捌き切った。

目の前の女の力量は既に当初の量を大きく逸脱している。つい数十分前までは歴然としていた実力差をあっさりと埋める何かを燃烧させている。

「あはははは！！　これだ！！！」

虚空瞬動で互いに間合いを牽制しながら激しく打ち合う。右手に携えた短剣が幾閃もの軌道を描く。それを紙一重、皮一枚で捌く。互

いに瞬動の先を読み合い、瞬間移動を繰り返す。周りからは彼方此方での衝突音しか探知できないだろう。

「知恵だけでも、力だけでも、勇だけでも足りない！！ 全てを持つてしてもなお届かない、そんな壁を傲慢にも乗り越えんとする！ 咎深き人が誇るべき力そのものだ！」

「あああああああッッ！！！！！」

影の剣が右肩に突き刺さりながらも獣のような唸り声をあげて短剣を投擲する。それを回避して掌底を放つ。しかしそれに合わせるが如く、どこからともなく現れた短剣が掌を貫く。瞬間に繰り出した膝蹴りを相手は前蹴りで相殺する。再び離れる距離。しかし、互いに離れながらも詠唱する。

「破壊の王にして 再生の微……」

「！！ 来たれ 虚空の雷……」

互いに渦巻く力を現象へと変ずる言霊を紡ぐ

「我が手に来りて 敵を喰らえ…」

「薙ぎ払え…」

そしてその力の開放が

『紅き焰!!!』

『雷の斧!!!』

奔る爆炎は全てを焼き払い、大地を、空を焦がす。何もかも飲み込みながら突き進むソレは本来の威力を隔絶していた。

しかし、ソレと拮抗するのは術者の限界すらも越えた雷の裁断の刃。全てを飲み込まんと迫る火砕流の如き魔法を打ち砕かんと衝突する。

そうして、後に語られる化け物達と殺し屋の壮絶な戦いの火蓋が切って落とされた……。

第八話（後書き）

感想がございましたら作者の励みになりますのでどうかよろしくお願ひします。

第九話（前書き）

独自設定が含まれますのでご容赦ください。

何度書いてもグダグダ感がorz いや、最初か（ry

第九話

パラパラと降り注ぐ土砂のスコールを肌に感じながら、ノアは立ち上る砂塵の向こうを凝視していた。先ほどの魔法の打ち合いは完全にこちらが勝っていた。だが、それ故に勝負はついたと判断しているのではなく、この程度で終わる相手ではないということを理解しているからである。だがしかしだ

（少なくとも現時点においては、負けは無い）

心は先ほどまでの心地よい命の鎬の削り合いで熱くはなっているが、一方で冷徹に判断を下す頭の方は終始冷静なままである。その証拠にノアは己の強力無比である固有スキルは『隣に潜む暗殺者』を一度使用しただけでそれ以外は一切使用していない。それも攪乱や探りを入れる目的の用途である。

それ以降はこの世界で新たに身に付けた技能しか用いていない。魔法や戦闘技能としては基礎の領域に当たる気の運用だけである。簡単にいえば、実戦における試験運用とでもいえいいだろうか。これまでノアは固有スキルを戦の軸として運用していた。だが、この世界に来てから磨いてきた、特に“魔法”は対人戦においては今回が初めての実戦において使用となる。それらの知られても痛くない手札のみで戦っていた。

そして警戒し続ける頭の中の並列思考では先ほどから懸念している事柄について思考していた。

（俺がこの世界にいるということ、というよりも俺の存在を知るものなどこの世界にはいないはず）

まず現時点では魔法世界とこちらでは呼ばれている向こうの世界とこちらの世界は交流は無い。存在するか怪しいものとして、どちらの世界においてもお伽噺に語られる程度である。こちらとあちらを繋ぐゲートもない。故にあちらの世界での行動がこちらの世界に伝わるということもない。

更にノア自身が自分の危険性について自覚しているために、存在の隠匿については細心の注意を払ってきた。周囲に強烈に印象付ける、“ノア”という個人の存在の根付けから朔夜の養育に至るまでの全てに至るまで不自然のないようにだ。少なくとも周囲と逸脱した行動を取ったと判断されるのはあくまで存在をすり替えた時のみ。それ以外は隠匿は完璧だったはず。そうそれ以外は

“ノア”吸血鬼”と結びつけるに足るモノは一切無いはず……。

（だがやつらは一切のこちらを嗅ぎ取る気配する見せずに俺の元に辿りつき、はつきりと“化生の存在”と認識した上で襲撃をしていた）

そしてノアは、先ほどのやり取りで影の剣に付着した相手の血液を舐め取る。

ほんの少量しかないそれは不明瞭でおぼつかなく、とてもではないが記憶を遡ることは出来ない。しかし状況を判断するに足る情報は提供してくれる。

（襲撃者の人数は二人。結界で感づかれることを恐れて大人数での襲撃を避けたのだとしても少なすぎる）

逃走ルートを他で抑えているのだとしても少なすぎる。それにここまで盛大に戦闘しているのだ。もはや結界等関係ないし、援軍として予備戦力を何人が置いていても問題ないだろう。

だがしかしその気配は無い。単純に考えるのならこの二人は捨て駒。こちらの戦力把握をするために送りこまれただけという考えも出来る。だがここまでの戦闘者をそうもホイホイと捨て駒にできるような組織はそうそうないだろうし、もしそうであるならばこれまで自身が築いてきた情報網にそれ程の規模を持つ組織が引つかからないはずがない。朔夜を育てると決めた後は更に念入りに入り組ませた情報網である。まず違う、と考えてもいいだろう。

次に考えられるのは俺や朔夜ではなく俺たちの持つ所持品を目的としていた陽動であった場合。まずそんな狙われるようなものはこの屋敷には置いていない。その場合、金目の物目的はまずないだろうから、研究している魔法関連だろうが、それは朔夜さえも何をしているのか知らない。そんなものを盗むなんてことは不可能だろう。

そして考えられるものの中で最も厄介なものは

（通常の方法ではない、何らかの特殊な方法で俺の存在に辿りつくことの出来る存在　例えば予言者と呼ばれるものの類　予知能力者の類がバックに存在するような相手に俺の危険度が察知されてしまっている場合だ）

それが本質ではないにしろ、心を読むことを造作もなく可能とする能力者が存在する位だ。それくらい存在すると考えてもいいだろう。“ありえない”と切って捨てられる程樂觀的ではられない。何せ身近にそういう存在がいるのだから尚更である。

先程はこちらにうまく尻尾を掴ませなかったが、その類の能力者が背後にいと想定した動きをすべき、と判断してもいいだろう。他にも様々なことは考えられるが、それらを想定した対策はいずれも既に打ってあるのだ。故に、これから取るべき行動は……

そんなことを考えていたせいだろうか。突如として背後の壁が吹き飛ぶ。今夜はどれほど屋敷の壁を崩壊させれば気が済むのだろうか？　そう諦観の念を抱いてしまっただけで盛大に吹っ飛んだ。そしてそ

の向こう側から金属の衝突音が幾度となく聞こえてくる。そして一
際甲高い互いの獲物が奏でる音色を響かせたあと、煙を裂いてこち
らに良く見知った顔が飛び込んできた。

「
終わっただのか？」

「
まだ。そっちは？」

そうして、いつものティータイムの時のような気楽な調子で背中合
わせに言葉を交わす。互いに口元は僅かに綻んでいた。

「こっちは中々に骨のある相手だ。何せどこかの麗しいお嬢さんに
良く似ていたのでは？ 興味深いので話が弾んでしまった」

「……まったく。こっちは無理やり暗がりには引きずり込もうとする
ような変態の応対に四苦八苦していた時に、あなたはどこの誰とも
しれない女に鼻を伸ばしていたのかしら？ 汚らわしいから離れて

くれる？」

「おいおい心外だな。俺はただ紳士的に舞踏ダンスの御誘いをしただけだ。まあもつとも少々……熱くなってしまったが、な」

そうして互いの得物を構える。俺は影の剣を。朔夜は俺が与えた刀を。

「……ほう。それを出すとは余程の相手だな。少なくともそちらも一筋縄ではいかない相手らしい」

「そうね。あなたが言っていた通り、己の中に確たる“芯”を持つものは厄介ね。それが歪んでいるかどうかは別として……殺しても殺しきれない。腕一本斬り落としてもまだ隠し玉を隠していたとは思わなかったわ」

「こつちもだ。最初の量りなど完全に裏目にでたな。最早完全に限界という名の壁を超えたぞ。もはや別人だな、アレは。窮鼠猫を噛むどころではないな。噛み殺す勢いだぞ？」

そうして互いに目の前に現れた敵を目にして笑う。

朔夜の相手にしていたと思われる男は全身から血を流していない所など無いのではないか、という位に血を流し、片腕が無い。いや、あるにはあるが、その腕がまるで糸に括られた人形のようにナイフを4本それぞれの指の間に挟んだ状態で男の周囲を浮遊している。顔に浮かべた狂笑は最早人間が生きながらにして発していい空気ではない。

一目見てわかった。あれは戦に狂った鬼だ。それも自ら望んで狂った戦闘狂。血を啜るように他者との命の殺り取りこそに至高の悦びを見出す狂人だ。嘔き出す気配は最早化け物と言われても否定できないまでにおぞましい。

そしてこちらを見るアイリの表情も凄まじい。口元は三日月のように孤を描き、まるで幽鬼のように佇んでいる。そして、またしても身体には一切の傷はない。だが、その破けた衣装はほとんど血塗れで、怪しげな妖艶さの中に一層の歪さを感じさせる。まるで紅の衣を纏った死神だ。

どうやら俺との戦の間で、それまであった己の限界を突破して新たな領域に辿りついたらしい。その全身から立ち上る魔力の総量自体に変化は見られないがその質がまるで違う。力強く大河のように雄大に、されど静まり切った湖のような静寂さを併せ持っている。もはや負けは無いなどという心構えのままでは危険だ、と判断せざるを得ないほどに。

互いに示し合わせたかのように、気を昂ぶらせて戦闘状態に移行する。

そして再び刃を交えようと互いの空気の膠着が決壊する寸前に、俺は無粋な来客が近づいてきていることを察知した。

「 チツ。 警備の兵どもか。水を差す真似をしやがって。」

どうやらこの騒ぎを聞きつけてこの街の周辺の警備を担当していた兵が集まってきたようだ。当然か。いくら防音や認識阻害の結果が張ってあったとしても、これほど大騒ぎすれば誤魔化しも効かなくなるだろう。……それにどっちにしろ撤退すべきのようだ。どうも監視されている節がある。こいつらも追跡の準備を確固たるものにするために命を賭した時間稼ぎをする気のようにだ。

すると、朔夜もそれに気づいたようで、囁くように相對する二人を警戒しながら俺に声をかける。もっともその顔は興が削がれた、と言いたげに不満げであるが。

「で、どうするの」

「決まってる。ここを放棄する。手筈通りにな。教えたる？ 隠れ家などいくらでもある。逃げるぞ」

「……了解」

もつとも、もし相手側に予知能力者の類がいたらあんまり意味がなさそうだが。

しかし当然こちらの事情を鑑みてはくれないらしく

「それを私たちが許すとしても？」

「周囲の兵など我等の部下が抑えてるだろう。勿論此処も包囲されている。逃走経路は皆無だ」

「おいおい……。逆に聞くが本当にそいつらだけで俺たちを止められると思うのか？ 無駄死にだぜ？」

時間を稼ぐ。
「俺」もだが。“道”を拓く為に必要な時間を稼ぐ。

「させんよ。『門^{ゲイト}』も使えない。繋げそうな媒体は無い上に、ここには既に我らが結界を張ってある。無駄なことはよせ……。それより、さつさと殺ろうじゃないか。互いにそんなに時間は無いだろう？」

確かに近くにあるもので媒体にできそうなものは無い。しいて言えば風位だが、残念なことに風は俺が最も苦手とする属性で高等魔法である『門^{ゲイト}』は使えない。それでも脱出手段はあるにはあるのだが、結界という存在が逃げる“道”を遮断している。

「そうよ？ デートのお誘いをすっぱかすなんて男の風上にもおけない位失礼なことよ？」

そうしてアイリは嘲笑する。もう今にも飛びかかってきそうだ。

だが……間に合った。

俺は口角を釣り上げ、眼を細めて静かに言葉を紡ぐ。

「
朔夜」

そうしてあからさまに目配せする。朔夜は溜息について肩をすくめる。当然アイリ達は怪訝な顔をして警戒し、何かする前に阻止しようとするが

「
まったくマスターは人使いが粗い」

二人の召還した悪魔達が俺たちの前に現れることでその動きを止める。

「召還術?! でも何の触媒も詠唱も無しに!!?」

「しかも、これは一筋縄ではいかんな……」

溢れる力と魔力はその悪魔が有象無象の類ではないことを彼等に示す。そして身につける鎧は血に塗れており、つい先ほどまで殺し合いをしていたようである。

「ほう……中々」

そういつて悪魔は顎を撫でながら眼踏みするかのように彼等を眺める。その瞳はこれからの闘争への愉悦を楽しみにしているかのようであった。

「じゃ、任せた」

「ああ、任された」

「くっ！ 邪魔するな！！」

そうして剣戟の嵐が巻き起こる。その音を背にゆっくりと立ち去る。召還した悪魔達は子爵級。しかし制約は何も無い状態……。

通常の召還は必ず制約という名の縛りが生じる。何故なら魔界という異なる世界からの召還であるからである。そう簡単に取り外せるものではないのだがそれを可能としたのは、かつて“殺した”強者の技術である。ソレを応用して製造した“人工”の悪魔。

魔界から召還するのではない、自らが創った存在であるならば仮契約の要領で呼び出せる。もっとも、魔眼でコピーしたのはあくまでも戦闘可能なレベルの人工魂と魔法生物の生成術式と維持術式。そのためそこから完全に自律した人格と思考ができるだけのレベルに発展させることはそう簡単にいくものではなかったが……。

そして

「
斬れるか？」

「ええ」

朔夜が結界の一部をあっさり切り捨てる。不可視の障壁が糸が千切れるようにその効力を失っていく。

「?! 嘘だろっ!!?」

「よそ見はいかな」

「くそが!!!」

必死に追い縋ろうとするが、それも阻まれる。その表情には隠しきれないほどの焦燥の色が浮かんでいた。
では、 “ また ” 会おう。

「ノアあああああああ!!!!!!」

こちらを今にも噛み殺さんとするかのようにアイリの怒声が背に突き刺さる。憤怒の想いに返すのは、嘲り。どこまでもどこまでも…
…面白い。

ぽつり、と言葉を返す。

『いきげんよう』

いつでも。いつまでも。俺の掌の上で踊って踊って踊り狂え。

その背に浴びせかけた如何なる言葉ももう彼には届かなかった。

そしてもう用済みとなった屋敷に背を向けて歩き出す。……暫くは無縁のものとなるだろう『安穩』とともに別れを告げた。

第十話（前書き）

独自設定が含まれます。ご了承ください。

今回は結構グロい描写があります

第十話

「巧遅より拙速を取る」

「え？ あんなに「覚えとけよ！」みたいな去り方しておいて？」

隣を歩く朔夜が俺の意図を察して驚いた顔をする。ちなみに今は3つ目の隠れ家を経由して“また”戻ってきた所だ。といっても口ーマの近辺であるというだけだが。

「だからこそ、だ。今度はこつちから“奇襲”する」

何にせよ予知能力者の類がいるなら時間を置いた作戦なんていうものは無駄。さっさと実行部隊を消して元を断つに限る。

そして大体こういう精緻な予知が出来る能力者は戦闘能力に割くリソースは然程なく、後方で支援に徹するのが鉄則である。故に、イレギュラーに弱い。

そういった旨を話すと朔夜も納得したようだ。

「ふうん、でもどうやって？ 監視には私も気づいてたけど流石に元は辿れないわよ？」

「影を使う。元々俺の能力はこういう事の為に在る」

一瞬で数百の影の分身に核を埋め込む。こいつらは生きていないので気配が全くない。最高の斥候兼暗殺用の能力だ。ましてや今は夜。“俺”の独壇場である。

「監視に適したポイントを調べる。そして“潜れ”」

次々と夜の闇に溶けていく。これであいつらの大凡の構成員は全滅である。知らず知らずの内に自分の影に潜り込まれて爆死決定だ。

「手駒の子爵級なんて悪魔を二体も召還したのはこういうわけだ」

俺の創造した中でも最高位の存在を消費魔力を度外視して召還したのはちゃんと考えがあった。向こうにとっても脅威となる強さだ。

「……確かに私らが行方をくりましたなら、無理に追いかけるよりも崇拝する予言者サマにお願いしたほうが合理的だと思うわね。そして目の前の戦闘に注目する、と」

呆れた様子でこちらを見ってくる。容赦ないわね、なんて呟いてるが殺し合いなんてこんなもんだ。疑問を持たずに思いこんだヤツから死んでいく。戦う為に存在する戦士は生死の境に存在する危うき天秤に常に晒されてるのだから。

「手早く、静かにいこう。……あの二人レベルの執行者とやらはあと何人だ」

「三人。アイツから“視た”。でもどうやらその内二人は戦闘というよりどっちかといえば探知と支援型。

一人は他人の目を借りて多視点から監視できる能力で、もう一人が精神感応の能力。他の構成員の精神に同調して管制指示してる」

そして、と前置く。どうやらもう一人はあまり“関わりたくない”お方らしい。

「最後の一人がヤバいみたいね。なんか“不死殺し”なんて二つ名持つてるらしいわよ？ ここにはまだ来ていないみたいだけど。他に詳しいことは知らなかったばかりでわからなかったけど、ね」

どうする？　なんて笑みを浮かべているが眼は笑っていない。決ま

ってるだろ？ そんなこと。

「ここでまとめて潰す。もちろんその“不死殺し”とやらも誘き出せそうなら一緒に、な？」

俺らの平和の邪魔だ。さつさと牙はへし折るのが一番だ。

「それで私は？ 何をすればいいの？ 悪い吸血鬼サマ？」

「やけに楽しそうだなあ、お前。……まあいい。その二人と監視は俺が全部殺す。お前はあいつらの下部の武装兵を静かに消していけ。それで向こうの悪魔と戦ってる二人は」

「悪魔との戦闘が終わり次第、生き残っていたら不意打ちで殺す、ね」

そんなところでしょ？ そんな言葉が最後に付け加えられる。

「……合ってる、合ってるんだが……。この性格の悪さは誰に似たんだか」

ちよつと真剣に悩んでしまう。

「あなた以外いないでしょうが……ねえ、それで相手の予言者サマはどうするのよ？ 正直言つて相手は“組織”よ？ いくらこつちが個人の力では勝っていても、これから相当何かにつけて煩わしくなるんじゃない？」

呆れた顔で俺に問いかける。そう、そんなものだ。群に個が立ち向かうことはそれだけで不利である。まともに向かい合ったらの話だが。だが俺の考えは決まっている。

「こちからの伝言が伝わるから大丈夫だ。きっとヤツらへの“首輪”になるからな」

「？ どういうこと？」

笑みを浮かべる。月光が優しく、この世界で唯一守るべき存在と己の中で認識されるようになった愛しき存在を照らす。……そう守るべきものはただ一つでいいのだ。それ以外は己を縛る首輪にしかない。

「なあ、朔夜。人を抑える首輪になりうるものっていつのは何だと思っ？」

「？」

疑問符を浮かべる朔夜にそのまま俺の考えを伝える。既に自己を確立させている俺は揺るがないし、ブレない。だからこそ、俺の本質を知っているだろうお前には考えは隠さない。

「それはな。 “弱さ”と“恐怖”だ。そう俺は思っている。勿論分別の無い欲やら愛やらなんてのもあるだろうがな。だが、これから人間がいくら発展していても、この二つだけは変わらずそのままだろうな」

そして人には強さもある。熱意や愛、希望……それらは人間誰しものが持っているものだ。それらは他と結び付くことで更に強固にその輝きを増す。しかし硬く結びつくが故に非常に脆い。

そして儂くも崩れ、折れたそれらは一転して弱さとなる。己を縛る肉体という器へとその思考は移り、内へ内へと沈んでいく。そこに“他”はない。強さなどない。ただただ己のみしかない。そして、背負うものが多ければ多いほど、人は強くなり、また弱くもなるのだ。

「そして、その弱さは必ず周囲を犠牲にし、つけいる隙が生じる。自らが望むとも望まなくとも、な」

だからこそ告げるのだ。

「次は無い。『俺たちに関わるな。"コレ"はその結果だ』、と伝えればいい。そうして植えつけるんだよ」

そうどこまでも惨たらしく、もう関わることを拒絶するようにな。そんな悲劇を見せつけられればいい。末路を、教えてやればいい。

「そう“弱さ”は“恐怖”と結び付くものだ。人を支配するものは神でも権力者の王でも何でも無い。己を縛る肉体という器……故に、どこまでも原初へと人を立ち返らせる様々な“痛み”は人を縛る」

「どんなに崇高な人間や極悪非道の悪人であつてもあらゆる痛みは脳を一時的にであつても支配することが出来る。

二度と味わいたくない、自分がその被害をこうむりたくない……そう思うほどに、分かりやすいまでに理不尽な覆しがたい力で示された暴力というものは、それだけで人を“恐怖”させる。そして極限状態に追い込まれた人間の意思というものはどれも弱い」

どれだけ綺麗事で飾ろうとも人間が各々の考えや信仰の違いを表面上とはいえ抑えてきたのは、いかなる形であつても互いに抱く、相手が持つ己を傷つけうる“暴力”である。そして血で血を洗う戦という名の暴力の混沌の中で互いに互いを認識してきた。あるいは国を支える利を相手に握られている。

そんな風に、互いに笑顔で握り合った友好を掲げたその手とは裏腹に、その背に背負った隠しきれないほどに大きな鋭い剣を互いにあえて見せつけ、関係を保つのだ。これはどこまでいっても変わらない現実であろう。

「“弱さ”という種に“暴力”という水を与え、じつくりと愛でるようにして “恐怖” という感情を芽生えさせる……これから行うのは言ってしまうえば、今まで何千何万と繰り返されてきた原初の示威行動に過ぎない」

だが運の悪いことに俺は、
腐るほどに
そういうやり方は慣れ切ってる。

「……少々、やり過ぎてしまつかも、知れんがなア」

そう言つて浮かべた彼の笑顔は今まで浮かべた中でも一番彼に似合っていたかもしれない。善悪全ての区別を飲み込み飲み干す一つの極地に至つた者。

それは正に悪鬼そのものだった。

「……！　くそっ！　完全に逃した」

「まあ、普通はあんな連続で空間転移するとは思わないよな」

完全に標的を逃した俺とバークはほぼ同時に溜息を洩らす。完全・に・逃・げ・ら・れ・た。イラッとするぜ、こんちくしょう。

『おい、管制どうした』

アイリ、さんのどこか気が抜けたような声が頭の中に響く。やっべ殺される。さっきまで怒り狂ってたからそのギャップが怖いのだ。あ。

『すんませうん、真祖には逃げられました』

『あゝ……しょうがない、じゃ予言者様に後でもう一回“見て”もらうか。じゃ、こいつらの解析よろしく』

確かに。その方が簡単だし確実だわな。

そういつて、念話が途絶え彼女は目の前の戦闘に集中した。

迫る拳を弾き、背後から迫る魔弾をクルリと宙返りすることで回避する。その動作には少しも迷いもなく余裕の笑みすら浮かべている……おい、別人じゃね？ 全然俺の知ってる人とは別人なんですけど？ もう完全に人狂いのレベルよ？ アレ？

「ひゃあ、こええ。怖いなオイ？ ああ攻撃を簡単に捌いてんぞ。ちよっとおかしいだろ」

隣のバグも同じことを考えていたらしい。彼はいくつかの箇所^{ポイント}に散らばって潜伏している監視兵の眼を共有することが出来る。それによって相手の持つ能力を分析することに長けた執行者である。俺と同じ直接の戦闘力こそ低い我非常に重宝される稀有な能力の持ち主だ。

故に彼に求められることはただ一つ。『情報』を集めること。それが至上の任務だ。

監視兵も同じだ。よって彼等はその情報を集め持ち帰ることが何よりも優先されるべきことなのである。必要なら味方を見殺しにしても価値ある情報を持って帰る。悪魔との戦闘には命よりも情報の方が重要であるからだ。しかし、その行為を批難するものはいない。何故ならそういう狂った連中の集まりなのだから。

悪魔に殺されるヤツが悪い。そういう認識で通っている。

さあ、て滅多に観測できない『子爵級』の悪魔なんて化け物の基礎データを集めんとねえ……。

そして暫く観察しながら俺も周辺の武装兵に指示を出す。魔法やら何やらの怪異の痕跡を残すわけにはいかなからな。

そんなこんなで観てると気づく。・・・おい、まて待てまて。おかしいだろ、オイ。

「…………なあ、あの悪魔『枷』無くね？」

おかしい。いくらなんでもおかしい。悪魔召還とはどうしても異なる異界から召還するからか特別な召還陣でも敷いて、何らかの制約でもつけないと完全な状態で召還できない。なのにあんな無造作に召還。しかも二体同時に召還されたつてのに特に力を抑えつけられていたようには見えない。どうしてだ？ 召還したのが真祖だからか？

「…………ああ、周辺の奴らもそう言ってるな。記録しとけ。」

それに気づいていたらしいバグも監視を続けながら手元の羊皮紙に何やら高速でやたら書きこんでる。もしあの真祖の吸血鬼が悪魔を大量に無制限で召還できるとしたら厄介なことになるな。やっぱり予言者様の危惧は当たっていたか……。

そうして前線でそんなキチガイな化け物と戦っている執行者二人に、現在分かった敵の癖などを伝えようとしたその時、彼は人生最大の失策を犯した。

一瞬、ほんの一瞬そばの観測者から眼を離し、鉄則である周囲への警戒の意識も逸らした瞬間。

それはあまりにも致命的な、『空白』だった…… 潜んで
いた真正銘の『悪魔』にとって、それは致命的過ぎた隙だった。

己の至近距離より突如として発生した熱、衝撃、閃光。それが彼の
身体の全てを白色の世界へと包み込んだ。

「え？」

影を『門』^{ゲート}で通り、その地へと降り立つ。全身を粒子のように分解して闇と同化した意識が再び再構成される感覚が身を包む。

何度やっても違和感を覚えるな、と考える。

目の前にはもうもうと先程起こした爆発の影響で発生した土煙が舞っている。高台に位置するそこから辺りを見渡すと同じような煙が二十ほど上がっていた。

「ん？」

煙を強引に風を操って晴らすと其処には惨状があった。

爆心地周辺には鮮血で描かれた不格好な模様が描かれている。周囲には恐らくそこにいたであろう人物の臓物やら肉片やらが散らばっている。まるで幼い子供が遊び散らかした粘土のようにそこは散らかされていた。

ピンク色の“粘土”は辺りのへし折れた木やら少し離れた枝やらにもぶら下がっている。しかし、前衛的なオブジェにしても性質が悪すぎるその惨状を見ても「アレは腸か？　そういや最近ホルモン焼きとかやってねえな」とか呟いている男の存在が更にその光景を異様で凄惨なものに変えていた。

しかし、その紅く染まった朱の世界の中でもぞもぞと動く何かがあった。

ふんふん　と鼻歌交じりにそこに近づく。

「あれ？　まだ生きてんの？　お前？　ある意味不幸だなあ」

ゲボツ、と赤黒い汚い血を口から吐瀉物のように吐き出しながら倒れ伏している男の目の前に立つ。その男の状態は見るも無残なも

のだった。

上半身と下半身は右のわき腹の辺りがかるうじて繋がった状態だが、左側は対照的にほとんど吹き飛んでいる。それどころか背骨を露出させてしまっている。内臓も幾つか足りない。恐らく限りなく爆心地の近くにいたのだろう。

左腕はどこかへ吹き飛び、足も内側へ捻じれている。顔も最早原型は留めていない。爆発の熱で傷口が焼かれて出血がケガの割に少ないこと、そしてそれ程のケガを負って即死せず、意識も残っていたことは彼にとっては耐えがたい苦痛の時間を引き延ばすだけだった。

「ヴあ、あああぎ、ぢ、くじよオ」

気管と肺を灼熱の温度と化した爆風に焼かれて息をするだけで痛い、本能は少しでも死から逃れようとヒューヒューと異様な音を立てながら胸を上下させる、がその僅かな動きでさえ苦痛を生み、その苦痛が意識を失うことを阻むという悪循環が生じていた。

「ハイよつと」

そんな激痛に耐えている男の事情など知ったこと無いと言わんばかりに、ノアはその男の首に手をやり片手でぶら下げてその眼を合わせる。

新たに生みだされた激痛に必死に耐える男にニコリ、と微笑みかけるその笑みはどこまでも恐ろしく残酷なものだ、と男は恐怖する。何故ここにいる？ とか、今一体何が起こった？ とか。そういう疑問全てを忘れさせてその感情はその男の全てを支配した。

只々恐ろしい、と。

「よう？ 襲撃者？ お前さんはまだ生きてるみたいだからな。最大限に有効活用してやるよ」

まだ、何かするつもりか。この目の前の惨状を鼻歌交じりで歩く恐ろしい吸血鬼はまだ何かするつもりらしい。

まずい。コイツは俺たち後方の部隊を初めに潰したのだろう。まだ辛うじてリンクしている武装兵と前線の執行者との無意識の繋がりがそれを証明している。だが、だからこそまずい。後ろから戦線

を管理している俺たちがいきなり壊滅したとなれば間違いなく混乱する。このままではそのガラ空きの背中を突かれてしまう。先程の吸血鬼が再び現れたことなど知らずにいる前線のやつらまで最悪全滅してしまう。

そして自身の能力の下、無意識下で繋がる前線の味方から矢継ぎ早に情報が入ってくる。

『 ！！ 突然正体不明の敵勢力が現れた！！ 他の部隊にも気を付けるように警告してくれえッ！！！！！！ 』

『クソッ！！ いきなり敵が現れて五人やられた！ 今やっと倒したが…？！ クッソおおおお！！！ まあた現れやがった！ 畜生！！！！ 』

『 ちょ！！？ いきなり新手が現れたんだけど！！？ どうなったんの！！！！？ 』

次々と降りかかる凶報が頭の中を駆け巡る。まずい、混乱が拡がっている。突如として現れた新手に前線が混乱している。

自分から視線を外し、目の前の吸血鬼は薄らと笑みを浮かべながら眼下の狂騒の戦場を睥下している。完全にこの“戦争”はこいつの思い通りの展開になっている。

ちくしょう、ちくしょう。ふざけんな。

情報も持ち帰れず、味方を危機に晒す。

己の矜持に泥を塗りたくられるような屈辱、一瞬激痛を忘れる程にふつつつと燃えあがる憤怒と憎悪の執念が男を突き動かす。

このままこいつの思い通りになってたまるものか、と悪魔を狩る
執行者としての最後の意地を出して残る味方に最後の指示を出そう
と能力を繋げようとしたその時

「
やあ〜と、使ったかあ。 どうも、あ・り・が・と・
う」

蒼く光る双眼をこちらに突如として向ける。 そうして眼があつた
瞬間。 彼は焼け爛れた声帯を震わせ絶叫した。

「ガアアアアアアアアアアアアあああああああ？！！！！！！
！！」

脳を、精神が侵食されていくあああああああ！！？ぎ
やあああ！！！！！！ やめろおおおおおあああああああ！
！！！！！！

無理やり男の持つ思考を乗っ取っていく。オセロの盤上の白を一
手で全て黒に変えていくように、カタカタカタと男の精神の中枢か
ら強引に支配していく。ズタズタに精神を引き裂くような苦痛が彼
を襲うが、目の前の吸血鬼はその蒼眼を向けている。その暴虐な侵
略は瞬きをするよりも更に短い間に行われていた。

白目を剥き、爛れた声の悲鳴を張り上げる彼を無視して完全に能力
を“乗っ取る”

『こちら管制、新敵勢力の観測を開始する。各自奮闘せし』

あちこちで沸き起こる噴叫をにべもなく切り捨て目の前のことに対処せよ、とだけ返す。そうして彼等は音も無く忍び寄る剣鬼に気づかずバタバタと斬り捨てられていく。次々と喪失^{ロスト}していく意識の繋がりの断末魔と絶叫は完全に男の心を折った。

そうして男の矜持と信念を利用しつくした吸血鬼は最後の仕上げに向けて

「無駄な努力、御苦労さま」

その男の全ての情報^血と魔力をその身の糧にした。

第十話（後書き）

感想がございましたらお願いします。

第十一話（前書き）

更新遅れて申し訳ありません。もう少しでこの時代の話も終わりを迎えそうです

第十一話

「ハアハアハア……畜生!!」

脇目も振らず逃げ惑う彼は最近執行者直属の武装兵の任に就いたばかりの年若い男だった。

悪魔と直接戦闘をする機会の多い執行者の元の兵士というものは、組織の中でもエリートであり精鋭であるとして誉れ高いと持て囃される存在である。

彼もその例にもれず、憎き悪魔をこの手で殺すことを夢見て入隊した。日々繰り返し返される地獄の訓練、これまでこなした任務の数の分だけ彼の確固とした自信となっていた。

しかし

（まじでありえねえ!!　一体何なんだ!!　何が起きてる!?!）

真祖に逃走を許したということで近辺の裏の痕跡を隠ぺいする作業をしていた時に突如として現れた襲撃者。いや、あれは人間なのか？

一切の生者の気配を感じさせずに現れたソレは部隊を文字通りの物量で押し潰した。

何とか殺したと思ってても霞のように消えたかと思えば新手が現れるといった具合で切りが無く、次第に仲間が一人、また一人と次々に討たれていく。

終いには周囲を包囲され各自が血路を開いて逃げ出す始末だ。

身体強化で強化された聴覚には次々と途切れることなく見知った仲間の断末魔が聞こえてくる。もはや組織としての機能は完全に喪失していた。

「はあ！ はあ！ 死んで、たまるかあッ！！」

そうしてなりふり構わずに路地裏から表通りへ抜けようとする。魔法の隠遁という点から考えると非常にまずいことだが、今の彼は死への恐怖に完全に囚われていた。

「もうすこ、しい?！」

やっとのことで表通りへ通じる道へと出た瞬間、喉元に熱いモノが込みあがってくる。何が起きたか分からず視線を横にずらす。そこには横の石壁から刀身だけが飛び出た剣が見えた。そしてそれが自分の心臓の部分を正確に貫いてることをゆっくりと理解し、血を周囲にまき散らしながら完全に琴切れた。

そうしてその壁の向こう側にいた剣姫は自分の愛刀を引き抜き、血を振り払ってから念話を飛ばす。それはたった一言で良かった。

「 あとは
」

『北西に四人。まとめて居る』

「了解」

乗っ取ったリンクを辿り生き残りの場所が伝えられ、彼女は一足で近くの高台の屋根の上に飛び上がる。そしてジッと伝えられた方を凝視する。

「……………見つけた」

その眩きと共に気を集中させて、そこに目がけて文字通り“飛んだ”。

独特な風切り音をその身に浴びながら一直線に。

必死に連携を取りながら、ノアの影を警戒しながら安全圏に逃げようとする彼等の間に音も無く降り立つ。

最後尾で後ろを警戒する男の首を撥ねる。その男の前にいた者は、降り立った瞬間に投擲したナイフが喉元に突き刺さり、空回りするような濁った水音を立てながら瞳から静かに光を失った。

そして後ろで起きた異変に気付いた二人がこちらに向いた瞬間に、先程の首を撥ねる動作と同時に投擲された二つのナイフが眉間に迫る。反射的にソレを弾いたその時には既に頭上に移動しており、片方の頭を捻じり折った。ペキヤツと音を立て崩れ落ちる骸を無視して最後の一人に横薙ぎの一閃を放つ。

先程弾いてしまったせいとその手に握る剣による防御は間に合わない。そう判断した男は咄嗟に鞘で受け止めようとする。だが無情にもその存在を無視するかのようになり、鞘どころか魔力強化されていた鎧ごとあっけなく斜めに分断した。

驚愕に目を剥きながら絶命した男の上半分が地面に落下する様を気にもせず、血を払い鞘に納める。その直後に背後で砂袋が落ちるような音がした。全てが刹那の出来事。文字通りの“一瞬”だった。

喧騒が、止んだ。

それは悪魔を狩る尖兵が、全て息絶えたことを示していた。

「ツバイ！ ツバイ！ 返事しろ……クソオツ！！！！」

苛立たしげな声をあげる。もう何が起きているのかは分からなくても自分が置かれている状況は理解した。何だ、逆戻りしただけか。

ここは再び“死地”になった。それだけの話。
そうして私は先刻から幾度となく交わした応酬を繰り返した。響く残響と衝撃に顔を歪めながら眼前の悪魔を睨みつける。

「そう、目の前の俺に集中しろ」

静かに相対する悪魔は私に囁く。とても面白そうに。何か秘密をこっそりと教えるように。

「私は我が創り手に似て意地が悪くてな……少しでもつまらなくなるとあっさり壊したくなるのだよ。脆くて弱き肉体のお前らを」

囁いた言葉に実なんてものがあるわけがない。文字通りこいつ等は悪魔なのだから吐き出される言葉は私たちを惑わせるために存在する。

「故にだな？　まあ、“せいぜい”がんばれ」

飽きられないようにな？　そうほざく糞つたれに蹴りをブチ込む。鍛え上げられた体躯が小石みたいに吹っ飛ぶ。それに追いつがるようにして駆け

「見えてんだよオ!! 愚図が!!」

ずに背後から放たれる魔弾を回避し、合わせるようにしてこちらにも魔法を放つ。それがカウンターとなってその悪魔の足を一本吹き飛ばした。痛みに顔を歪める悪魔の顔に膝をブチ込んでさらに歪めてやった。

「死ねえい!!」

そうして私が吹き飛ばした悪魔にヴァートの腕が飛来して脳天に突き刺さる。しかし、それでも容赦なく放つ雷の斧によってその身を粉々にした。還る暇もなくその身を消滅させる。

「……チッ」

更に先程吹き飛ばした悪魔の影をヴァートの影の魔法『影縫い』が一瞬で打ちつけ封じていた。

「これで」

右手に全ての気を集中させて、その悪魔に向けて疾走する。

悪魔がニヤリと笑った。動けない癖に　　！！　と思考をそこで止めて右に形振り構わず身体を寄せる。カツ　と辺りが一瞬の閃光が発生した瞬間、激痛が奔った。時間差で襲いかかる衝撃波によって弾き飛ばされそうになる。だが、私はギリギリと歯ぎしりしながら沸き起こる怒りでそれを堪える。

「イェー」
悪魔！　動けない癖に口からバカみたいな密度の魔力の塊を飛ばしやがった！！

その塊は私の左腕の肩から先を跡形も無く吹き飛ばし、それでもそのまま直進して、術の制約で動けないヴァートの胸から上を消し飛ばした。ぐらり、と崩れ落ちたその身を見ながらソイツは口端を釣り上げ嗤う。

ざまあみる

そう悪魔の口が動いた。だが、それは！ お前もだよオ！！！！
悪魔がああああ！！！！

「
終わりだああああああ！！！！」

左から溢れだす血しぶきを気にもせず、拳を振り上げて、その悪魔の顔面にブチ込んだ。術の効果が切れるか否かのギリギリながらもその一撃は叩きつけられた。固い殻を纏った果実の身のように中身がはじけ飛ぶ。間拔けな断末魔を残してソイツは絶命した。

・ ・ ・

どさりとその身を近くの壁に抛りかける。ようやく、終わった。

「はあ……はあ……ッ！」

ゆつくりと腕を再生していく。痛い。極限状態に長時間おかれた精神の疲弊が能力の発動を阻害する。常に“自身の最高の状態”を投影し続けることで実現する奇跡。手足が千切れようと、何が起ころうとも自身が死と敗北に心が折られない限りは戦えるというキチガイな能力だ。だが、この能力は一切に動じない心が前提としてある。想念がぶればまずこの神具はその奇跡を起こさないのだ。その位元々の扱いが難しい代物なのである。そう、歴代の使い手達も他者の姿という具体的なものに変装する位にしか使えなかったものなのだ。

……そして今回の自身の“最高の状態”などという抽象的なものはとてもではないが明確に投影することは不可能に近い。しかし、アイリはその壁を越えた。自らの壁としてあった障害を超えるそのときに、これまでであった能力の上限までも飛び越えたのだ。

だが、その代償は大きい。

「く……ふっ……!!」

能力をゆつくりと解除する度に全身に妙な違和感が残る。まるで自身の身体ではないような感覚がその身を包む。腕が足が千切れ、全身が魔法で焼かれる度にその事実を否定して投影してきた。その結果彼女の身体は今現実と虚像の境の拒絶反応が起きてしまっている。

痛む身体とギシギシと軋みをあげる精神。その境目がまるでささくれだった皮を剥がすようにみちりと音が立つ。そんな想像が書き立てられるほどにきわどい状態であった。

何とか収めて息を落ち着かせる。額に滲んだ汗を拭って、さあ立とうと思った瞬間だった。

ドスッ という背中に感じた衝撃は激痛に変わる。一瞬の意識の空白を経て、口の端から紅い鮮血を垂れ流しながらも何とかゆっくり視線を下に移した。

私の胸から飛び出た手が、その手の内にビクビク痙攣する肉塊を掴んでいた。

私がソレが何か認識する前に首筋にだれかの顔が寄せられる。そしてその何者かは私を背後から抱きすくめるようにしてポツリと、囁いた。

「
ただいま」

そうして気付く。その声。視線を更に下げると気付く。ソイツの上半身だけが私の壁の影から飛び出すようにしていることに。

やられた。

何時の間に影に“道^{ライン}”を。いや、そうか。

「…ああ、悪魔を召還した時だよ」

なんて、化け物。どこの世界に全く系統の違う魔法を同時に行
使用する存在がいるというのか。“門^{ゲート}”“召還術”“締結^{マーキング}”どれも高
等魔法だ。私の思考を読むようにして答える背後の存在に戦慄を感
じた。私は、最初から最後までコイツの掌の上で

「なあ、気分は？」

最低なやつめ。様々な意味を持っているであろうその質問に私は二
やりと嗤いながら答えた。

「ええ、そうね。」

案外何とも思わないものね」

負けたことも、あつさりだまされたことも、これから自分が死ぬということも、案外なんとも思わないものだ。むしろ精一杯生きたという想いだけしかない。これまで生きてきた中の幸福も不幸も全てが私のものだ、と胸を張って死ぬ。何という、満足感。それにこんな最期はいつかは遂げるものだと思えていた。それに考えていたよりもずっとましな最期なのかもしれない。

その答えを聞いて、後ろのコイツは面白そうにクスクス笑ってこういった。

「　　良い旅を。アイリ。お前のような面白い人間のことを俺は忘れない」

「……ええ、私もあなたみたいな性格の悪い吸血鬼ばけもののことは忘れないわ。まあ死後は会わなそうだけど、ね」

激しい睡魔に抗いながら、私は最期の言葉を目の前の敵に送ることにしよう。

『おやすみなさい』

静かにその眼を閉じて、安らかな休息を迎えた。これまで、ただ前を向いて走ったその生に安らぎを。

こうして牙は、長い夜は終わりを迎えようとしていた。

第二幕最終話（前書き）

ようやく満足いくラストになった……お待たせしました。

第二幕最終話

ようやく辿りついた。もう、終わってしまったようだが。だが、まだだ。まだなのだよ。なあ吸血鬼？

それは突然だった。

カラカラカラカラ……

ゆっくりとアイリの遺体を地に横たえて胸の上に手をおいた俺が聞いたのは、その妙な音。何かの金属を擦るような波長の高い音だ。ゆっくりと背後を振り返った。そして、そこにいた男を睨みつける。

そいつは真っ白だった。白いローブに、真っ白なフードと左手には鋭いナイフ、右手には金属の棒を引きずりながら歩いていた。ただその眼は気に入らない。気に食わない。一切の感情を排した瞳に映るものではなく、【虚】そのものだった。

「で？ お前は何だ？」

そこで口の端を男は引き裂くように左右に広げた。ぱっくりと引き裂けた笑みを見て　そこで俺は理解した。成程、こいつも外れた人間か。異端を狩るために異端となった狂人。脆弱な人間の癖に化け物を駆逐する側に立つ存在^{バケモノ}。

そう理解する。己自身も似たような笑みを浮かべていることには気付かない。

「神の代理人。神罰の代行者。『不死殺し』。呼び方は様々だが、やることは変わらない。

……吸血鬼。主の齎したお言葉に従えば、いずれこの世界を崩壊させる者よ。生と死の理を冒瀆するものよ。神に逆らうものよ。その身の全てを滅ぼしに来た。絶滅しろ、絶望しろ。そして救われる。許されざる罪を背負って　A m e n」

突然現れた執行者との闘争の夜は今ようやく決着を迎える。現行の執行者最強の『不死殺し』と最凶最悪の吸血鬼『語られぬ摂理』との間で生み出された唾棄すべき獣の如き殺し合いを持つて。

「戦」い「争」う。　誰にも語られない、殺し合い。

遅れて辿りついた朔夜は目の前の光景を眺めることしか許されなかった。何せ自らの使える主に命じられたからだ。壮絶な、それについて無邪気な笑みを向けられながら。

（まだ早い、手を出すな、か……）

嵐だ。そこにあるのは正に闘争の嵐だった。

ノアの生み出した影を執行者は金属の棒を一振りしただけでかき消した。その数が一から、十へ。十から百へと増えても関係ない。ただの一振りでかき消された。まるで砂城を倒すように呆気ない。全く持つて理解できない。

だが、ノアは嗤っている。そんな得体の知れない攻撃に晒されて、ゲラゲラとたのしそうに腹を抱えて嗤っていた。そして普段は押さえつけている制限を外し始めていた。

「あひやははははは！！ 何だ何だあ！？ その妙な力は！！？ 意味不明すぎて俺の腹筋が滅茶苦茶だよ！！ 何だそりゃ！！ あはははははは！」

「さつさと滅せられよ。化け物が。貴様は塵も残さず、殺してやる」

そして刃と刃が火花を散らしながらぶつかった。またもノアの影

の剣が消える。だが予想していたのか、ソレを全く気にせずにノアは指を鋭く突きだす。目を抉り取るうとした。

だが執行者は首を僅かに傾けるだけで避ける。

そして両者ともにほぼ同時に全身から気を放出させた。莫大過ぎる“気”はとも同じ次元を生きるものだとは思えない。頬を引き攣らせるしかなかった。

瞬動と同時に斬りつける。甲高い音があちこちで発生する。執行者の顔が驚愕に歪んだ。

普通は始点と終点がはつきりと分かるといふ欠点を持つ筈の瞬動だが、ノアの瞬動はそんなもの関係無いとばかりに自在に方向を変える。

それは無限の軌道と始点を持つ移動術。

人間を超越した吸血鬼だから。そんなものではない。そんな単純な“差”ではない。

“真祖とは破滅の抑止を担う存在”

かつて彼が私に語った言葉だ。そしてそういう意味での真の“真祖”という存在は自分なのだと言っていた。全てを超越し、全ての摂理の頂点を担わされた存在なのだ、と。

かつての神秘の時代の勝者を決めるべく行われた生存競争をその中でも矮小の身で勝ち残ったその身は、比べるのもおこがましいものだった。弱い弱い人の身体とは次元が、規格が、格が違った。

最早捉えることすら叶わない。私の“眼”ですら捉えられない。

もう身体が摩擦で発火してもおかしく無い位の速度に達している。
触れることも叶わないながらも、執行者は懸命に防ぐ。

数多にローブが斬り裂かれ、深紅に染まるうともその眼に絶望は
浮かばない。相変わらずの虚しかない。

身体をバラバラにしそうな空気の壁の生む衝撃波に木の葉のように
飛ばされながらも決して倒れない。直ぐに立ち向かう。越えよう
も無い差を超えるために。

互いに冷笑を浮かべて言葉は交わされる。

「化け物を殺せるのは人間だけだ！！ それは認めてやる！ だが
よお？ お前は俺を殺せるのか？ ええ？ 確固たる意志を持つて
！ この俺の！！ 息の根を止められるのかあ？！ 弱い弱い人間
がよお！！！ 全………てを殺せる俺をお前たちが殺せるのか！！ ああ
” あん？”

「違う。殺すには殺す。だが、私が殺すのではない。神の名の下、
その御手を煩わせないための《剣》。それが私だ。

私は私のために殺すのではなく、ただ罪深き者を滅すための存在
たる私に個は存在しない。人間かどうかではない。重要なのは出来
るか否かではない やるかやらないか、だ。貴様が何である
うとソレは変わらない」

「神やらなんとたとええが無ければあつさりと折れる人種が、確固
たる自己を確立して善悪全てを飲み込む存在に勝てるとも思っ
ているのか？ “神”？ そんなものは俺のバベルの塔でもしゃぶっ

てろ。
自らの足で立つことも出来ぬ脆弱な生き物めッ！！
」

「主の御座す天に唾する存在よ。頂点を気取るその行為許し難し。
他者を食い物にすることでしか生きられぬ傲慢で高慢な生き物めッ！！！」

片や、理解不能な力を行使する存在。片や、人智の及ばぬ次元の力を行使する存在。

はつきり言おう。ここは完全な戦場だ。“個”と“個”の戦闘の規模ではない。もはや戦争……まだ未熟な“個”が立ち入ることなど最初から不可能。

（手を出したくても、出せない）

己の未熟を噛み締める。まだ、『家族』の隣に自らは立てない。支えたい存在を、自分を救ってくれた彼の力になれない。そう思い知った。

固く握りしめた手は赤く滴る。目指すべき頂の高さを思い知り、自らの中に存在した僅かな傲慢を恥じた。

だが、

（いつか私もあそこに……立つッ！）

その剣姫の瞳には熱く苛烈な烈火が宿っていた。

だんだんと全貌が把握してきた。そうノアは結論づける。

先程軽く掠った攻撃の痕を見る。軽く切られたただだ。血が一筋流れる程度の傷。

だが、それが自身にとってどれだけ異常なことか。それを彼は理解していた。

（“再生できない”。いや……違う。俺の再生はいわば魔力で完全に死生の理を屈折させて元の状態に戻すというもの。いわば真祖としての“概念”とっていい。例えどんな状態であろうが、どんな攻撃であろうが関係無い。それが俺の属性であるのだから。対価の魔力のある限り、この身に刻まれた“概念”は機能し続ける）

別に細胞にプラナリアのような再生因子が組み込まれているわけ

ではないのだ。この身に刻まれた概念。俺が真祖の吸血鬼である以上この概念が存在するのは不変であり自明なのだから。事実ただの魔法で負った傷はどれも俺の不死を脅かす脅威にすらならなかった。

ということとは、だ。その概念を無視して与えられた確かな一撃。それから導かれる解。

（ 奴もまた、何らかの概念利用した“武装”をしているということ。そしてこいつは俺のような存在を殺せるということだ ）

そして四方八方から遅延魔法を解放した魔法のフルコースを叩きつける。色取り取りの魔法の射手。そして殲滅するように上空から叩きつける。

「
マレウス・アクイローニス
氷神の戦槌」

しかし、執行者は軽くステップを踏むようにそれらを回避し、左手のナイフで氷の塊を砕いた。

（ あっさり捌きやがって。だが、先程は杖。今度はナイフ。……何故先程のようにかき消さないのだ？ ）

始めの牽制で仕掛けた影を、たかが一振りで一掃した杖の一撃を
使わず、何故態々無駄な動作と隙を生むだけの行動をとったのだ？
……ならば確かめてみよう。同じ手を使うのは気が食わんが。

「また影か……芸の無い。無駄だと先に分かっている筈だが？」

「ほざけ」

また四方八方から影の刺客を襲わせる。そして奴が面倒だと言いつたに顔をゆがめた。

そして杖を振りかぶる。その瞬間に“解析”した。

「つ……！！」

「ほう、避けたか」

目の前まで迫っていた不可視の刃をギリギリで回避する。魔力も
気もほんの僅かに隠ぺいされていた。危うく上半身と下半身が泣き
別れする所だった。事実、俺の左腕は半ばからぱっくり裂けている。
本当に久しぶりだ。止血なんてものしたのは。プランプランとして
いる腕に布を巻きつける。

だが、理解した。なるほど、コイツはやバい。

だから嗤う。笑う。なるほど、コイツは面白い。

「は、ははは……」

「？」

「ふ、ふははははは！！ アハハハハッ！！！！！！！！」

成程成程成程。

「その杖。概念武装した“ハルパー”かあ。あはははははは！！
確かにそりや『殺せる』。確かに俺は殺せるわなア。『不死殺し』。
まんまじゃねえかつ！ あはははっ！！」

「っ！？ もう、見切ったのか……」

そう奴が持っていたのは杖ではなかった。剣であり鎌であるような形状を持つ武器。その刻まれた概念は俺の再生に組み込まれた、というより“不死”を冠する能力の大元となった概念 “屈折延命”をその神聖によって無効化する。

かつての神秘の時代にペルセウスがヘルメスより与えられメドウ

「サの首を断つたとされる、その概念が、物語が、杖に装飾のように刻まれている。これによりこの《剣》の前では自然の理を無視した現象は全て断ち切られてしまう。

これは魔法という自然法則を歪める“歪曲”の理も無効化することである。特にこれを主な属性としている闇や影といったものは完全に無効化される。それ以外の魔法なども行使を阻害されその威力は大きく減衰するだろう。

そしてコイツの恐ろしいのはそこだけではない。コイツ自身が自らの身体に直接ある概念を刻んでいることだ。

「しかも！ 《剣》の概念武装を直接身体に刻むとか！！ あははは！ いいね良いねえ！！ 最っ高にクレイジーだ！！」

「……」

「確かに己を《剣》と化せばその武装の力を完璧に行使できる。それだけじゃねえ。馴染めば馴染むほど、その力は強くなっていくだろう。最終的に魔法無効化能力者もどきになれるかもしれない。それだけじゃねえ。その『不死殺し』の能力を素手で行使できるようになるかもな」

だが、そこで嗤いを浮かべる。

「だが、払う代償はでかい。てめえ、もう恐らく十年も生きられねえぞ！ それだけじゃねえ、四肢も段々感覚が麻痺してきてんじゃねえか？ 馴染めば馴染む程にな？ 最期は廃人確定してんぜ？ あはははは！！ とうかまず何で只の人間がソレを刻んで生きてるんだ？ 文字通り自らの魂を無理やり削って型に嵌める行為だ。普通は死ぬぜ……一番最初の時点で、な」

一頻り嘲笑うと、スツと真剣な顔になる。

「愚かだな。お前が何を思ってソレを刻んだかは知らん。だが、その人の身を外れた力を一身に宿して、その結末を予見できなかったとは言わせない。何がお前にそこまで力を求めさせた？」

「……滅私」

何をバカなことを、と言いたげに男は口を開いた。心なしか胸を張っているようでもある。

「？」

「私の前人生は碌なものではなかった。主の教えに出会わなければ私は犬畜生にも劣る存在としてそこから果てていただろう。だから

だ、感謝。ひたすら感謝した。主の教えに出会えたことに。

例え私の父親代わりであつた神父様が強盗に殺されても、例え妻が悪魔に縋り殺しにされても、例え娘を眼前で事故で失おうとも！」

つらつらと語られる。それまで虚しか移さなかつた瞳に仄かに暗い感情の光が宿る。それは“狂信”だった。

「誰かを失う度に理解した。何かを捨てる度に理解した。救いとは！！“犠牲”なのだトツツ！！救済とは“死”の後に主により齎されるものなのだ！人は哀れな生き物だ。誰かに主張を押しつけなければ、欲望を満たさなければ生きていくことは出来ない。そして何かを得るためには、何かを捨てなければならぬ。私が失つた分、必ず誰かが救われ満たされるだろう」

そして締めくくる。

「そして私は、自らに救いを得るために私を捨てた。それだけだ。私のこの身が果てるまで、私は私の信じる神の剣となる。そう自らを定めた。貴様らのような主に仇なす存在、主の造りたもつた“人を害する不浄の化け物を滅すために存在する剣だ。信じる者は、救われる。それを体現するためだけの存在に……」

沈黙が間に流れる。この闘争の場には相応しく無い、沈黙。こい

つは正しく生きながら狂っている。そしてそれを俺は鼻で笑うことで崩した。

「……ああ、悲劇。最高に幸せな悲劇つてヤツかあ？ 歪んでる歪んでる。だが、実に正鵠を得ている。ある意味、一番間近で裏に葬られてきた真実を見つめてきた“俺”には分かるぞ。

幾ら綺麗事を言っても、幾ら理想を語っても、幾ら最善を尽くそうとも。誰も彼もは救えない。現実には優しくないからな。

誰も傷つかない世界？ 戯言だ。平等な世界？ 戯言だ。どれも己の弱さ、醜さを覆い隠す戯言に過ぎない。誰も彼もが幸せな幸福^{ハッ} END^{ビエンド}なんて空想の中にしかない。救いの本質は“犠牲”それは否定しない」

だからこそ鼻で笑った。

「もつとも、一番大事なことは忘れてるけどな？ なあ？ 軟弱者」

「……何？」

「結局は向き合うべき時に向き合わずに逃げ出したんだよ。てめえは。お前は少なくともその払った“犠牲”から何かを託された筈なんだよ。絶望から立ちあがった後にテメエがやるべきことは何だったのか。……教えの禁忌を破り、自殺すべきだったか？ 墮落し、

欲に塗れるべきだったか？ それとも身を削つて、血で血を洗う殺し合いに興ずるべきだったか？」

そこで吸血鬼の魔眼は蒼く光る。悠久の時と悲劇を見つめ、全てを見透かす光を宿して。

「てめえは、全てを受け止めきれなかっただけだ。近くにあった耳触りの良い矜持にそのまま縋った。耐えきれなかったからな。これ以上傷つきたくなかったから己を捨てたんだ。救い？ 違うね。ただ楽になりたかったんだ。先に語った崇高な目的など口先だけの逃避だ」

え

切開切開切開切開切開切開切開切開切開切開切
開切開切開切開切開。

歪んだ笑みを浮かべて根底を切り開く。決り出す。

「想い重い思い。何かしら託されたんだろうが、お前では耐えきれなかった。お前は託されたことを果たす中で生きるべきだった。」

また、誰かに愛されるべきだったんだ。だが、逃げてしまったお前は、その重荷を放り捨ててしまったからな。もう、戻れないんだ

よ。誰も愛せないし、誰からも愛されない。お前は何も考えない“
 劍”になっちまったんだからな」

「ま、れ」

そうして思い出す。この数年を。俺に向けられる、徐々に感情を取り戻してゆく暖かい笑みを想い浮かべる少女を。自分は十分甘くなつてしまった。だが、誰かに俺はこの数年確かに他者から愛されたのだ。そして思い出した。取り戻したのだ。

これまで唯一人で恨まれ憎まれ、……殺され。“結果”世界はうまく回る。実に合理的な構造だった。何せ“犠牲者”は一人だけだ。だが、これまで落としてきてしまったものを俺は思い出した。これは、絶対にいらないものなんかじゃない。それを俺はほんの少しだけ思い出せたのだ。それを自覚した時　俺は確かに“救われた”のだ。

「己を捨てたテムエは
まったんだよ。間抜け」

捨てちゃいけねえもんまで、捨てち

[illegible]

疾走する、間抜けなどこまでも人間らしい愚者。いや、耐えきれなかった優しい軟弱者。

俺は気付いた。いつの間にか落としちまってた大事なものを。取り戻せるかどうかはわかんねえが……何を信じ、何を失い、何を望んで、何を得て、……何を、護るのか？ それを決めるのは、俺だ。糞ったれの上位の神なんてもんじゃねえ。

もう踊らされているだけの人形は飽きた。まあ、今更この穢れきった悪党の悪行も魂も手おくれのレベルなのかもしれねえ。だから、俺は俺の答えを出した。

「俺の答えは。平等に全てを愛して、分け隔てなく殺してやるよ。立ちふさがる全てを愛し、殺す。そんな化け物じみた“人間”になつてやる。どこまでも血に塗れた救いをもたらしてやらあ。
俺自身と一人のためにな」

蒼い光が輝いた時、男はペタリと膝を立てて座りこむ。そして暫し自失した人間は自らの首を断った。すんなりと、禁忌を犯した。

確かな安らぎに満ちた穏やかな笑みを浮かべながら。彼

はどこまでも救いのない“救い”を得たのだった。

第二幕最終話（後書き）

ネギまらしくない。だけど、そんな救いの無い“殺し合い”が書きたかった。あと、文章が少しでも読みやすくなっているなら良いですね。

・ノア

ようやくこの作品のテーマに触れられた。何か大事なものを落とした悪党が少しづつ不要としたものを取り戻していく。今回彼は大きな目標を立てました。

・朔夜

彼女は自らの大事な人を決して一人にしたくない。だけど、まだ隣に立てていない事実には憤慨する。“甘え”を自覚します。少なくとも彼が自然に笑えるように、背中によりかかってくれる存在を目指します。

・アイリ

人間という存在の、どこまでも誇り高い“弱さ”を肯定できる人間。そして自分の信じるものを最期まで信じ抜いた。

・ヴァドレッド

どこまでも優しく、どこまでも強かったがために、誰よりも弱くなってしまった人間。最期は救いを垣間見て自害する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9089n/>

～ 匣庭物語 ～

2011年9月15日06時01分発行